



# 母親の現代を どうとらえるのか

●  
尚美学園短期大学教授  
深谷昌志

## 杓子渡しの伝統

「母親は変わったか」が本号のテーマである。現代の母親が変わったのはたしかであろうが、問題は母親がどう変わったかであろう。現代の母親だけをみてみると、変化の方向がわかりにくい。そこで、母親の現代をとらえるために、歴史的にさかのぼって、一昔前の母親像を探ると同時に、他の社会との比較の中で母親像をとらえてみよう。

江馬三枝子さんの『飛驒の女たち』という本がある。昭和18年の出版なので、図書館へ行かないと読めないが、この本は飛驒の白川郷で暮らす女性たちの生活をこまかく記録した本だ。

同書によると、明治はむろん、大正でも、家庭は自給自足の単位で、外から買ったのは塩と鉄分、油くらいに限られていた。ということは、醤油や味噌などの食べ物はずべて、それに、着る物も自家製だった。母親たちは糸から生地を作り、染色して、ひとりひとりの着る物を仕立てていったことになる。

電子レンジや冷蔵庫、炊飯器などはいまでもないが、水道や電気、ガスなどもない時

代である。そうすると、ご飯を炊くにも水汲みやかまどに火を燃すことから始めなければならない。というより、ご飯を炊くこと以前に玄米を精米する必要があるし、さらにいえば、米は年に何回かの特別な日の食べ物で、残りは稗や粟を食べる生活だった。

しかも、東北や日本海側のように冬の長い地域では、一家の生活は主婦の切り盛りのうまさにかかっていた。高山の赤かぶ漬けや信州の野沢菜漬けなどは冬を乗り切るための技術として女性たちに受け継がれてきたものだ。

かつての主婦はそうした重要な意味を持ち、しかも、かなりの力量を必要とするので、結婚したからといって、すぐに一家の切り盛りはできない。そこで、結婚をし、何年間かの修業期間の間に家事全般の力を身につけていく。

そして、嫁の力がついてきたと思ったとき、多くは大晦日のようだが、姑が嫁に杓子<sup>しやくし</sup>を手渡す。それが、「杓子渡し」で、その瞬間から、家庭の切り盛りをする権利と責任が姑から嫁に移る。なお、同じときに父親から息子に農業の台帳を渡し、農作業を統括する責任を委譲する「身<sup>しん</sup>上<sup>しやう</sup>渡し」が行われる。

一昔前、農村調査をすると、おばあさんた

ちが、「いつ、杓子を渡してもらえるのかその日が待ち遠しかった」「杓子渡しをされた日の晴れがましさを一生忘れられない」と話してくれたのが印象的だった。

## 性差にとらわれない生活が可能に

「大草原の小さな家」というテレビドラマがあった。西部開拓時代のアメリカの家族の生活を描いたものだ。あの夫婦の場合、父親は狩猟をしたり鉱山に勤めたりして家に収入をもたらし、母親は料理をしたり衣類を繕ったりして家の中のことをやる。つまり、外での仕事は父親、家の中のことは母親というように性差に対応した暮らしを送っていた。

長い間、多くの社会では父親と母親とが役割を異にしながら、しかし、協力し合って家庭を作ってきた。大正時代に、サラリーマンが誕生した。その頃は、背広や靴下が高価な物で、衣類の管理は妻の大事な仕事だった。

母親が夜なべ仕事をして手袋を編んでくれたという有名な歌は、ごく普通の暮らしを歌ったものだ。加えて、外食産業やコンビニのない時代なので、男性は弁当を持って会社へ行くのが一般的だった。妻の助けがないと、夫が外で仕事ができない時代だったのだ。

性差のない社会を目指すといっても、当時では無理な注文で、歴史的には性差をふまえた分業が一般的だった。しかし、水道や電気、そして、電気冷蔵庫や掃除機、洗濯機の普及

によって、家事の省力化が可能になった。さらに、スーパーやコンビニ、コールドチェーンなどが定着し、質のよいハーフ・メイドの食料などを安く簡単に手にできるようになった。そうした形で家事が楽になると同時に、男性の仕事も軽減され、現在では、性差にこだわる必要がなくなりつつある。

そうした意味で、かつての社会では性差に束縛されて生きざるを得なかった。それだけに、ジェンダー・フリー（性差にとらわれない）の生活というのは、それぞれが自分の生き方をできる訳だから、現代社会のもたらした優れた贈り物のように思われる。

## 東京の母は「バランス感覚のよさ」

ジェンダー（性差）の問題は社会によってかなり開きが認められる。したがって、欧米のそれぞれの社会を背景に登場したジェンダー論をそのまま日本に適用できないのはいうまでもない。ここでは、日本に近いという意味で、東京と比較して、ソウルと北京の母親事情を考察することにしよう。

こうした比較調査を行うと、それぞれの都市によって母親の姿そのものが異なっているのがわかる。下記の表の就労状況が示すように、北京の母親の87%はフルタイムで働いている。それに対し、ソウルの母親のフルタイム率は18%で、43%の母親が専業主婦の生活を送っている。

## 母親の就労状況

(%)

|     | フルタイム | パートタイム | 専業主婦 | 自営業など |
|-----|-------|--------|------|-------|
| 東 京 | 19.2  | 30.8   | 29.1 | 20.9  |
| ソウル | 18.2  | 4.9    | 43.4 | 33.5  |
| 北 京 | 86.9  | 3.3    | 1.8  | 8.0   |

「北京＝フルタイム」「ソウル＝専業主婦」が印象的だが、東京の母親を特徴づけているのはパートタイムで働く人の多さで、母親の31%を占める。もう少し詳しく、東京の母親たちの就労状況を調べてみると、結婚まで仕事を持っていた人は74%に達する。しかし、62%は結婚あるいは出産を契機として仕事を止め、専業主婦の生活に入っている。そして、23%が子育てが一段落し子どもが小学校高学年になってから仕事を再開している。「結婚前後に退職し、子育てが一段落してから仕事を始める」いわゆるM字型の就労形態だ。なお、結婚前から現在までフルタイムで働き続けた人は9%にすぎない。

そうした意味で、東京の母親に家事・育児か仕事かのどちらにも片寄らずに、家庭を優先させながら社会復帰も目指すというバランス感覚のよさを感じる。

### 「子どもに献身的」なソウルの母

母親たちに「子どもの意味」を尋ねてみた。「子どもの成長が楽しみ」と感じる気持ちはどの社会の母親にも共通している。そうした中で、ソウルの母親の54%が、子どもを「家（名）を継ぐ存在」とみなしているのが興味を引く。ちなみに、日本の母親がそう思う割合は8%にとどまっている。

現在の日本では「家名を汚す」などという感覚はほとんど失われている。しかし、韓国では、特に男性は「ジョクボ（族譜）」を意識しているといわれる。ジョクボは一種の家系図で、ジョクボを見れば、自分がどこの出身で何代目かがわかる。そして、韓国の男性たちは、祖先から家柄を引き継ぎ子孫に家名を残すつなぎ役として自分が存在すると考えている。したがって、子どもが生まれたら、わが子を立身させ家名を高めたいと願う。それだけに、女性にとって大事なのは男子の出産、そして、その子を社会的に成功させることになる。

ソウルで母親たちの話を聞く機会があった。

ある母親は、大学で英文学を学んだから英語を生かした仕事につきたいと思った。しかし、韓国の受験状況はきびしいので、母親が働きながら子どもに望み通りの進学を期待するのは困難だ。残念だが、専業主婦として子どもの教育にあたることにしたという。

テレビなどで水ごりをしたり、お宮参りをして子どもの合格を祈る韓国の母親の姿が紹介されることがある。実際にソウルでは大学入学は「3当4落」、つまり、4時間寝ていたのでは名門大学への進学はおぼつかないといわれる。そうした難関を突破し、一流大学に子どもを進学させ、家名を高める。そのためなら、どんな苦労でもいとわないのがソウルの母親たちの心情となる。

なお、子どもを大学に進学させたい割合はソウル95%、北京71%、東京66%だが、その中でも、「なんとしても一流大学へ」と願う割合は東京の13%に対し、ソウルは39%に達する。

### 「一人っ子を大事に」育てる北京の母

中国というと、一人っ子政策を連想する。たしかに、日曜の午後など北京の繁華街を歩いていると、一人っ子と手をつないでいる若い夫婦に出会う。子どもが夫婦の宝という感じで、子どものことを「小皇帝（小太陽）」というのがよくわかる。

北京で40代の母親たちに話を聞いてみると、母親たちは悩みの多い生活を送ってきた。8歳のときに文化革命が始まり、学校で勉強もせずに農村で働いた。10年間にわたった文化革命が終わり、ほっとしたのもつかのま、結婚直後に急激な人口増加を抑制するために、一人っ子政策が始まった。一人っ子政策に協力しているうちに、改革開放政策が進み、従来のような社会主義体制の色彩は急激に弱まった。そうなる何何を信じたらよいかわからなくなった。でも、一昔前と比べると自由にものが言えるようになってうれしい。だから、せめて家族を大事に生きていきたいという。

なお、中国では第2次大戦後、内戦が続いたので、女子も積極的に仕事に従事していた。それだけに、乳幼児期の育児施設は充実していて、土日を除いて24時間の保育をする「全託」が基本で、子どもを夕方引き取る「日託」は少数にとどまっている。

「あなたが仕事を持っていたとして、小学2年生のお子さんが38度の熱を出したら、あなたは仕事を休むと思いますか」の問いに、北京の母親の72%は「休まない」と答えている。仕事と育児かの究極的な選択を迫られたとき、仕事を優先するタイプなのであろう。それに対し、ソウルの母親の74%、東京の61%が「休む」と答えている。子育てを優先させるタイプだ。

こうした国際比較調査を行ってみると、東京の母親がソウルほどではないが子どもを大事にし、優雅で自由な生活を送っているように見える。それでも母親たちの62%は「なんとなく毎日がむなしい」と感じ、67%は「何かに打ち込みたい」と答えている。幸せなのはたしかだが、何か満ち足りない。そうした悩みが深いのが東京の母親なのであろう。

## 束縛から解放されて

このように見てくると、現代の母親がよくも悪くも束縛から解放されているのを感じる。歴史的にみると、女性という役割期待に束縛

され、その枠組みの中でしか生きられないのが過去の女性であった。また、国際比較を試みてみると、それぞれの社会の社会的な背景から女性の生き方を拘束されているのがわかる。

現代の母親、特に30代半ばの母親は昭和30年代中葉に生まれた人たちである。団塊の世代は戦前生まれの親のしつけを受けたし、社会そのものも豊かとはいえない状況なので、伝統的な母親規範から離脱していない。それに対し、新しい母親は豊かな情報化社会の中で生まれた第一期生にあたる。テレビがあり、マンガ雑誌とともに成長してきた初めての世代である。それだけに、過去の女性規範から解放された人々である。過去の母親規範を抱えている年長の世代からすると、現代の母親に異邦人にも似た感じを持つかもしれない。しかし、若い世代は束縛がないから自由に振る舞っているのであって、何かを含むところがあつての行動ではない。

束縛された時代からすると、束縛がないことが夢であろう。しかし、実際に束縛がなくなると、羅針盤を欠いた航路のように行く先が定まらない。それだけに、これから今までの枠では考えられないような母親が登場しよう。そうした母親世代が自分たちの母親らしさをいかに構築していくかが、これからの課題であろう。

〔調査レポート〕

# 母親は変わったか

—若い世代のお母さん—

|                |       |
|----------------|-------|
| 東京学芸大学教授       | 深谷和子  |
| 昭和女子大学助教授      | 熊澤幸子  |
| 文教大学女子短期大学部助教授 | 石川洋子  |
| 聖徳大学短期大学部助教授   | 夏秋英房  |
| 育英幼稚園副園長       | 河村真理子 |
| 東京学芸大学助手       | 中澤智恵  |



## 『モノグラフ・小学生ナウ』Vol. 17-1

## 調査レポート

## 母親は変わったかー若い世代のお母さんー

## 要 約

## ●調査概要

1. 調査主題 母親は変わったかー若い世代のお母さんー
2. 調査視点 時代の急速な変化の中で、現代の母親は、われわれの中にある「母親」像と変わってきているのだろうか。そうした問題意識から幼児と小学校低学年児をもつ母親に焦点を当てて、若い母親の意識とライフスタイルを明らかにすることを目的に行ったのが本調査である。
3. 調査項目 育児支援者の有無、家事・育児からの自由度、独身時代と比較した自由度、気がひけること、家事の負担感、増やしたい時間、子どもへの態度、育児不安、ジェンダー観、など。
4. 調査時期 1996年10月
5. 調査対象 東京・千葉・埼玉の幼稚園児・保育園児・小学1年生をもつ母親
6. 調査方法 学校・園通しによる質問紙調査
7. サンプル数 1,511名

1. 母親とはいづの時代でも、愛情深く、子どもや家族に献身的で、ひたむきな姿で、われわれの心の中にいる。しかし、時代のこれだけの変化の中で、母親の実像は今どうなっているのだろうか。本調査は、「小学生の母親」になる少し前、またはなりたての段階の若い母親の意識と行動を明らかにしようといわれた。われわれが日頃接している小学生の母親の、いわば「昨日の姿」である。

2. 今回の調査は主として、以下の諸点を明らかにするために行われた。

①母親という立場に立つと、女性はこのくらい子どもや家族に拘束され、自由度の幅を狭められるか。また過去の社会にあった女性規範、母親や妻としての規範など、いわゆる性役割は現代の若い母親の中にどのくらい残っており、その行動を拘束しているか。

②幼児を育てるというライフステージにいる母親は、どのようなフラストレーションを抱えているか。

③子どもへの態度を支える、または阻害する「育児不安」といわれている意識を明らかにし、その背後にある条件を探る。

④母親のトータルな幸福感、生活充実感は、どのような条件に支えられているか。

3. 調査対象は、幼児と小学1年生の児童をもつ母親1,511名で、調査は1996年10月に学校・園通しによって行われた。30代の母親が7割（図1-1）、また専業主婦が67%であった。

4. サンプルの生活満足度は「とても・かなり満足」が13%、「まあ満足」を合わせると6割となるが、あまり満足でない者もほぼ4割に達する（図1-7）。しかし、女性役割の受容率は高く、8割が女性への生まれ変わりを望んでいる。（図1-8）

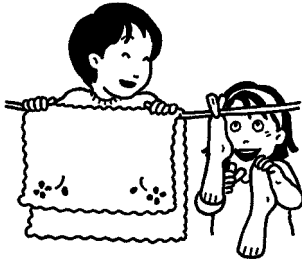
5. 育児支援者をもつ者は64%いるが、そのほとんどが親であり、地域の友人等の割合は低い（図2-1）。また子どもをもつことで、行動の自由度は大きく狭められ、夫の家事協力も依然として少ない現状にある。（図2-2、図2-3、図2-4）



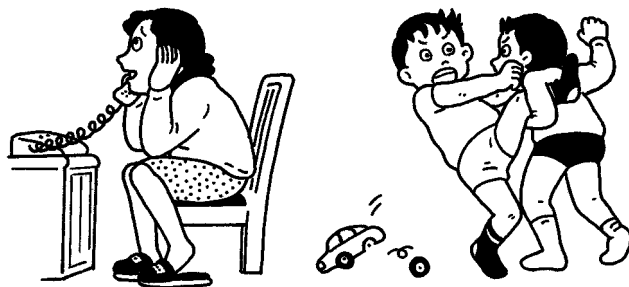
6. 家事や育児について、小さなことは夫に頼めても、母親が夜に外出することは、気持ちの上でかなり気がねがある。（図2-7）



7. 母親たちの家庭内の仕事のうち、最も負担なのは親戚とのつきあいで、次いで夫の世話、掃除、料理。逆にいちばん好まれているのが洗濯で、次いで、子どもの世話となっている。(図3-1)



8. 忙しい毎日の中で、「もっと増やしたい時間」をたずねると、いちばん増やしたいのが自分の時間、次いで友人とのつきあいの時間、睡眠時間となり、夫と話す時間、子どもと過ごす時間は「このままでいい」が多くを占めている。(図3-2)



9. 職業との関連では、フルタイムで働く母親が最も負担を感じているのは、夫の世話である(図3-6)。また子どもと過ごす時間をいちばん増やしたいのもフルタイム勤務者であり、次いで自営業、パートタイムとなっており、専業主婦には、子どもと過ごす時間をこれ以上増やしたいという者は少ない。(図3-8)

10. 育児不安の強い母親は、家事育児に負担感が強く、また自分の時間、友人と過ごす時間をより多く欲しがっている(図3-9、図3-10、図3-11)。また現在の生活に満足していない者も、同様な傾向である。(図3-12、図3-13)



11. 子どもが好きかどうかをたずねたところ、47%の母親があまり子ども好きではないと答えている。また自分をあまり母性的ではないという者も44%に達する。(図4-1)

12. しかし、赤ん坊のときから保育所に預けることは「かわいそう」とする者が85%にも達し、「幼児期からの母親のフルタイム就労はよくない」とする者も84%と圧倒的である(図4-3)。しかし、教育歴が長くなると、その傾向は薄れてくる。(表4-5)



13. 育児不安が高いのは、若く、教育歴が短い者で、一方、教育歴の長い母親、フルタイム勤務者は、育児不安が低い傾向がみられる。(表4-6、表4-9、表4-10)

14. 子ども好きでない母親には、育児不安の高い者が多い。(表4-11)



15. ジェンダー観には個人的属性が反映しており、いくつかの特性が見いだされるが、性役割の受容には、そうした特性の反映がみられない。生活に満足している母親ほど性役割を受け入れ伝統的なジェンダー観をもっている。(図5-1～図5-4)

16. 生活の満足度には、あらゆる個人的属性を超えて、その人の経済水準(ゆとり)との関連がみられる。(図6-1、図6-2)

## はじめに

子どもが変わったといわれる。しかし、子どもと母親に日頃よく接している教員たちによれば、それよりもっと変わったのは母親だという。本当にそうだろうか。例えば――

子どもを平気でほめる母親が出てきている。昔の母親は、わが子のことを謙遜して、または卑下してみせたものだが、最近の母親は仲間内でお互いどうし、さかんに自分の「子ほめ」をしている。教員からも、子どもをけなされると（別にけなしているわけではなく、気になる部分を指摘しているだけなのに）血相を変えて、くっつかかる母親がいる。

連絡帳に親が書き込んでくる文章が、「ハ～イ、先生、こんにちは」という感じで、到底学校に連絡してくる文章とは思えない。私信を花柄やマンガのついたかわいい便箋でよこす母親がいる。まるでティーンエージャーだ。

中には子どもに熱があっても、知らん顔をして登校させる母親もいる。とくに仕事をしているわけでもないのにである。子どもを帰宅させようと家に電話しても、家にはいるはずの母親がたいてい留守である。みんながみんな、どこへ行っているのだろう。こんな話が、次々に出てくる。

しかし、今日のように世の中がこれほど変われば、子どもだけでなく親もその他のおとなも、みんな変わってくるのは当然である。小学生ナウではこれまで、「働くお母さん」（vol.2-7、7-5、8-2）、「日本のお母さん」（vol.13-1）などのテーマで調査を行ってきたが、今回は幼児や小学校低学年の母

親に焦点を当てて、若い世代の母親の子育てにかかわる意識とそのライフスタイルをみるための調査を行った。

母親といえば、世代を超えてわれわれの中には、愛情深く、子どもや家族に献身的で、ひたむきな母親像がある。時代は変わっても、その姿は基本的には変わらないだろうという思いもあるが、もしかしたら時代のこれだけの变化の中で、その姿も変わってきているのかもしれない。

そうした問題意識から、今回のレポートは、

①母親は、どのくらい子どもや家族に拘束され、自由度の幅を狭めているか。また過去の社会の女性規範、母親や妻としての規範など、いわゆる性役割が、現代の若い母親の中にどのくらい残っており、母親の行動の自由度をどのくらい狭めているか。

②幼児を育てるライフステージにいる母親はどのようなフラストレーションを抱えているか。

③子どもへの態度を支える、または阻害する「育児不安」といわれている意識と、その背後にある条件を明らかにする。

等の目的をもって行われた。

幼児をもつ母親を調査対象にしたのは、もし母親が変わってきているとしたら、このライフステージにいる母親の中に、いちばんはっきりとした形で、その変化が現れるのではないかと考えたためである。

以上のように本調査は、小学生の母親になる少し前の段階の若い母親の意識と行動を対象にした調査であり、われわれが日頃接している小学生の母親の、いわば「昨日の姿」である。

## 1

## サンプルの属性



## ●年齢と教育歴)))

まず、今回のサンプルである母親の属性についてみていく。

母親の年齢は図1-1が示すように、30代が7割強を占め、平均年齢は35.1歳、巻末の集計結果によれば、95%が夫と同居している。

また図1-2によれば、家庭の収入源は「夫の収入のみ」が7割、「夫の収入が中心の共働き」が2割で、「経済的にほとんど平等な共働き」は、1割にも達していない現状である。

また図1-3が示すように、子どもの数は2人が半数を超えるが、3人かそれ以上も28%いる。表は省略したが、一番下の子どもについてみると、入園前・保育園児・幼稚園児

が全体の9割を占める。今、子育ての真最中である母親の姿がみえる。

また巻末の集計結果が示すように、母親の教育歴は高卒者が半数、短大卒が36%、大卒かそれ以上が14%と、全体にかなりの高学歴である。夫は高卒44%、大卒かそれ以上が44%。

さらに母親の職業は、67%が専業主婦で、いわゆる就労状況の「M字カーブ」の真ん中に位置する人々である。しかし、パートタイム15%、自営業8%、フルタイムで働いている者も7%いる。夫の職業は79%が会社員・公務員であり、自営業が16%となっている。

図1 - 1 母親の年齢

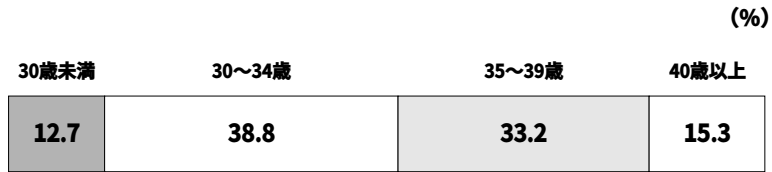


図1 - 2 家庭の収入源

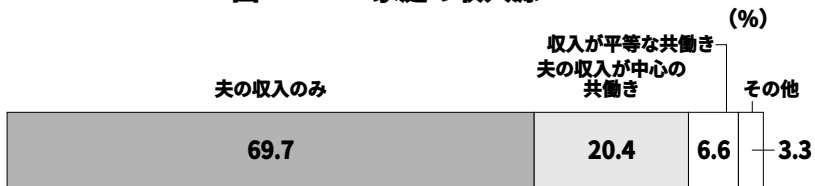
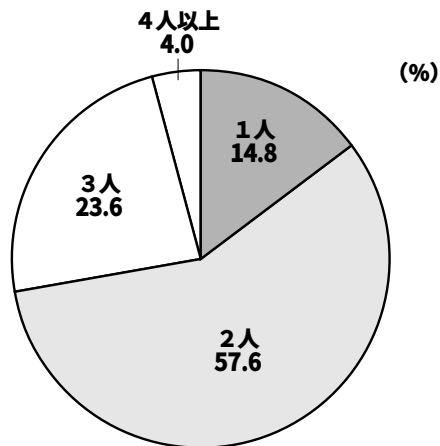


図1 - 3 子どもの数

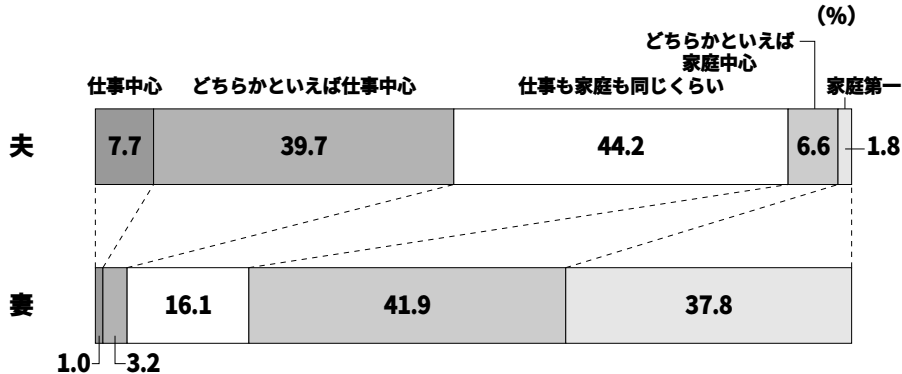


## ●ライフスタイル)))

サンプルのライフスタイルを、「仕事中心か家庭中心か」の角度からみると、図1-4が示すように、夫を「仕事中心」と言い切る者はわずか8%、「どちらかといえば」が40%、合わせても「仕事中心」に生きる夫は5割にすぎない。「家庭第一」はさすがに1割を切るが、「仕事も家庭も同じくらい」の夫が44%とは、一昔前なら考えられない数字だろう。男性の家庭志向が強まったことを実感させられる。それに比べて、女性の側の変化は少なく、相変わらず圧倒的に「家庭第一」で、「仕事中心」は「どちらかといえば」を加えても5%を切っている。

次に育児と家事を援助してくれる者がいるかどうかをみるために、両親の住居との距離をみてみる。巻末の集計結果によれば、夫の両親と「同居している」者が18%もあり、「徒歩圏」を合わせると、ごく近くにいて育児等の援助をしてくれる可能性のある者が3割。自分の両親と「同居している」者も8%、「徒歩圏」に15%で、合わせて2割を超える。「電車で1時間」をいざとなれば駆けつけられる距離にいる者と考えれば、夫の両親で3割、自分の両親は4割いる。トータルには、6割程度が親と比較的近くに住んでいることになる。

図1-4 仕事中心か家庭中心か



また図1-5で、老いた親の世話をする必要性をみよう。親と「同居していない」者が65%と3分の2近くおり、同居している場合も2割は現役、自分の身の回りを自分でしている元気な親が1割。世話を必要とし始めている親はわずか4%でしかない。比較的負担の軽い段階にすることがわかる。

母親の経済的側面をみてみると、巻末の集計結果が示すように、自分自身の小遣いは「5千円以内」が約半数、「1万円くらい」と合わ

せると76%になり、経済的には、思うようにならない状況がわかる。しかし自分名義の預貯金は7割が持っており、へそくりも4割近くがしているのは、なかなかである。

また自分の家庭の暮らし向きについては、ストレートな聞き方を避けたが、図1-6が示すように、「かなりゆとりがある」はわずか2%、「少しゆとりがある」が38%、「あまりゆとりがない・ゆとりがない」とする者が6割に達する。

図1-5 年寄りの世話

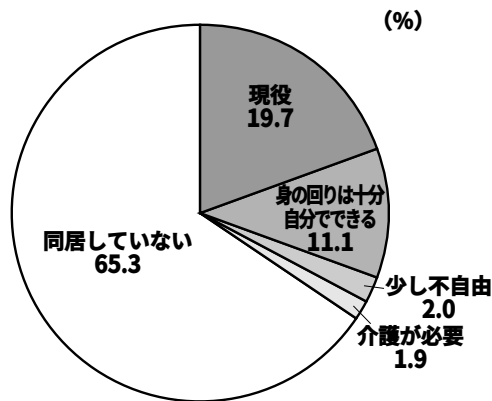
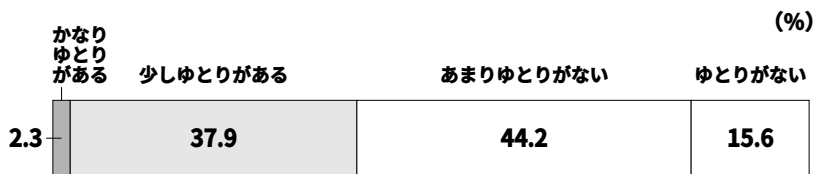


図1-6 生活のゆとり



## ●生活の満足度)))

さて子育て真最中で、経済的にもゆとりの少ない状況にいる母親の生活の満足度はどうか。図1-7が示すように、トータルに判断して現在の自分の生活に「とても・かなり満足している」者は13%しかいないが、「まあ満足」が5割で、合わせると6割、数の上では不満足な者の4割よりやや多くなっている。この中でどんな条件にある母親が満足か、不満足かが重要であろうが、この点は後の章で

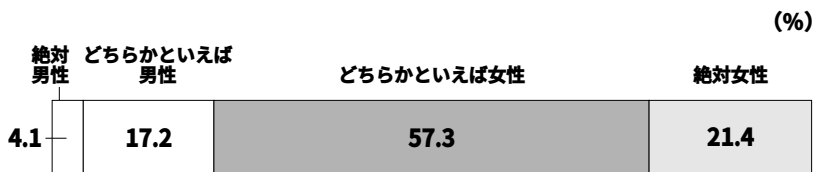
詳しくみていく。

最後に性役割の受容をみる。サンプルの場合は妻役割、母親役割の受容に当たるが、この点を「生まれ変わるとしたら」でみてみると、図1-8が示すように、8割が「また女性に生まれたい」と答えている。少しの不満はあっても、この時期の母親はおおむね幸せで、人生にほぼ満足している様子がみてとれる。

図1 - 7 生活の満足度



図1 - 8 生まれ変わるとしたら





## 2

## 自由度の検証



## ●家事・育児からの自由の度合い)))

外側からは母親たちが、昔に比べてかなり自由になったという印象を受ける。日中、ファミリーレストランに入ってみると、小さい子ども連れの母親たちが談笑している情景をよく見かけるし、幼い子どもがいても、テニスや水泳の教室に通う母親もいる。コマダムと呼ばれるような人々はごく一部であろうが、小さい子どもがいても、昔のように、髪を振り乱してというのではなく、人生にゆとりをもって、それなりにエンジョイするかのような若い母親たちの生き方がみられる。その姿は一般化しているのだろうか。

## 1) 育児支援者がいるか

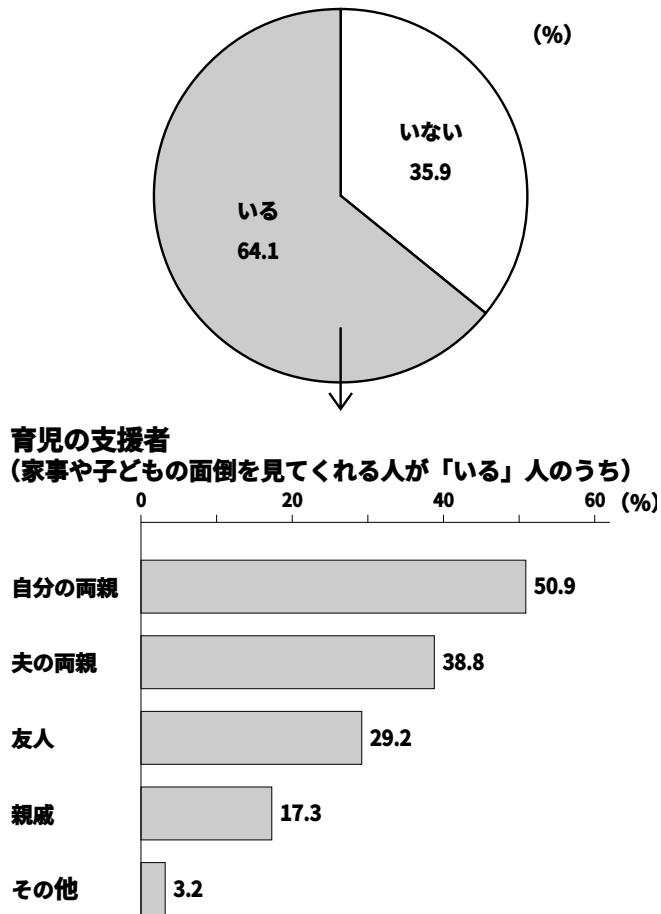
子どもが小さいときは、立って食事をした

という昔の母親たちの回顧談を聞くことができる。身近に、育児を助けてくれる人がいれば理想的だろうが、せめて何かの折にでも育児を助けてくれる人々がいれば、どんなに助かることであろう。

図2-1は、育児支援者の有無と、その内訳をみたものである。育児支援者がいると答えた者は64%で、支援を頼める順位は、まず①自分の両親に頼む（支援者のいる者のうち51%）、②夫の両親（同39%）である。これらは、親と同居しているか、比較的親と近いところで子育てをしている幸せな人々であろう。そのほかの支援者は、③友人、④親戚となっている。近隣の友人との関係はそれほど密ではなさそうだ。



図 2 - 1 育児支援者



## 2) 外出の自由度

かつてに比べると家事負担は大きく軽減したが、外出はどのくらい自由になっているか。

図2-2によると、今でも小さい子どもがいる母親の自由度は、大きく制限されていることがわかる。毎日のスーパーへの買い物には、6割が子連れで行き、美容院にすら1割は子どもを連れて出かけている。また、夜の外出、またはカラオケ、お酒を飲むなどは7割前後が「ほとんどない」と答えており、自分のために子どもをおいて外出することは極力控えている。

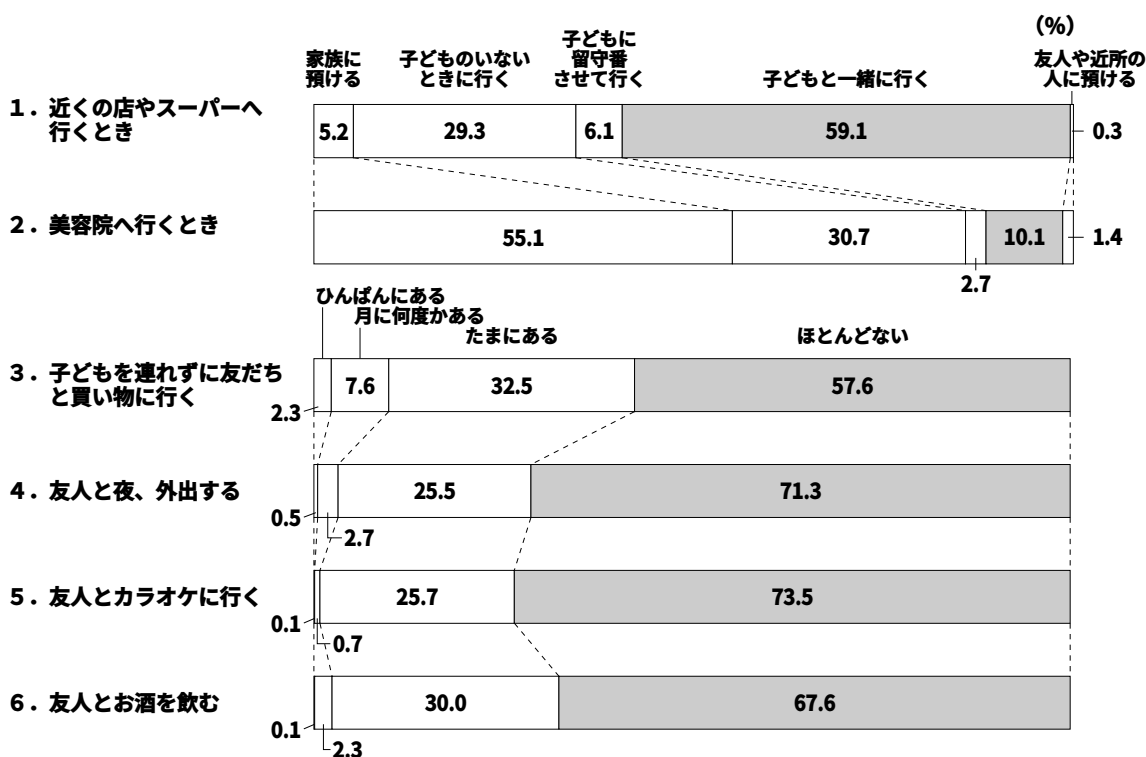
さらに友人との泊まりがけの旅行では、巻末の集計結果が示すように、88%が「行かない」と答えている。「行く」と答えた12%も、せいぜい年1回、1泊で、それ以上の旅行はきわめて少数である。

## 3) 家事・育児からの自由度

自分の子ども時代に見ていた親の姿と比べて、最近の主婦の家事負担が軽減されたことは、誰でも実感している。しかし、他方で時代は変わっても、家事には限りがないという主婦たちの声もある。

この点を少しみていこう。まず食事の支度

図2-2 外出の自由度



の中で、朝食に代表させてその簡略化度をみると、図2-3のように、今でも「しっかり火を使う」調理をしている者が4割を超え、「日によって、家族によってバラバラ」というのも結構大変だろうから、合わせて8割の数字は、手放して「楽になった」といえる数字ではない。例えば、トーストと牛乳、コーンフレークスなど「ほとんど火を使わない朝食」はわずか2割でしかない。

また母親が外出をする場合でも、夕食は作って出かける割合が5割と高く、家事の責任を果たしている。

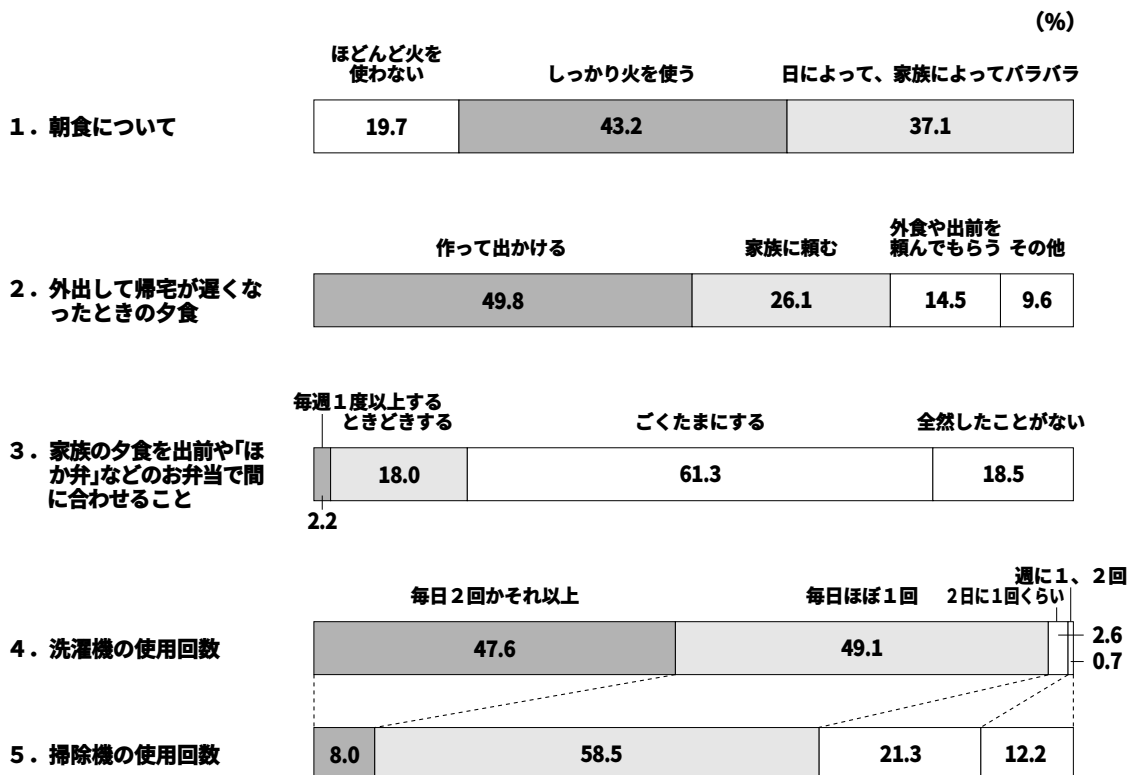
さらに家族の夕食についても、出前や「ほ

か弁」に頼ることはごくまれで、家族思いの家庭を大切にする母親の姿が見える。

洗濯は、小さい子がいるせいか、こまめに行われている。掃除は多少、手抜きがみうけられ、2日に1回かそれより少ない家庭も3割いる。

自由度の内容をみると、さしあたって生活に必要なことは別として、生活上で支障をきたさないことには少しずつ手を抜いているが、それでもかなりの家事を強いられているといえよう。

図2-3 家事・育児からの自由度



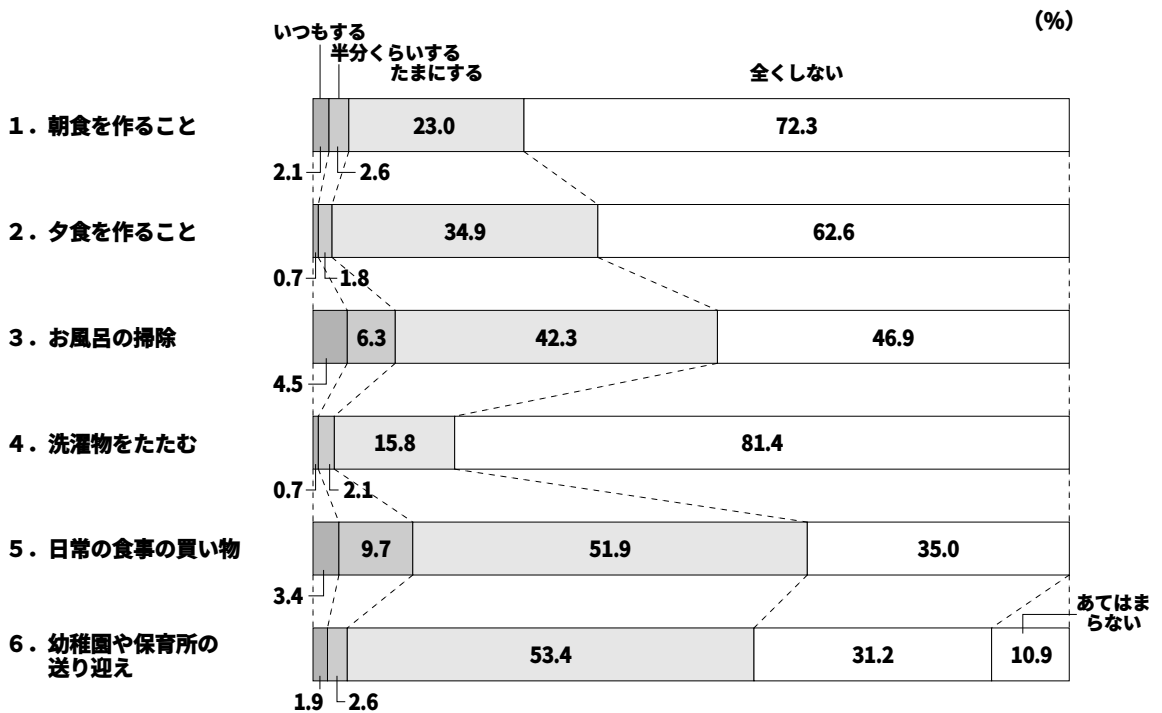
#### 4) 夫は家事を分担してくれるか

すでに、サンプルの属性の項で（図1－4 p.15）、夫たちが「仕事と家庭と半々」にウエイトをおいていると答えた数字をみてきた。だとしたら、夫はどのくらい家事に参加しているのだろうか。

図2－4をみると、協力度の低いものは、「洗濯物をたたむ、朝食・夕食を作る」で、高いものは「幼稚園や保育所の送り迎え、食事

の買い物、お風呂の掃除」である。昔に比べれば、これでも協力的になっているのだろうが、しかし大したものではない。夫が参加しているのは、技術や訓練がいらない簡単な家事、あまり時間をとらない家事であり、逆に、技術を必要としたり、複雑で時間を要する家事に対する協力度は極めて低い。つまり大して戦力にはなっていないことがわかる。これで、「仕事と家庭と半々」という答えはどこから出てくるのだろうか。

図2－4 夫の家事参加度（夫の家事分担）



## ●独身時代と現在を比べて)))

結婚は大きな自由を手放して、義務と拘束を背負うことでもある。結婚しない若者が増えているが、独身時代と比べて、それほど自由の幅が狭められるのだろうか。

まず図2-5は、朝起きたときに化粧をするかである。「化粧水程度」で、口紅もつけない母親が5割を超える。

では独身の頃と比べて、おしゃれや気晴らしはどうなったか。図2-6は現在と独身の頃とを比較して、その変化をみたものである。ほとんどが独身時代と比べて、自分の趣味や楽しみに費やす時間は大幅に失われていることがわかる。結婚をしてから、自由になった、広がったという項目は、全くない。

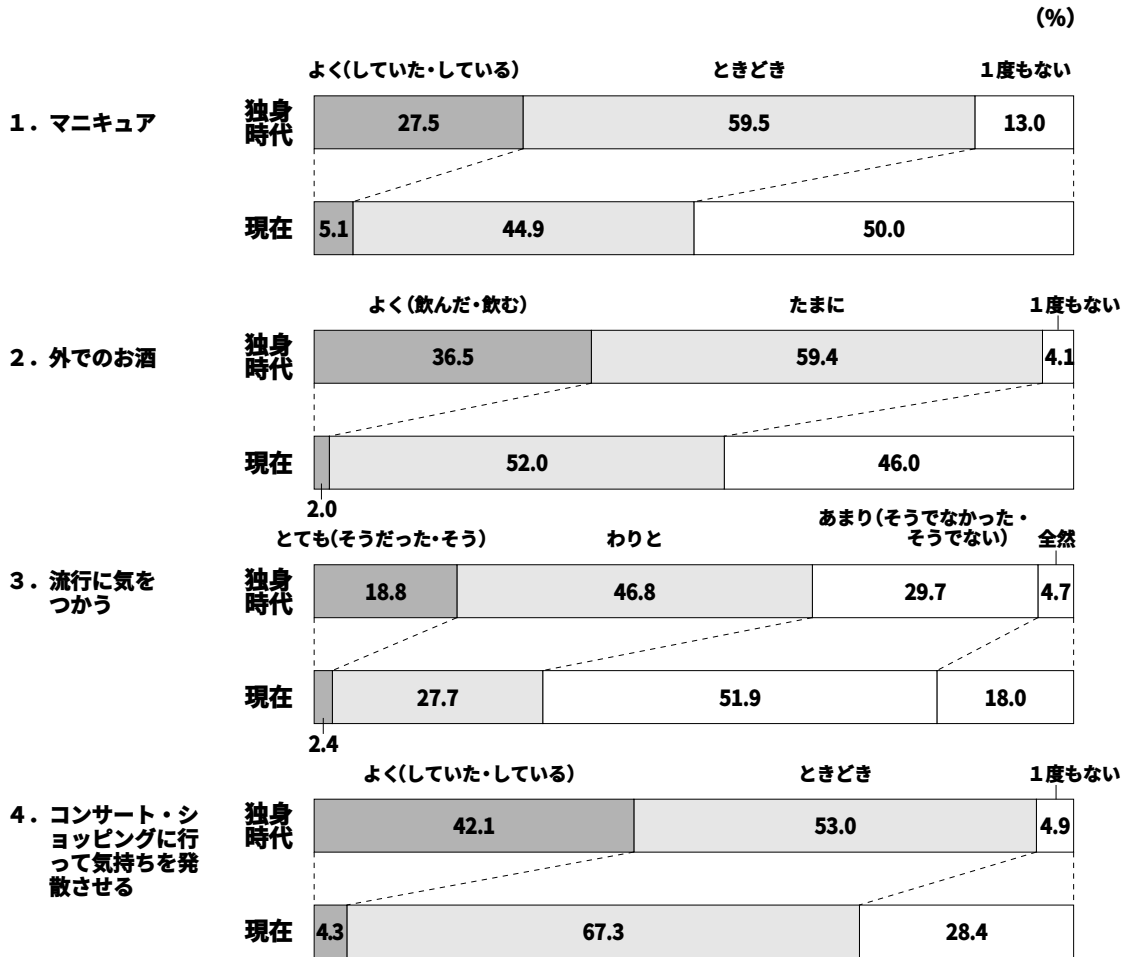
とくに「流行に気をつかうこと」は、独身時代は「とても・わりと」を合わせると7割近かったのに、現在はそれが3割に低下し、また「よくコンサートやショッピングで発散していた」者も、42%から4%へと激減している。しかし発散を「ときどき」している者は、67%と決して少ない数字ではない。

こうしてみると、おしゃれを中心に自由度は低下したが、しかし小さな発散はそれなりにできるという状態が、サンプルの日常であり、1章でみたように、まあまあ満足して、女性役割も受容しているという数字は納得させられるものがある。

図2-5 朝起きたとき、化粧するか

| (%)      |               |       |
|----------|---------------|-------|
| しっかり化粧する | ファンデーション、口紅程度 | 化粧水程度 |
| 11.3     | 36.0          | 52.7  |

図2 - 6 独身時代と比べての自由度



## ●意識レベルでの自由度)))

では母親たちは、伝統的な母親役割・主婦役割から、意識的にも十分に自由になっているかという点、どうもそうではなさそうだ。

図2-7はこうした役割を、たとえ一時的にせよ夫に委ねたとき「気がひける」かどうか、とたずねることで明らかにしてみようとしたものである。

ふだんは母親役割を主体的積極的に担っていたとしても、時には「自分も外出したい、友人とつきあいたい、家事を肩代わりしてほしい」と思うことがあるはずだ。そうしたときに、どれほど「気がねしないで」育児や家事負担を夫に頼めるだろうか。つまり意識的レベルで、母親たちがどのくらい自由かをみ

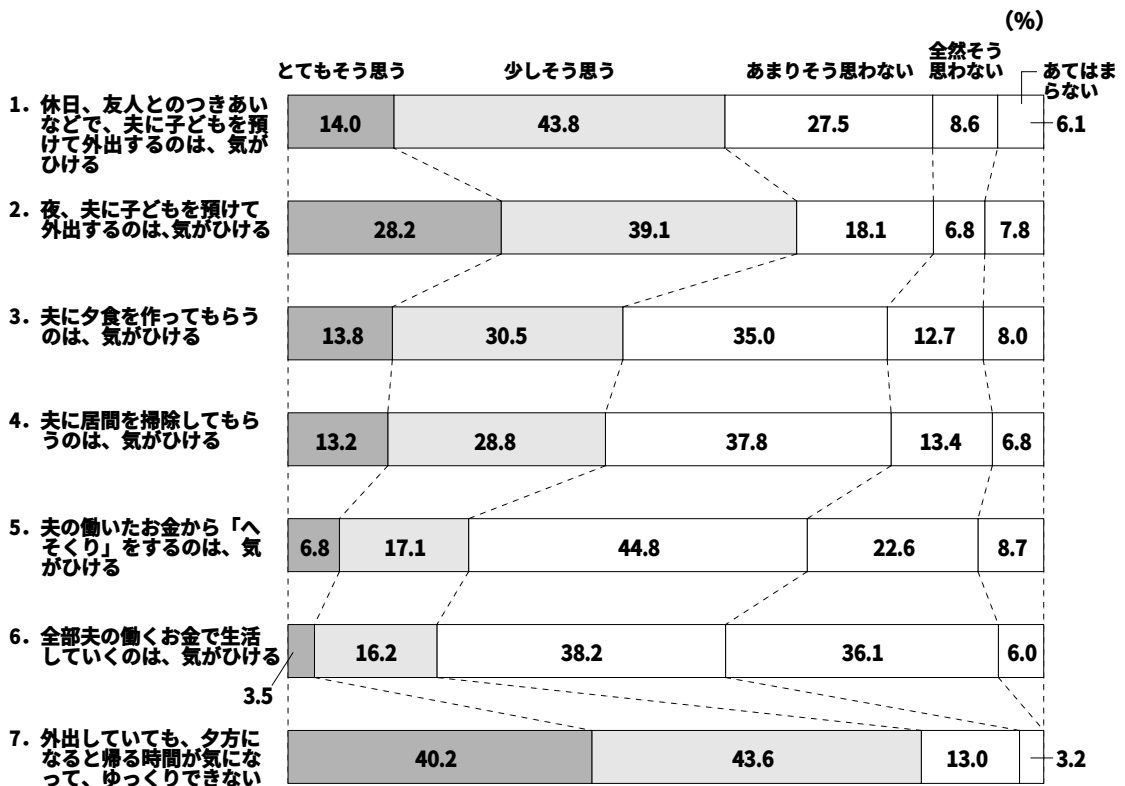
てみる。

全体としては、夫にそれほど気がねせずに家事・育児を依頼できる状況が見いだされる。主婦たちは精神的にも、それほど伝統的な性役割に束縛されていないようである。

中でいちばん「気がひける」のは夜の外出で、むしろ行く先にもよるだろうが、PTAや学習機会を夜に設定しようとする、主婦層から反対が出ると聞くのも、わかる数字である。

しかし全体には「あまりそう思わない」が多く、「全然そう思わない」は1割前後と少ない。堂々と夫に家事や育児の分担を言い出せるほど、自由ではないともいえそうである。

図2-7 気がひけること



意外だったのは、夫の経済的主導性を当然と考える傾向で、夫の働いた収入で全て生活するのも、へそくりも、「気がひける」と答えたものは「少しそう思う」を入れても2割程度でしかない。

外と内の役割分担を肯定し、夫の収入の半

分は自分の協力によるもの、としっかり考えている。経済的にかなり十分な自立性があった自分の地位を放棄して、家庭人となった女性たちに、もう少し喪失感や現状への不満がみられるかとも思ったが、どうやらそうではなさそうである。

## ●自由度を支える要因)))

では母親の行動の自由度は、どのような母親の属性に支えられているのだろうか。

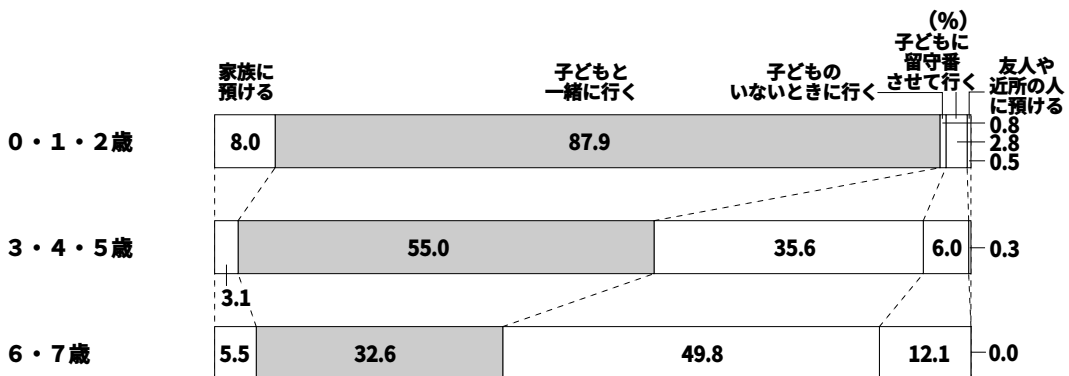
### 1) 外出の自由度と末子の年齢

乳幼児や就学前の子どもをもつ母親は、「子育てを助ける者がいてくれれば」と、誰もが思うだろう。

では、外出したいとき、あるいは外出しなければならないとき、母親は子どもをどうしているのだろうか。

図2-8によれば、末子が乳幼児の場合、買い物など日常的な外出のときには、9割近い母親が「子どもを連れて行く」と答えている。美容院など、2、3時間かかる用事のと

図2-8 末子の年齢 × 「平日の買い物時、末子をどうするか」





きには、夫や親などの「家族に預ける」という回答が大半（8割強）である。そして、子どもが大きくなるにつれて、幼稚園や小学校などに行っていて「子どもがいないとき」に出かけるようになる（図2-9）。母親にとって、家事や子育てを助けてくれる人とは、気軽に頼める日常的な支援者というよりも、子どもを連れて行けないときや緊急時に子どもを預けられる存在なのだろう。

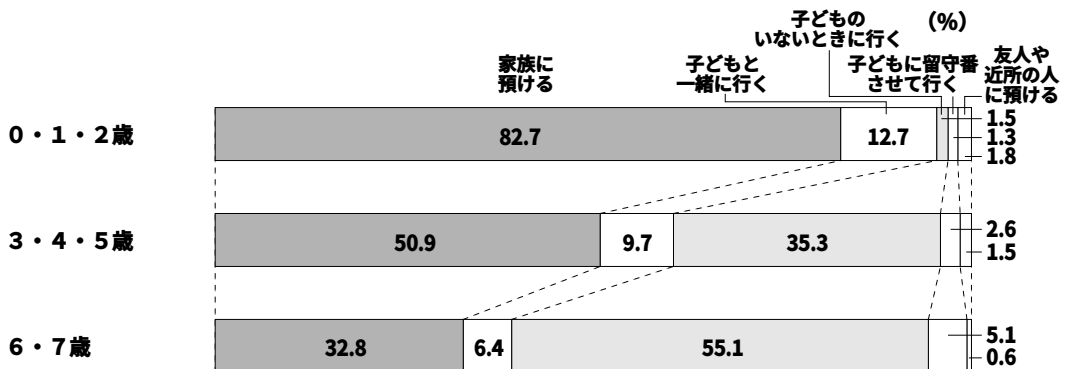
したがって、母親が友人と遊びに出かけたりなど、夜に外出する機会はかなり制限されている。表は省略するが、0～2歳の乳幼児がいる場合、7～8割の母親が夜外出する機会は「ほとんどない」と回答している。子どもが大きくなるにつれ、自由度は増すものの、6・7歳児の母親でも、「末子を連れて遊びに出ることはない」とする母親が全体の中でおよそ4割、夜外出すること自体、「ほとんどな

い」とする母親が6割を占める。

自分の身なりやおしゃれに関しても、末子の年齢が低いほど、自分自身のことにかまってはられないという母親の姿がある。子どもが少し大きくなると、おしゃれを楽しむ余裕を取り戻すが、それでも独身時代の生活スタイルにはほど遠い生活である。例えば、「できるだけ流行におくれないように、服装や髪型に気を付けている」という6・7歳児の母親は、乳幼児の母親に比べて1割多い程度にとどまっている。

以上の結果から、0～2歳という乳幼児をもつ母親の外出や行動の自由度は低く、子どもが成長するにつれて、遊びに出る機会ももてるようになるものの、全体としては幼児をもつ母親は今日でも、やはり子ども中心、家庭中心の生活を送っているようである。

図2-9 末子の年齢 × 「美容院など、2～3時間の用事のと、末子はどうするか」



## 2) 外出と母親の職業

次に、母親の職業の有無によって、育児支援者や外出の自由度が異なるのかどうか、みていくことにする。

まず、家事や子どもの面倒をみてくれる支援者が「いる」比率は、自営業とフルタイムで働く母親で高く、それぞれ82%、78%である。働く母親のなかでもパートタイムの母親は、専業主婦とほぼ同じ6割にとどまっている（表2-1）。

では、どのような人が家事や育児を助けてくれるのか。表2-2で、子育て支援者の内訳をみてみよう（複数回答）。自営業の母親

では、夫の両親（52%）と自分の両親（51%）とがほぼ同じ割合である。フルタイムやパートタイムで働く母親では、夫の両親よりも自分の両親を頼りにしている。そして、フルタイムでは、友人が助けてくれるという回答が12%と最も少ない。一日中自宅を離れているケースがほとんどだと思われるフルタイムの母親にとって、地縁ネットワークの形成が難しいことがうかがえる。

他方で、フルタイムの母親は外出の自由をある程度享受できるようである（図2-10）。外出の頻度は、他の母親に比べて、夜外出したり、友人とお酒を飲みに行ったり、コンサートやショッピングで気晴らしをしたりする

表2-1 母親の職業 × 子育て支援者のいる人の割合

(%)

| 専業主婦 | フルタイム | パートタイム | 自営業  |
|------|-------|--------|------|
| 60.4 | 77.6  | 62.6   | 81.5 |

表2-2 母親の職業 × 家事・育児の支援者(支援者が「いる」人のうち)

(%)

|        | 家事・育児の支援者 |      |      |      |     |
|--------|-----------|------|------|------|-----|
|        | 自分の両親     | 夫の両親 | 友人   | 親戚   | その他 |
| 専業主婦   | 48.5      | 40.6 | 31.2 | 16.6 | 2.3 |
| フルタイム  | 57.9      | 38.2 | 11.8 | 14.5 | 0.0 |
| パートタイム | 55.0      | 29.5 | 38.0 | 24.0 | 2.3 |
| 自営業    | 51.1      | 52.3 | 22.7 | 18.2 | 1.1 |

(複数回答)

機会が「ある」という回答が多い。

表は省略したが、働く母親は掃除の回数を減らすことで、日々の仕事と家事の二重負担を軽くしている。とくにフルタイムの母親では、掃除機を使う頻度が「週に1、2回」という回答が4割強に達している。

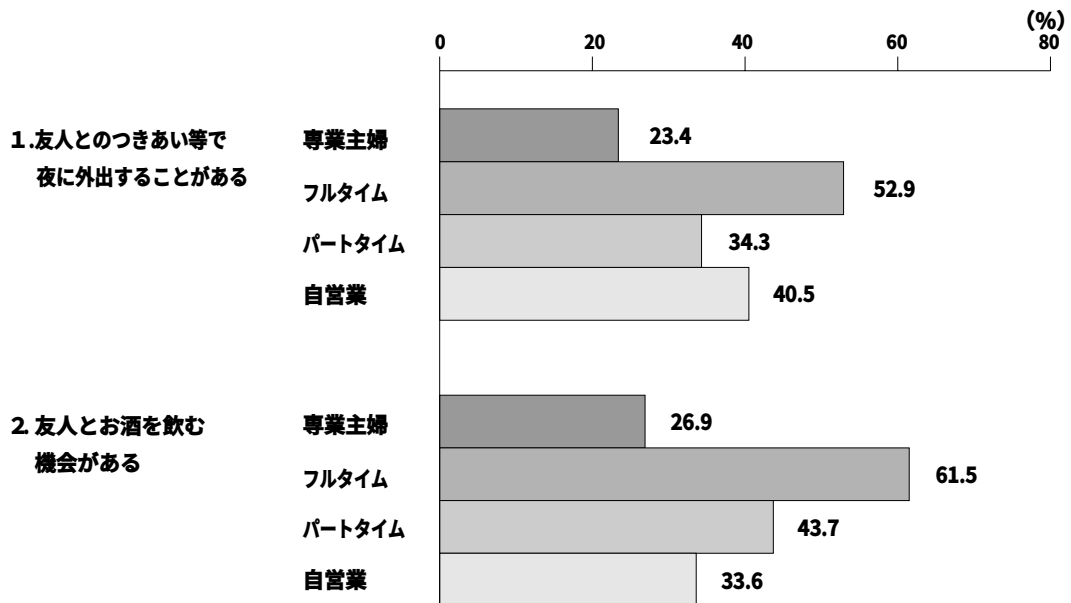
### 3) 夫への罪悪感と妻の職業

夫の家事協力は、母親が有職の場合でも無職の場合でもほとんど関係なく、低調である。そうした状況の下で、夫の家事協力に対して「申し訳ない」「気がひける」などといった罪悪感を母親が感じている現状を、図2-11で検討してみる。

まず、専業主婦の母親は、「夜、夫に子どもを預けて外出すること」に対する罪悪感が最も高かった。

逆に、フルタイムの母親は夫の家事協力に、「気がひけるとは思わない」という回答が多かった。外出や夫の家事への協力・分担に対して罪悪感を感じるものが少なく、ジェンダーに縛られることも、比較的少なかった。他の母親より、自由度が大きい様子がみられる。しかし、図は省略したが、他の職業の母親と同じように、「休日に夫に子どもを預けて外出すること」には気がひけ、「外出していても、夕方になると帰る時間が気になってゆっくりできない」様子がみられ、やはり家庭中心に

図2-10 母親の職業 × 外出の自由度



「ひんぱんに」 + 「月に何度か」 + 「たまに」ある割合

生活していることがわかる。

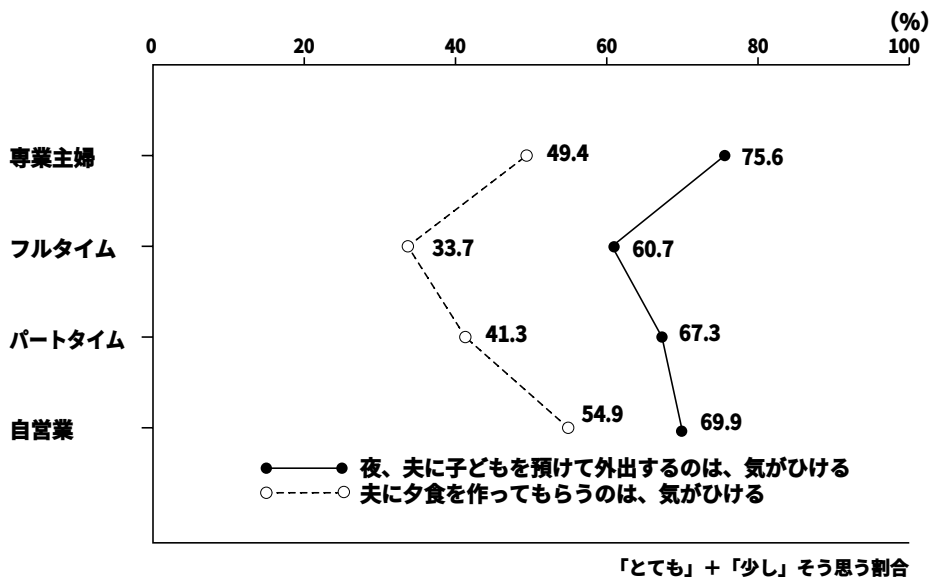
一方、パートタイムの母親の罪悪感は、専業主婦とフルタイムの中間に位置している。この結果は、パートタイムの母親の場合、家事などをきちんと行い、家庭生活を犠牲にしないことを前提として就労するケースが多いことを示唆しているのではないだろうか。

自営業では、夫の家事参加に対する罪悪感が最も強かった。自営という就業形態は職住が分離せず、女性の肩に家事責任がより強く負わされてしまうのかもしれない。

夫に対する罪悪感に関する質問項目のうち、経済的生活にかかわる「全部、夫の働くお金で生活していくのは気がひける」という質問

に肯定的な回答は、フルタイムがおよそ5割であるのに対して、専業主婦で5分の1弱、パートタイムで4分の1、自営業で3分の1と、かなり少なかった。夫が外で働くことに対応して、自分は家事や育児を「仕事」として分担しているという性的役割分業観がうかがえる。これに関連して、夫の協力に罪悪感が弱い母親の方が、外出する機会を多くもつ傾向が認められた。また、とくに「夫の世話」「子どもの世話」については罪悪感の弱い者の方が家事の負担感が大きい。詳しくは後の章でも触れるが、罪悪感の少なさを、脱母役割や脱妻役割の1つの目安としてみることもできるだろう。

図2 - 11 母親の職業 × 罪悪感（気がひける）



## 3

## フラストレーションをめぐって



第1章図1-8 (p.17) でみてきたように、母親の8割は女性役割を受容しているが、トータルに考えて「現在の自分の生活に満足」している者は、「まあ満足」を含めて63%である(図1-7 p.17)。この間には少なから

ずギャップが感じとれる。この場合の「また女性に生まれていい」(女性役割の受容)とは、一体何を意味しているのだろうか。そうした意味も含めて、この章では、母親の中のフラストレーションを探ってみよう。

## ●家事の負担感)))

まず、日々の母親業の中身を6つほどに分けて、それぞれについて「好きか、それとも負担に思うか」をたずねたのが、図3-1である。

「とても好き・わりと好き」を合わせた数字でみると、図が示すように、もっとも好かれている行為は「洗濯」、次いで「子どもの

世話」「料理」「掃除」「夫の世話」と続き、最後が「親戚とのつきあい」となっている。

ある割合で、掃除、洗濯、料理に負担を感じる者がいることは当然としても、子どもの世話より洗濯が好き、夫の世話より掃除の方が好きという数字には、首をかしげる人も多いだろう。

負担に感じる者の数字を拾うと、「親戚とのつきあい」が負担な者は68%、「夫の世話」が52%、「掃除」が47%、「料理」が45%、「子どもの世話」が32%、いちばん負担でないのが「洗濯」の19%となっている。相手が

人間であろうとモノであろうと、面倒なことは嫌い、ということなのだろうか。家事や育児等にこんなにも負担に感じる行為が多くては、家の中にいるのも楽ではないであろう。

## ●増やしたい時間)))

母親の中にあるフラストレーションをみるために、もう一つの項目として用意したのが、

「どんな時間を増やしたいか、減らしたいか」である。

図3 - 1 家事の負担感

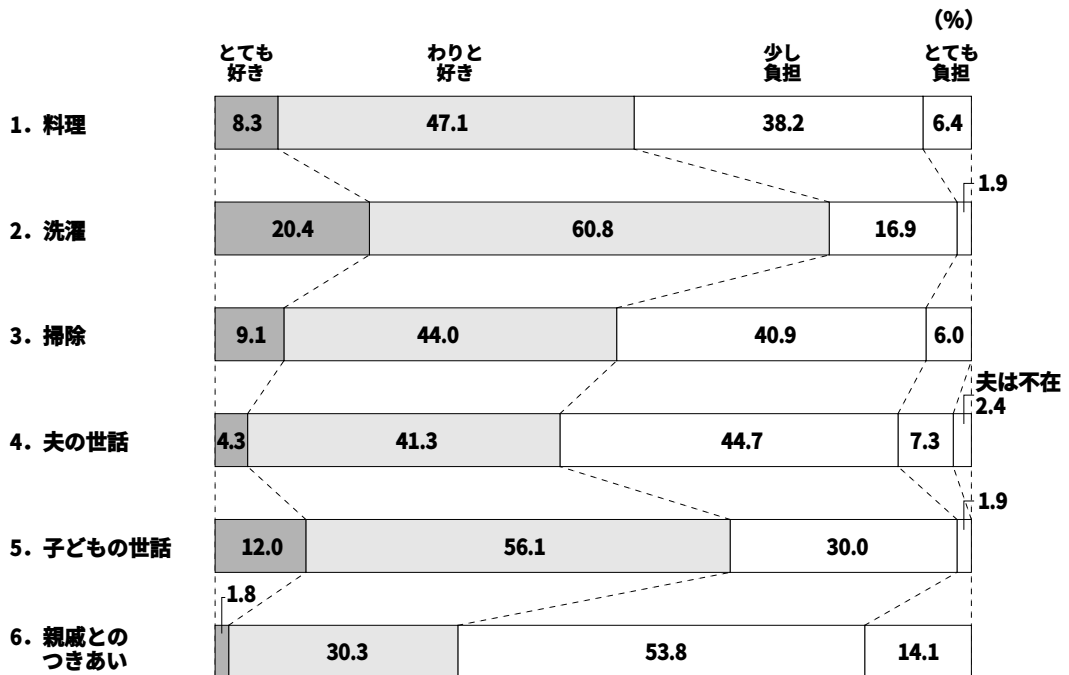
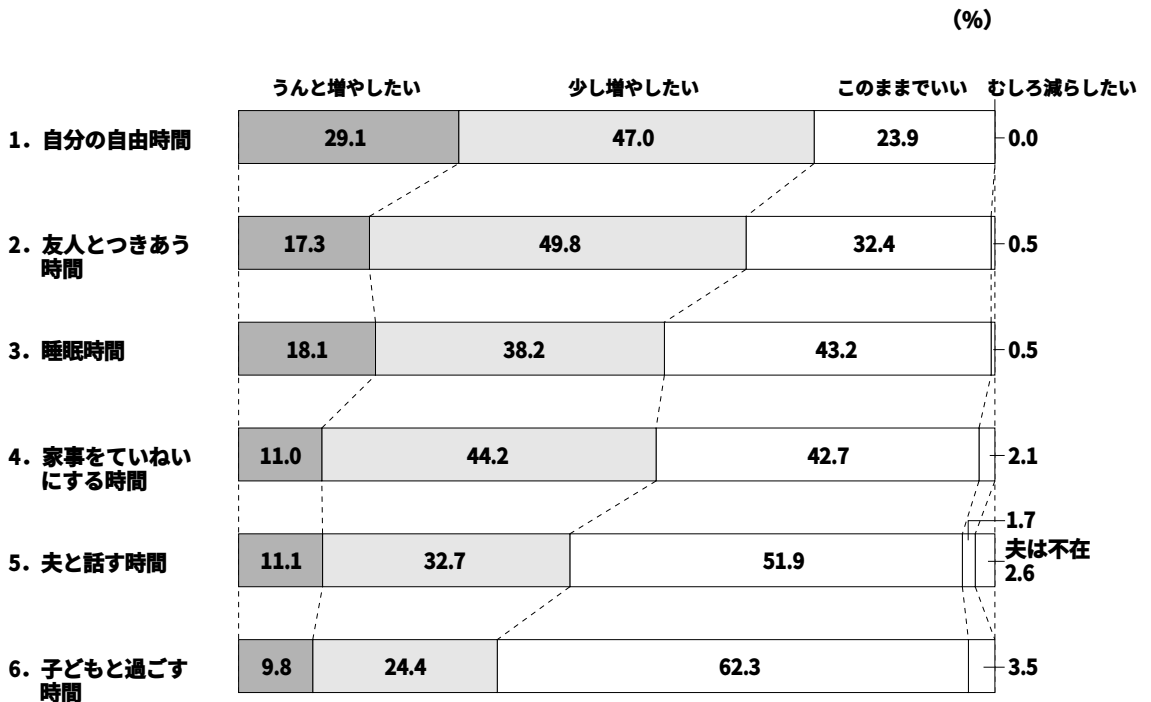


図3-2が示すように、母親たちがいちばん増やしたいのは「自分の自由時間」であり、次いで「友人とつきあう時間」「睡眠時間」と続く。小さい子をもった母親たちが、いかに多忙な生活を送っているかが推察される。

逆に、いちばん「このままでいい」と思われているのは、「子どもと過ごす時間」で、

子育てに追われている母親の日常を考えると納得できる数字かもしれない。しかし、「夫と話す時間」は決して多くないはずなのに、「このままでいい（52%）」が「増やしたい（44%）」を上回っている。結婚して10年か15年を経ただけで、夫婦もこんな関係になってしまうのだろうか。

図3-2 増やしたい時間



## ●母親の属性とフラストレーション)))

次に、母親の属性によって、家事に対する負担感や増やしたい時間がどのように異なるのかをみる。

### 1) 末子の年齢とフラストレーション

末子の年齢は、家事に対する負担感とは関連がみられなかったが、増やしたい時間の内容には差がみられる。末子の年齢が低い母

親の方が、「子どもと過ごす」以外の時間、すなわち「睡眠時間」（図3-3）、「自由時間」（図3-4）、「友人とつきあう時間」（図3-5）、また図は省略したが「夫と話す時間」「家事をていねいにする時間」を増やしたいと思っている。乳幼児期の子どもをもつ母親が、日々の生活の中で、子どもにかかりきりになっている現状が反映されている。

図3 - 3 末子の年齢 × 増やしたい「睡眠時間」

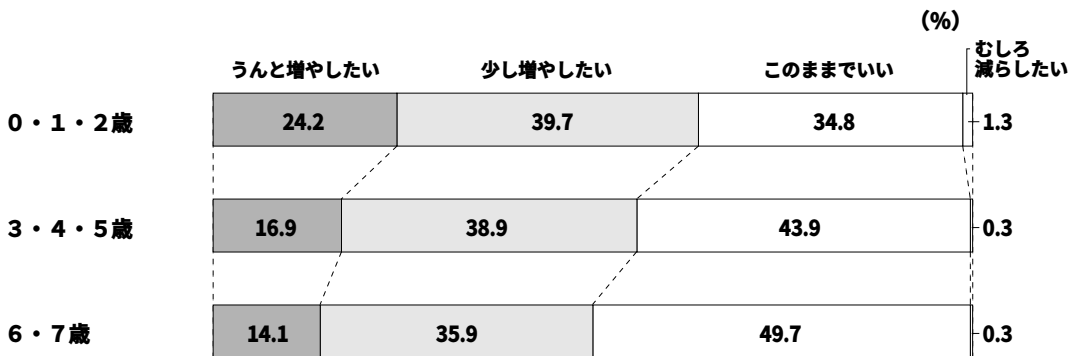
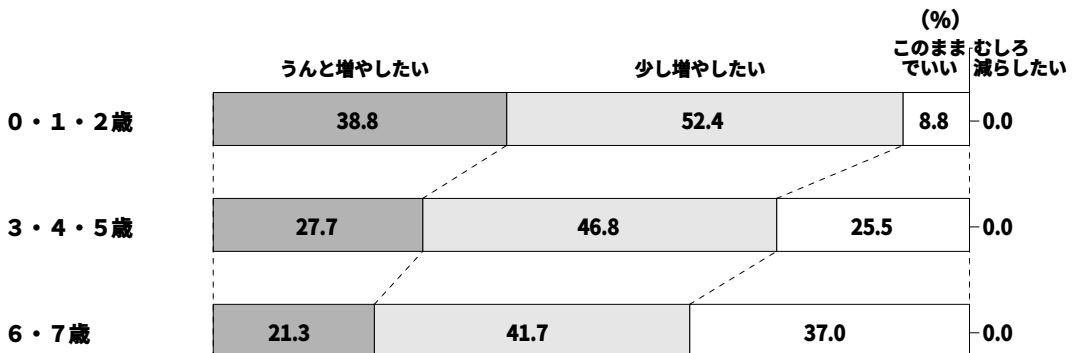


図3 - 4 末子の年齢 × 増やしたい「自分の自由時間」





## 2) 母親の職業とフラストレーション

では、母親の職業の有無および就労形態と家事の負担感の関連はどうか。

多忙な有職女性の方が、家事に対する負担感が強いのではと考えたが、調査の結果は必ずしもそうではなかった。パートタイムや自営業で働く母親の負担感は、専業主婦の母親と大きな差は認められなかった。フルタイムで働く母親の場合も、洗濯や掃除に対しては負担を感じている者が他と比べて少し多かつ

たが、料理については差がなかった。料理には、物をつくるという創造的な喜びと、食べる楽しみという要素があるためだろう。

フルタイムの母親がもっとも負担に感じているのは「夫の世話」（図3-6）であり、その割合は6割を超えている。夫には「身の回りのことくらい自分でしてほしい」という声が聞こえるようである。家事や子育てへの参加・協力以前に、生活身の自立のおぼつかない夫の姿がかいま見える。

図3-5 末子の年齢 × 増やしたい「友人とつきあう時間」

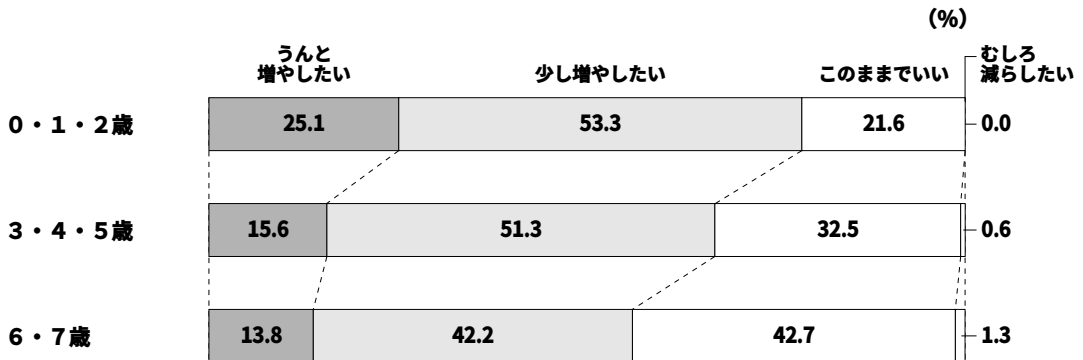
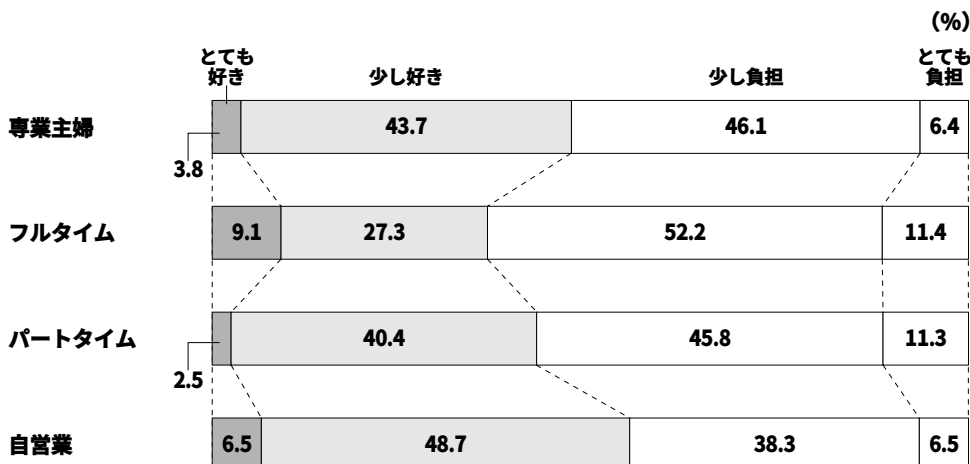


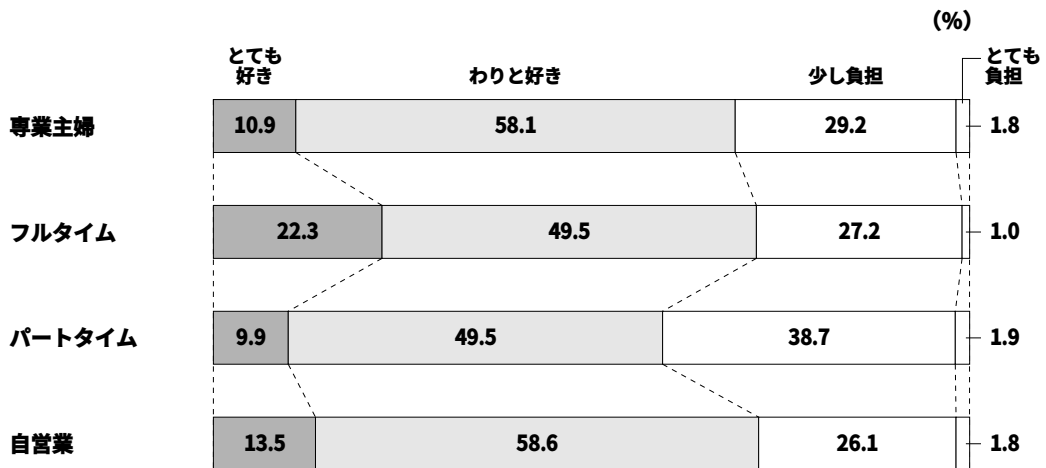
図3-6 母親の職業 × 「夫の世話」の負担感



一方、図3-7に示した「子どもの世話」は、フルタイムの母親に子どもの世話が「とても好き」が2割と、他に比べて多かった。ふだんふれあう時間が物理的に少ないせいだろうか。むしろパートタイムの仕事をもつ女性に負担感がやや多くみられた。

次に、増やしたい生活時間をみると、母親の職業との関連がみられる。とくにフルタイムで働く母親が、家庭でのさまざまな生活時間を増やしたいと思っていることがわかる。図3-8が示すように、最も「子どもと過ごす時間」を増やしたいと考えているのはフル

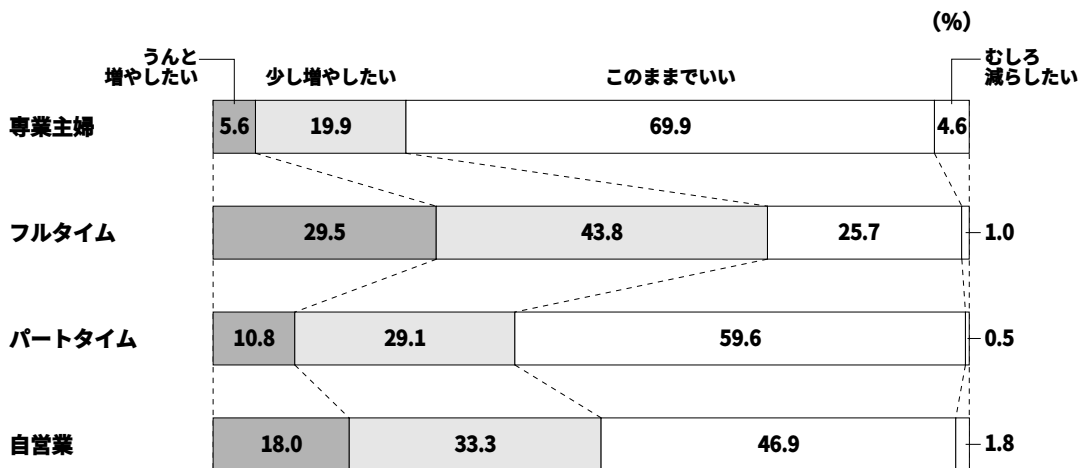
図3-7 母親の職業 × 「子どもの世話」の負担感



タイムの母親であり、次いで自営業、パートタイムと続く。家庭にいて、子どもと過ごす時間を十分もつことのできる専業主婦の7割が現状でよいと考えているのと対照的である。フルタイムで働いている場合、子どもとゆったりと接する時間が少ないためであろう。

また、フルタイムの母親の8割強は「家事をていねいにする時間」を増やしたいと思っている。他方、自営業の母親は夫と食住が近接しているためか、「自分自身の自由時間」や「友人とつきあう時間」を増やしたいと考える者がやや多い。

図3 - 8 母親の職業 × 増やしたい「子どもと過ごす時間」



### 3) 育児不安とフラストレーション

さて、育児不安は家事の負担感を増幅すると思われる。図3-9に示したように、育

児不安の強い母親の方が、「子どもの世話」をはじめ、家事全般に負担感が強い。また生活時間についても、「子どもと過ごす時間」を除いて、「自分の自由時間」(図3-10)、

図3-9 育児不安 × 「子どもの世話」の負担感

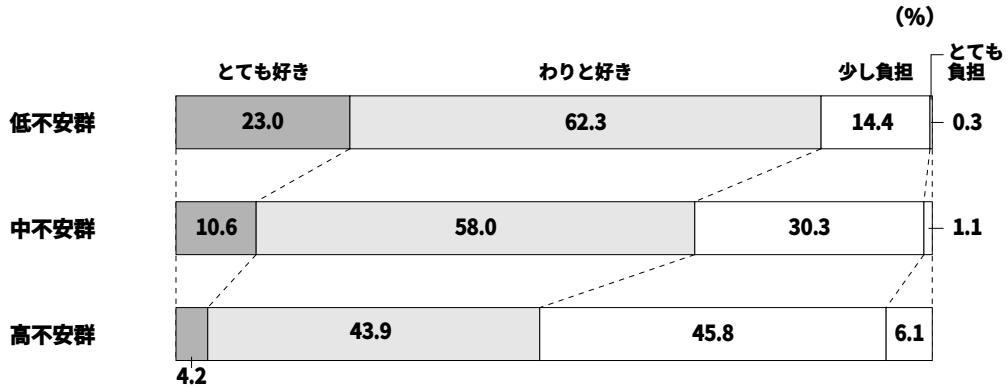
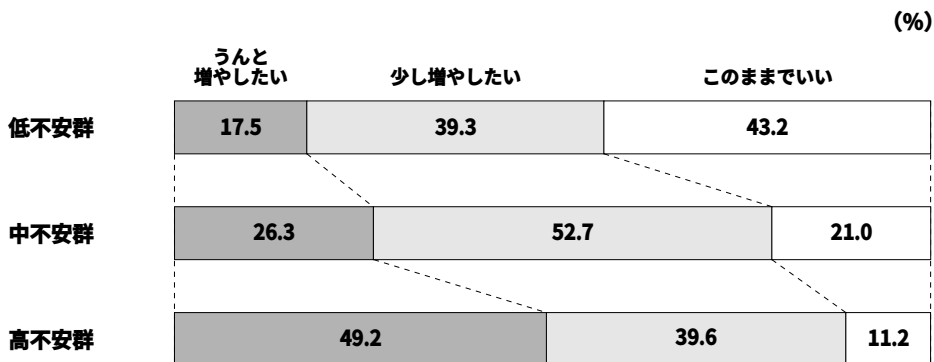


図3-10 育児不安 × 増やしたい「自分の自由時間」

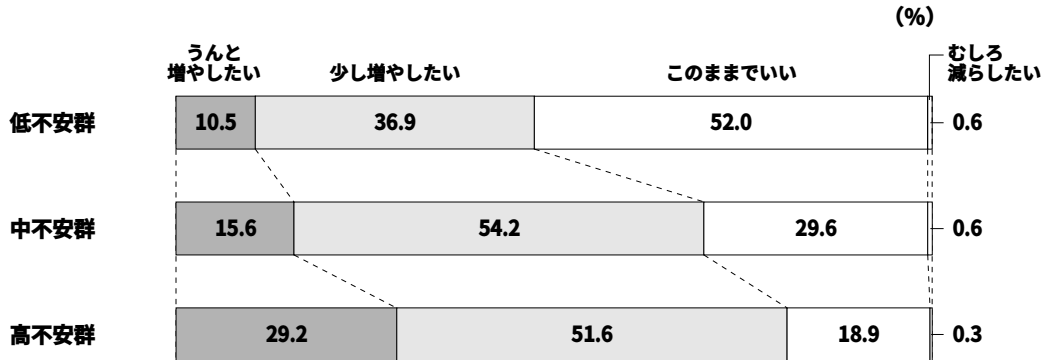


「友人とつきあう時間」（図3-11）など、さまざまな時間を増やしたいと思っている。

なお「子どもと過ごす時間」については、図は省略したが、育児不安の強い母親に「減

らしたい」という回答が約1割を占めた。少ない数字ではあっても、気にかかる。

図3-11 育児不安 × 増やしたい「友人とつきあう時間」

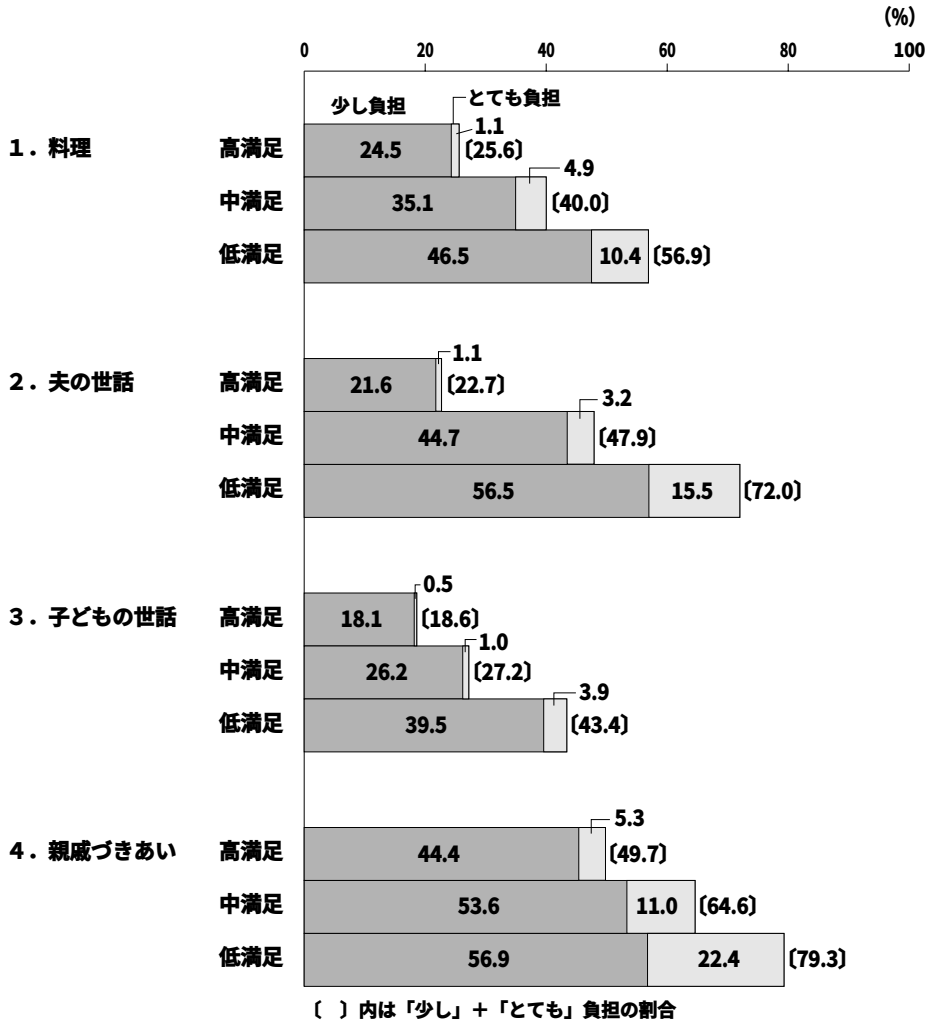


#### 4) 生活満足度とフラストレーション

次に、生活の満足度と家事の負担感との関係をみよう。図3-12に示したように、生活

において満足度の低い母親は、「子どもの世話」「夫の世話」をはじめとして家事全般に負担感が強いことがわかる。また生活の満足度が低い母親は、概してさまざまな生活時間

図3-12 生活の満足度 × 家事の負担感

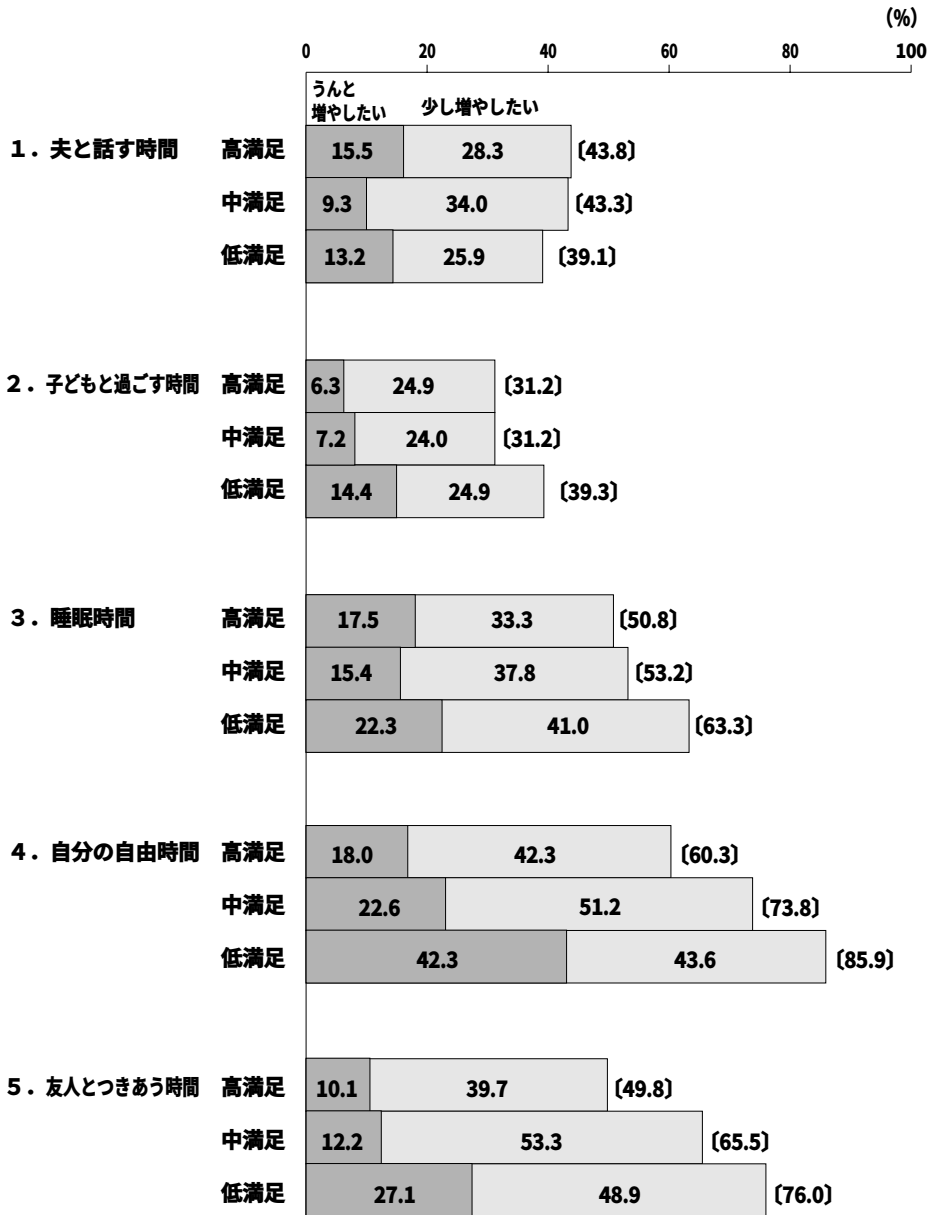


を増やしたいと感じているが、図3-13に示したように、中でも「自分の自由時間」や「友人とつきあう時間」を欲している。

このように、家事の負担感や増やしたい時

間があるかどうかは、生活に対する満足度によく反映している。

図3-13 生活の満足度 × 増やしたい生活時間



( ) 内は「うんと」＋「少し」増やしたい割合

## 4

## 母性性と育児不安



母親という立場にあれば、子どもを育てる日常の中で、喜びもあり、悲しみも不安もある。また、こまごまとした日々の雑事はむろんだが、子どもに対する自己犠牲や献身からも逃れることはできない。その点は、自由を享受し始めた現代の若い母親でも、年輩の母

親でも、また昔の母親でも同じであろう。育児は拘束か、喜びか。さまざまなライフスタイルが可能になった今、母親たちは子育てについて、何を感じ、何を考えているのだろうか。

## ●「母性性」をめぐって)))

その昔、母親になった人々は、本能的に母性を備え、例外なく子どもが好きな存在だと思われていた。その母性神話は、今、どうなっているのだろうか。また、母親たるもの、わが子がかawaiiのは当然だとしても、他人の子はどうなのか。中には自分の子も他人の子も苦手なまま、母親業に携わる人々もいるかもしれない。

子育てに対する母親の意識の構造を探るために、まず10個の質問を用意して、AかBか

のおおまかな選択を求めた(図4-1)。

まず図4-1の1)は、「子ども好きか」をたずねたものである。

図が示すように、53%の母親は「独身時代から、ずっと子ども好きだった」と答えているが、47%は「あまり子ども好きな方ではない」と答えており、子ども好きを否定する母親は、半数近くにもなる。「母親」という言葉がもつイメージから、ずい分かけ離れた数値という気がする。



では、自分の母性性をどうみているか。

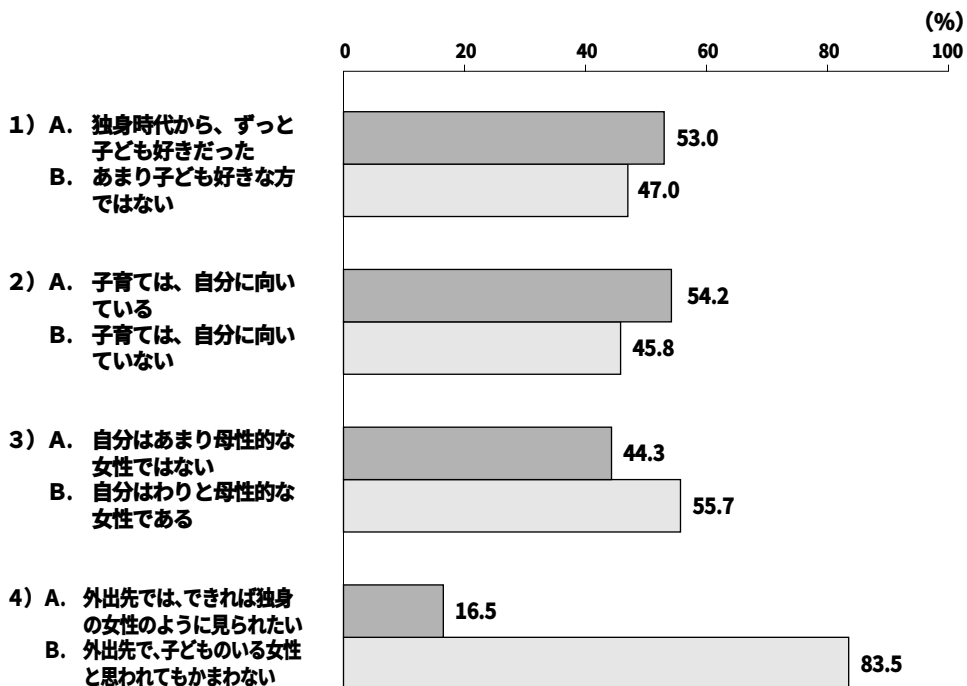
母性性が生得的な側面かどうか、また母性性と名をつけることが適切かどうかは別として、子どもを育てることへの構えや好き嫌いをたずねてみると、2)「子育ては自分に向いているか」が示すように、その肯定者は54%でしかなく、46%もの母親が、「子育ては、自分に向いていない」と言っている。

また3)が示すように、「自分はわりと母性的な女性である」とする母親は56%と、半数をわずかに超えるだけで、否定する母親が44%にも達する。このように、「子育ては自分に

向かない、自分は母性的でない」と、自分の中の母性性を否定する者が半数近くに達するとは、予想外の数字である。母性神話は崩れたと言っているかもしれない。母親の中には、確かに何かが起こり始めている気配である。

しかし、「外出先では、できれば独身の女性のように見られたい」者は、4)が示すように、17%とわずかで、「子どものいる女性と思われてもかまわない」とする者が8割を超える。内的な母性性には懐疑的でも、母親である地位は受け入れていることがわかる。

図4 - 1 子どもへの態度 (I)



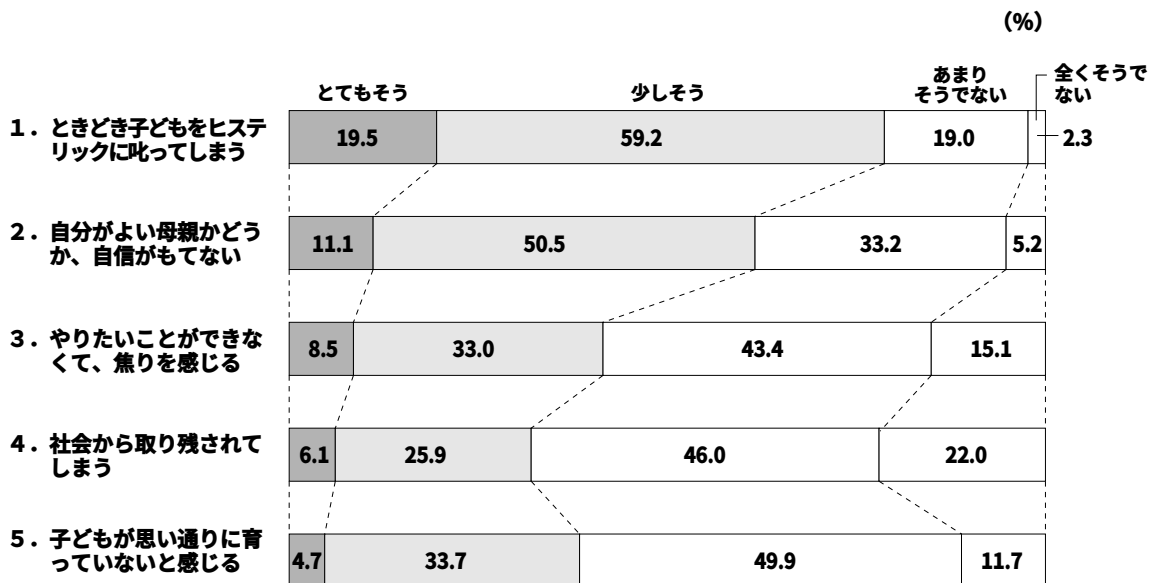
## ●育児不安をめぐって)))

母親の中の母性性をめぐる葛藤を、もう少し探してみよう。図4-2は、いわゆる育児不安に関連した項目である。「1.ときどき子どもをヒステリックに叱ってしまう」「とても・少しそう」を含めて)の79%は、母親ならあ

りそうなことだとしても、「2.自分がよい母親かどうか、自信がもてない」者が62%とはかなり大きい数字である。

そして、「3.やりたいことができない」とか「4.社会から取り残される」という焦りも、

図4-2 育児不安について



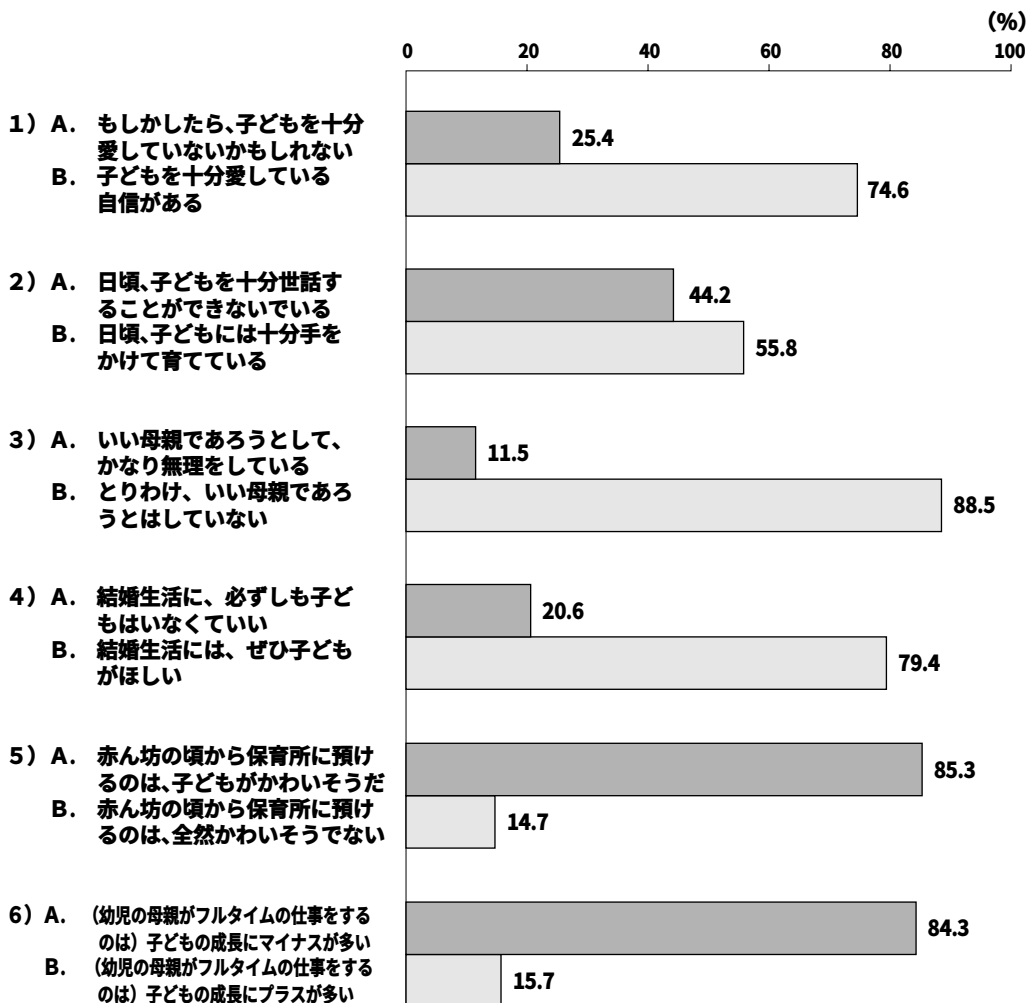
このサンプルには、「少し」を含めて）3割から4割の者に見いだされる。これを大きい数字とみるか、少ない数字とみるか、意見の分かれるところであろうが、決して無視できる数字ではない。強い苛立ちは「とてもそう」と答えた1割弱だとしても、少なからぬ母親に、漠然とした不満やイライラがあることがわかるし、これはすでにみてきた、自分の中の母性性の疑問視に関連する数字であろう。

この点は、次の図4-3の1)「もしかした

ら、子どもを十分愛していないかもしれない」と思う母親が25%、という数字に関しても、同様である。

また2)「子どもに十分手をかけて子育てをしているか」に関しても、44%の母親は、「十分に手をかけていない」と答えているが、と言って、3)「とりわけ、いい母親であろうとはしていない」者が89%と圧倒的である。これはどう解釈されるのだろうか。

図4-3 子どもへの態度(Ⅱ)



## ●結婚観と育児観)))

次に、結婚や子育てをどう考えるか、意見のレベルでみてみよう。伝統的な社会では、結婚生活に子どもは「なくてはならない存在」だった。イエの継承者としての子どもの意味は大きく、夫婦のつながりといっても、愛情は二の次であった。出産コントロールが難しかったせいもあって、子どもをもたずに、夫婦の愛情だけを結婚生活の柱とする考え方はなかった。そうした家族の意識が変化してきたと言われるが、この点はどうか。

図4-3の4)「結婚生活に、子どもを必要と考えるか」をみる。図が示すように、「結婚生活に、必ずしも子どもはいなくていい」とする者は2割にすぎず、8割が「結婚生活には、ぜひ子どもがほしい」と伝統的な家族像を求めている。

さらに子育てについても、過去の社会では

母親の使命は何よりもわが子を育てることにあり、自己実現のために保育所に子育てを託すことは、母親自身も含めて、当時の人々には到底受け入れられない考え方だった。しかし女性が自己実現を求めるとき、子育てと職業を両立させるには、保育所による早期からの集団保育を肯定的にとらえることが必要である。このように育児観そのものを昔と変えてしまえば、仕事の継続と子育ての間の葛藤から逃れることができ、働く母親は、精神的にずっと楽に仕事ができるようになるだろう。

しかし、5)が示すように、「赤ん坊の頃から保育所に預けること」については、「子どもがかわいそうだ」が85%と圧倒的で、また幼児期からの母親のフルタイムでの就労も、6)「成長にマイナスが多い」が84%と同様であ

表4-1 母親の職業 × 子どもの世話は十分にできているか (%)

|           |        | 十分世話が<br>できない | 十分手を<br>かけている |
|-----------|--------|---------------|---------------|
| 母親の<br>職業 | 専業主婦   | 34.1          | 65.9          |
|           | フルタイム  | 82.5          | 17.5          |
|           | パートタイム | 57.8          | 42.2          |
|           | 自営業    | 59.3          | 40.7          |

る。このように、子どもにとっての「生みの母親」による子育て、または個人保育は、今なお圧倒的に支持されている。職業的な自立を企図する母親たちには、葛藤が予想される状況が続いている。

つまり、前節でみたような、自分の中にある母性性への懷疑と、育児不安的な心情は、

このように母親たちが、伝統的な家庭観・育児観から抜け出せないところから生まれているのかもしれない。

以上、母親の子どもへの態度を概観してきたところで、次に、こうした子どもへの態度にかかわる母親の属性をみていく。

## ●母親の職業と子どもへの態度)))

まず、表4-1「日頃子どもの世話を十分にしているか」を職業別にみると、いちばん十分に手をかけて育てている者は、むしろ専業主婦で、66%である。何らかの形で仕事をもつ者をみると、「十分世話ができない」とする者の割合は、手をかけている者を上回る。いちばん世話ができないとする者は、やはりフルタイム勤務者で、「十分世話ができない」と答える者が83%、次いで自営業とパート

タイムで、約6割がそう答えている。

次に、表4-2「子育ては自分に向いているか」で、子育てに「向いている」とする者は、有職者では自営業の母親が62%と最も数字が大きく、次いでパートタイムの47%、フルタイムの43%という順である。また、専業主婦は55%で自営業より低い。子育てが向いていないと思いながら専業主婦をしている母親が、45%もいることになる。

表4-2 母親の職業 × 子育ては自分に向いているか (%)

|       |        | 向いている | 向いていない |
|-------|--------|-------|--------|
| 母親の職業 | 専業主婦   | 55.3  | 44.7   |
|       | フルタイム  | 43.3  | 56.7   |
|       | パートタイム | 47.2  | 52.8   |
|       | 自営業    | 62.4  | 37.6   |

さらに、表4-3「幼児の母親がフルタイムの仕事をするのは、子どもの成長にプラスかマイナスか」では、専業主婦では88%が「マイナス」としているのに対し、パートタイムでは83%、自営業が80%、最も低いのがフ

ルタイムで、57%となっている。しかし、数値は最も低いとはいえ、フルタイムで働き、保育所利用等に預けることをマイナスと思いながら、働き続ける母親も多いことがわかる。

## ●教育期間との関連)))

母親の教育を受けた期間の長さは、子育てについての意識をどう変えるだろうか。まず意見のレベルでみると、表4-4は教育歴と「結婚生活に子どもは必要か」との関連である。教育歴が長くなるにつれて「子どもはいなくてもいい」とする者が多くなる傾向がみられ

る。

表4-5は、「赤ん坊から保育所に預けること」も、四大卒では、保育所での保育を「かわいそうでない」とする者が有意に増えている。

表4-3 母親の職業 × 幼児の母親がフルタイムの仕事をするのは、子どもの成長にプラスかマイナスか (%)

|       |        | マイナスが多い | プラスが多い |
|-------|--------|---------|--------|
| 母親の職業 | 専業主婦   | 87.8    | 12.2   |
|       | フルタイム  | 56.8    | 43.2   |
|       | パートタイム | 83.0    | 17.0   |
|       | 自営業    | 79.6    | 20.4   |

表 4 - 4 母親の教育歴 × 結婚生活に子どもは必要か

(%)

|     |      | 必ずしも子どもは<br>いなくてもいい | ぜひ子どもが<br>ほしい |
|-----|------|---------------------|---------------|
| 教育歴 | 高校卒業 | 17.5                | 82.5          |
|     | 短大卒業 | 22.8                | 77.2          |
|     | 四大卒業 | 25.3                | 74.7          |

表 4 - 5 母親の教育歴 × 赤ん坊から保育所に預けること

(%)

|     |      | かわいそう | かわいそうでない |
|-----|------|-------|----------|
| 教育歴 | 高校卒業 | 86.6  | 13.4     |
|     | 短大卒業 | 87.8  | 12.2     |
|     | 四大卒業 | 75.9  | 24.1     |

## ●育児不安をもつ層の分析)))

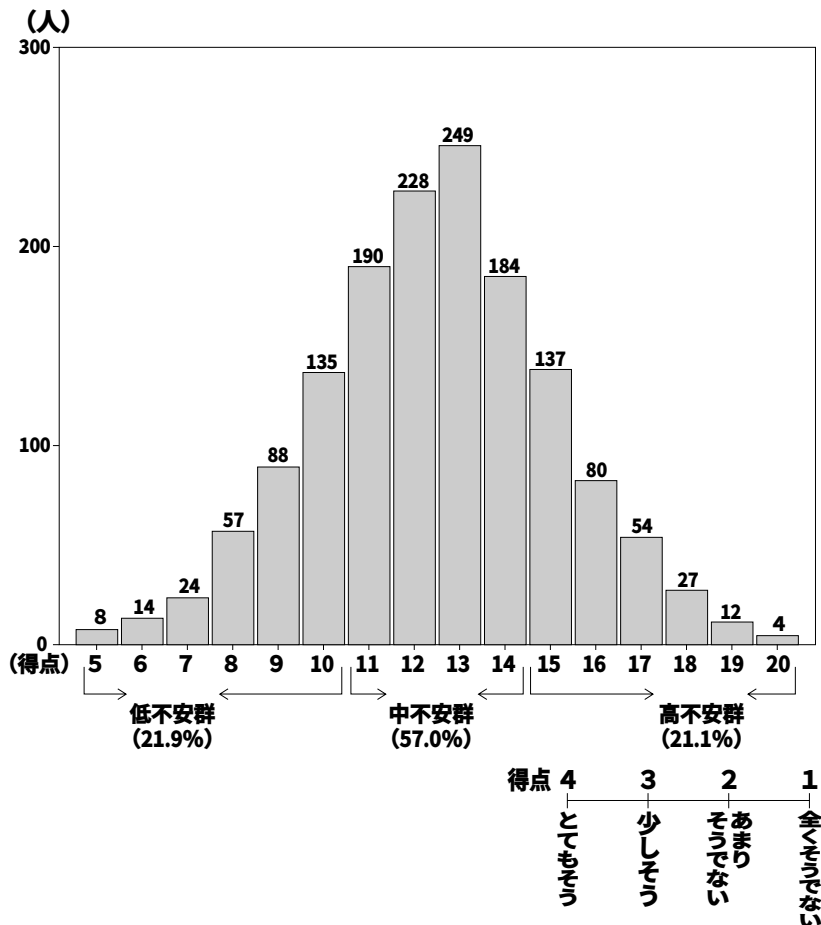
子どもを育てるときには、大なり小なり心配や不安がつきものである。子どもを注意深く見守るためには、必ずしも不安がない方がよいわけではない。しかし必要以上に強い不安や心配は、育児の質に問題を生み出す。落ち着いた子育ては、ほどほどの不安があってこそ、うまくできるのかもしれない。一般に育児不安とは、子育てにおける過度の不安や心配を指すが、次にこの問題を分析してみたい。

図4-4は、先にみた育児不安にかかわる

5項目をとりあげ、「1.ときどき子どもをヒステリックに叱ってしまう」から「5.子どもが思い通りに育っていないと感じる」までについて、「とてもそう」と答えた者から「全くそうでない」と答えた者に、それぞれ4点から1点を与え、その合計点の分布を示した。

次に母親の育児不安の高さを、合計点を用いて3群に分類し、それぞれ高不安群、中不安群、低不安群と名づけ、育児不安の要因との関連を分析することとした。

図4-4 育児不安得点分布図





## 1) 年齢、教育歴、職業との関連で

まず母親の年齢との関連をみてみる。表4-6では、子どもの数の影響を除くために、子どもが2人の場合に限定し、その育児不安得点を比較してみたが、年齢と共に有意に高不安群が減っている。なお表4-7は、先にみた5項目の中から、「ときどき子どもをヒステリックに叱ってしまうことがあるか」ととりあげて、年齢との関連をみている。30歳未満の母親では、「とてもそう」と答えた者が26%、40歳以上の母親では13%と、母親の年齢が高くなるほど、ヒステリックに叱らなく

なる傾向がみられる。年齢と共に子育てが安定していく様子がみられる。

また、表は省略したが、子ども好きな母親は、子どもが好きでない母親よりも、子どもをヒステリックに叱ることが有意に少ない。また関連して、子ども好きではない母親には、「自分がいい母親かどうか自信がもてない」とする者が子ども好きな母親より、有意に多い。

子育ての経験者が、若い母親の近くにいないようになってきている。必ずしも子ども好きではない若い年齢の母親の育児を援助するために、社会的支援が必要になってきているのではなかろうか。

**表4-6 母親の年齢 × 育児不安**

(子ども数が2人の場合)

(%)

|       |        | 育児不安 |      |      |
|-------|--------|------|------|------|
|       |        | 高不安  | 中不安  | 低不安  |
| 母親の年齢 | 30歳未満  | 32.8 | 45.4 | 21.8 |
|       | 30～34歳 | 20.7 | 61.3 | 18.0 |
|       | 35～39歳 | 19.5 | 54.2 | 26.3 |
|       | 40歳以上  | 19.8 | 57.3 | 22.9 |

**表4-7 母親の年齢 × ときどきヒステリックに叱る**

(%)

|       |        | とてもそう | 少しそう | そうでない |
|-------|--------|-------|------|-------|
| 母親の年齢 | 30歳未満  | 26.2  | 58.3 | 15.5  |
|       | 30～34歳 | 23.8  | 58.8 | 17.4  |
|       | 35～39歳 | 14.4  | 60.5 | 25.1  |
|       | 40歳以上  | 12.7  | 58.4 | 28.9  |

では、子どもの年齢との関連はどうか。表4-8は、子ども数が2人である母親に限定して、その末子の年齢と育児不安得点の関連をみている。末子の年齢が0～2歳と低い群で高不安群に入る者は27%だが、3～5歳では23%、6・7歳と高い群では、11%と、得点が低下し、子どもの年齢が低いほど、育児不安は高まっている。これは、子ども数が1人あるいは3人以上のときも、同じ傾向であった。低年齢の子どもを育てている母親の不安感をどう支えるかが、核家族化し、地域とのかかわりも少なくなっている現状の中で、今後の大きな課題のようである。

表4-9で教育歴との関連をみると、四大卒業群には、高不安者が一番少ない。教育を受けた期間が長いことは、結婚を子育てという枠組みだけでとらえない態度や、子どもへの客観性を生み出すのかもしれない。

次に職業との関連をみていく。表4-10によれば、フルタイム勤務者は、4つの職種の中では高不安者が13%と最も低い。逆にいちばん不安が高いのは専業主婦の母親で、24%の者が高不安群に入っている。社会に残される苛立ちが大きいことも、影響しているかもしれない。

**表4-8 末子の年齢 × 育児不安**

(子ども数が2人の場合) (%)

|       |      | 育児不安 |      |      |
|-------|------|------|------|------|
|       |      | 高不安  | 中不安  | 低不安  |
| 末子の年齢 | 0～2歳 | 27.2 | 54.9 | 17.9 |
|       | 3～5歳 | 23.1 | 57.2 | 19.7 |
|       | 6・7歳 | 11.0 | 58.6 | 30.4 |

**表4-9 教育歴 × 育児不安**

(%)

|     |      | 育児不安 |      |      |
|-----|------|------|------|------|
|     |      | 高不安  | 中不安  | 低不安  |
| 教育歴 | 高校卒業 | 22.6 | 54.9 | 22.5 |
|     | 短大卒業 | 21.7 | 59.2 | 19.1 |
|     | 四大卒業 | 16.2 | 56.4 | 27.4 |

## 2) 子ども好きとの関連で

では、「子ども好きかどうか」との関連はどうか。

**表4-11**によると、「子ども好き」な母親で高不安群に属する者は16%であるが、「あまり子ども好きではない」と答えている母親では高不安者が27%と多くなっている。

育児は負担の多い仕事であるが、子ども好きな母親であればそうした負担も自己犠牲もさして苦にならず、むしろ喜びの多い過程か

もしれない。子どもが好きでないと、これから先の過程は、負担が多く希望のもてない長い道のりになる。不安とは、未来が閉ざされているという感情から起こる。子ども好きでない者に、育児不安が高いのも当然であろう。

育児の質を確保するためには、育児の過程を、不安の少ない幸福感の高いものにする必要がある。それを支える「子ども好き」という感情や態度は、それにしても、一体どうしたら作り出せるのだろうか。

**表4-10 母親の職業 × 育児不安**

(%)

|       |        | 育児不安 |      |      |
|-------|--------|------|------|------|
|       |        | 高不安  | 中不安  | 低不安  |
| 母親の職業 | 専業主婦   | 23.9 | 55.8 | 20.3 |
|       | フルタイム  | 12.6 | 54.4 | 33.0 |
|       | パートタイム | 14.6 | 66.1 | 19.3 |
|       | 自営業    | 15.3 | 57.7 | 27.0 |

**表4-11 子ども好き × 育児不安**

(%)

|     |          | 育児不安 |      |      |
|-----|----------|------|------|------|
|     |          | 高不安  | 中不安  | 低不安  |
| 子ども | 独身時代から好き | 16.2 | 59.9 | 23.9 |
|     | あまり好きでない | 26.8 | 54.2 | 19.0 |

### 3) ゆとりとの関連で

最後に、育児不安と各種のゆとりとの関連をみていこう。

まず先の章で扱った、母親の自由度と育児不安の関連をみてみよう。本調査票では、自由度に関する項目がいくつも含まれているが、その中で育児不安と関連のみられたものは、

2項目のみであった。

**表4－12**は、「友人と夜に外出するか」と育児不安の関連である。夜に外出することが「ひんぱんにある」者には低不安者が多く63%、「月に何度かある」が45%、「たまにある」が24%、夜外出を「ほとんどしない」者では、低不安者が20%と少なく、逆に高不安者が23%と最大である。育児不安の低い者でない

**表4 - 12 夜の外出 × 育児不安**

|      |         | (%)  |      |      |
|------|---------|------|------|------|
|      |         | 育児不安 |      |      |
|      |         | 高不安  | 中不安  | 低不安  |
| 夜の外出 | ひんぱんにある | 0.0  | 37.5 | 62.5 |
|      | 月に何度かある | 15.0 | 40.0 | 45.0 |
|      | たまにある   | 16.1 | 59.8 | 24.1 |
|      | ほとんどない  | 23.2 | 57.0 | 19.8 |

と、家族に後ろめたくて、または心配で、夜に子どもを置いて外出できないのかもしれない。

では経済的なゆとりは、子育てに影響するだろうか。表4-13をみると、「ゆとりがある」と答えた者は高不安者が16%であるが、「ゆとりがない」と答えた者では25%と多くなっている。育児不安と経済的要因とののか

わりも大きいようである。

また表4-14で生活への満足度との関連をみても、生活全般に満足している高満足群には高不安者が10%しかいないが、中満足群では15%、低満足群では34%と有意な関連をもって増加している。子育ては、経済も含めた生活のトータルな安定度と密接にかかわる過程であることがわかる。

**表4-13 生活のゆとり × 育児不安**

(%)

|     |        | 育児不安 |      |      |
|-----|--------|------|------|------|
|     |        | 高不安  | 中不安  | 低不安  |
| ゆとり | ゆとりがある | 15.7 | 55.5 | 28.8 |
|     | ゆとりがない | 25.1 | 58.3 | 16.6 |

**表4-14 生活満足度 × 育児不安**

(%)

|       |      | 育児不安 |      |      |
|-------|------|------|------|------|
|       |      | 高不安  | 中不安  | 低不安  |
| 生活満足度 | 高満足群 | 10.2 | 47.3 | 42.5 |
|       | 中満足群 | 15.0 | 61.5 | 23.5 |
|       | 低満足群 | 33.8 | 54.0 | 12.2 |

## 5

## 母親のジェンダー観



ジェンダーとは、生物学的な雌雄（SEX）ではなくて、文化的・社会的に形成された「男らしさ・女らしさ」のことである。男らしさ・女らしさと人々が考えている内容は、人の意

識や行動の背後にあって、人を拘束する。本サンプルの若い母親には、どのようなジェンダー観があるのだろうか。

## ●性役割受容とジェンダー観をめぐって)))

まず第1章の図1-8 (p.17) に掲げたように、本サンプルの母親は8割が再び女性への生まれ変わりを望んでおり、性役割を受容している人々であるが、2割はそうでない。どんな母親が女性役割を受容できないでいるのか、まずみてみよう。

データを解析してみると、予想された学歴、職業、子ども数などの個人的属性と「生まれ変わりの希望」とは、ほとんど有意な関連がなかった。わずかに見いだされた関連は、年齢では、若い母親の方が年輩の母親よりも、また夫の職業では、自営業より会社員・公務

員の妻の方が、女性への生まれ変わりを望んでいるということである。若くて幼児のいる母親は、子育てという意味ある役割を担う幸福感の中にいる。そうした生きがいの中で、個人的特性の薄い、いわば「団塊の人々」が幼児の母親なのかもしれない。

そのことを示すのが、次の図5-1である。諸条件の中で、いちばん性役割受容と明瞭な関連が見いだされたのは、母親のもつ生活への満足度であった。図が示すように、「とても・かなり満足な群」で「女性に生まれ変わりたい者」は87%いるが、「まあ満足群」で

は79%と大きく低下し、「不満群」では75%となっている。

次に図5-2はジェンダー観をみるための項目である。以下では肯定率は「とても」と「わりと」を合算した値で示していく。

ここに示された6項目のうち1から4は伝

統的な性役割観を示した項目で、5と6は反対に、性役割から自由な意見の項目である。

そのうちまず、伝統的な性役割項目を否定する率が高いのは、「3. 異性の友人との飲酒や食事をして、かまわない(59%)」「4. 男性は家事に協力するより外で仕事、には

図5-1 もしも生まれ変わったら、女性に生まれたい × 母親の属性 (有意差のあったもの)

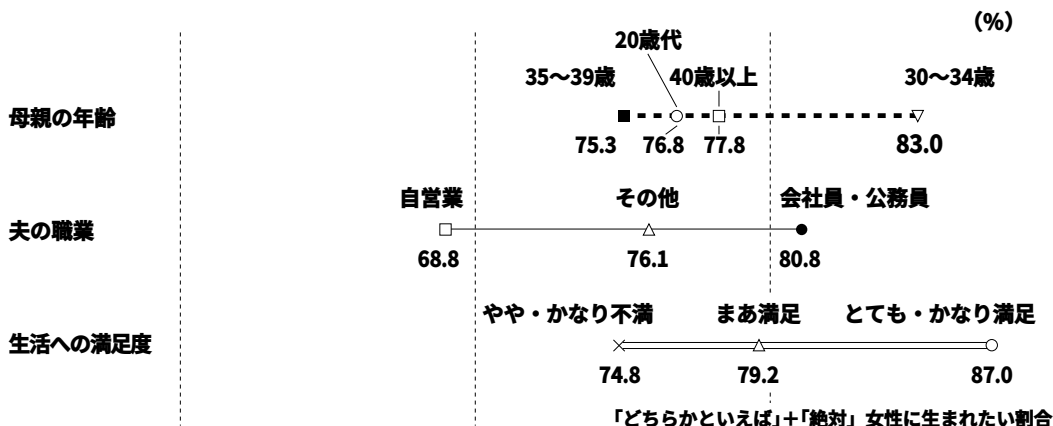


図5-2 ジェンダー観

|                                  | とてもそう思う | わりとそう思う | あまりそう思わない | 全然そう思わない |
|----------------------------------|---------|---------|-----------|----------|
| 1. 男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てる      | 16.1    | 44.0    | 34.4      | 5.5      |
| 2. 夫以上に心のきずなの強い異性との友人関係は避けるべきだ   | 15.4    | 41.3    | 37.1      | 6.2      |
| 3. 既婚女性は異性の友人との食事や飲酒を避けるべきだ      | 10.3    | 30.5    | 48.3      | 10.9     |
| 4. 男性には、家事に協力するより、外でバリバリ仕事をしてほしい | 7.2     | 33.8    | 51.8      | 7.2      |
| 5. 経済的にゆとりがなくても、自分の服や化粧品を買ってよい   | 27.7    | 51.9    | 16.9      | 3.5      |
| 6. たいていの女性は大企業の課長の仕事でも十分こなせる     | 12.7    | 45.6    | 38.8      | 2.9      |

反対(59%)」で肯定率を上回っている。また残りの項目も、「1. 男(女)の子は、男(女)の子らしく育てた方がいいとは思わない(40%)」「2. 夫以上に心のきずなの強い異性の友人を作ってもいい(43%)」となっている。

また、逆方向の項目では、「5. ゆとりがなくとも、自分の服や化粧品を買ってよい(80

%)」「6. 女性でも、大企業の課長の仕事は十分こなせる(58%)」となり、性役割の否定率がかなり高いことがわかる。

以上を総合すると、少なくとも意見のレベルでは、母親のジェンダー観は、伝統的な縛りから、かなり解放されてきているようである。

## ●ジェンダー観と母親の属性)))

次に、ジェンダー観と母親の属性とのかかわりをみていこう。

まず、ジェンダー観と母親の年齢との間には、いずれの項目においても有意な差が認められなかった。これは本サンプルの場合、母親の年齢に開きが少なかったためだろう。

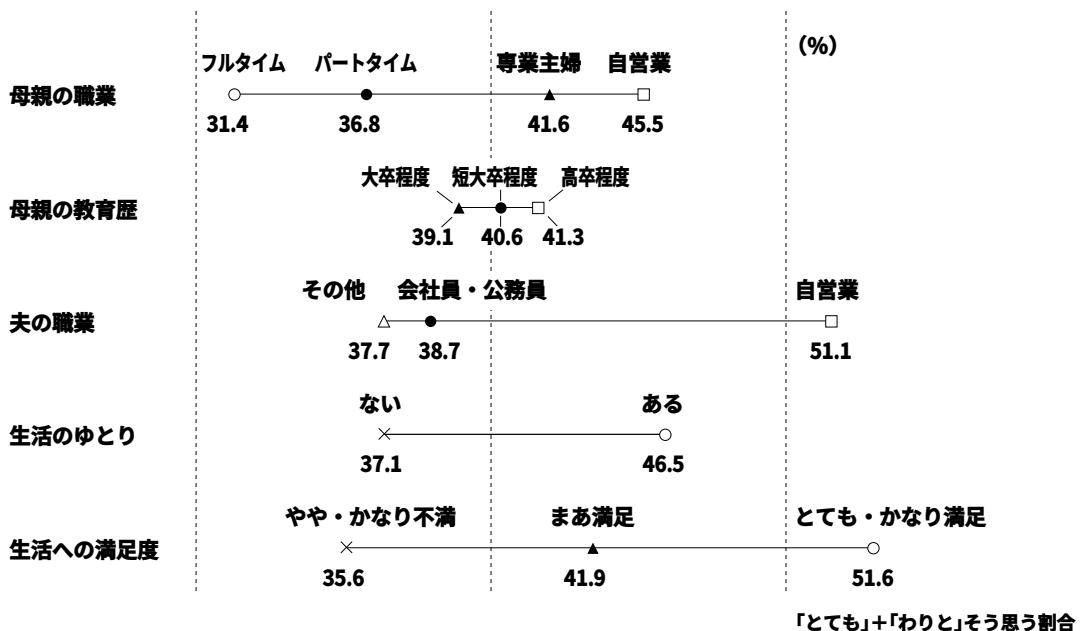
質問によって違うものの、その他の個人的属性は、母親の中の性役割の受け入れと、か

なり密接な関連がみられる。

1) まず「男性には、家事に協力するより、外でバリバリ仕事をしてほしい」のは、図5-3に示したように、以下のような母親である。

- ①専業主婦、自営業の母親
- ②比較的教育歴が短い母親
- ③生活にゆとりのある母親

図5-3 男性には、家事に協力するより、外でバリバリ仕事をしてほしい × 母親の属性





2)「夫以上に心のきずなの強い異性との友人関係は避けるべきだ」という意見は、**図5-4**に示したように、

- ①自営業や専業主婦、パートタイムに従事している母親
  - ②教育歴が長い母親
  - ③生活にゆとりのある母親
- が支持する傾向がみられる。

3)「たいていの女性は大企業の課長の仕事でも十分こなせる」を支持する母親は、図は省略するが、

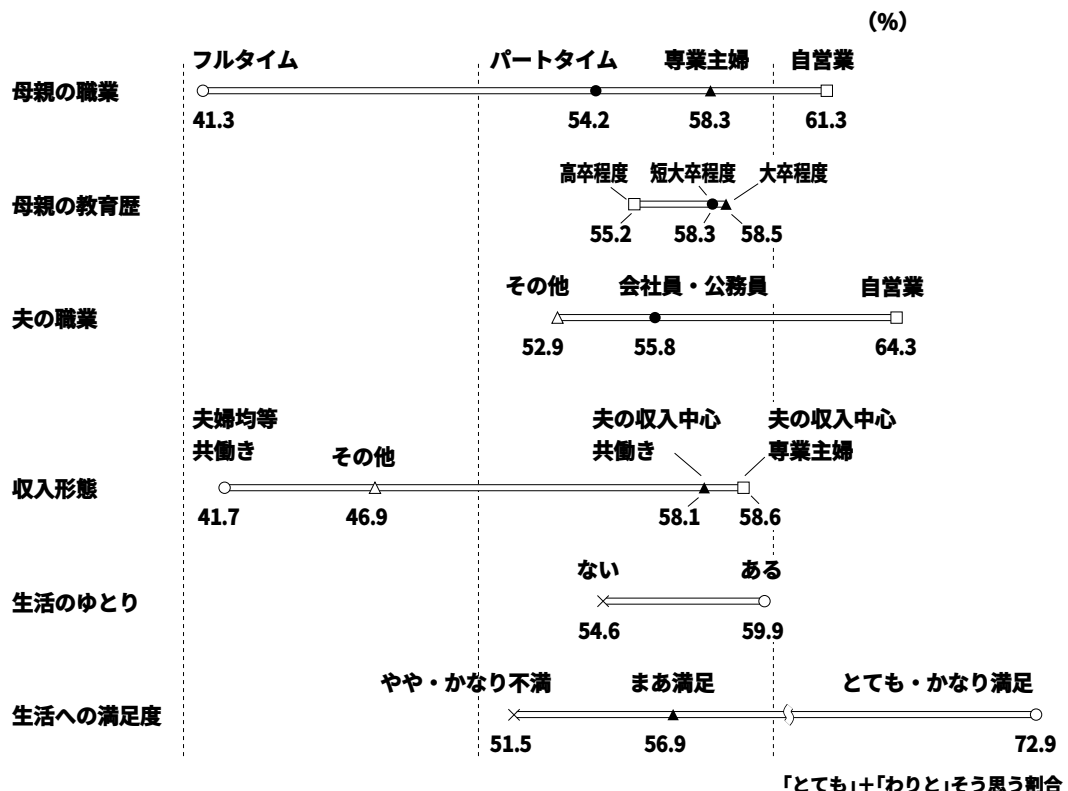
- ①教育歴が長い母親  
(大卒程度：66%＞高卒程度：57%)
- ②夫婦の収入がほぼ均等な共働きの母親  
(夫婦均等：64%＞他の場合は57%台)

であった。なお母親の現在の職業や生活への満足度との関連はみられなかった。

前節で指摘したように、性役割受容は、生活満足感との関連が密接なだけで、他の個人的属性との関連が薄かったが、意見調査であるジェンダー観については、生活への満足感以外にも、いくつかの個人的属性との関連が見いだされた。すなわちジェンダー観の形成には、教育歴や現在の就労形態、夫婦間の経済関係（妻の経済的自立性）などが関わっている。

つまり子どもを育てるとは、自分が培ってきたジェンダー観を捨てて、性役割を受容させてしまうほど「生活充実感」が伴う過程なのであろう。

**図5-4 夫以上に心のきずなの強い異性との友人関係は避けるべきだ × 母親の属性**



## ●「気がひけること」の分析)))

気がひけるとは、他人からの期待に添わない行動（またはそう感じる行動）をするときに生まれる感情で、用意した項目の場合は、母親が夫に対して、伝統的な性役割から外れて行動しようとする場面を集めてある。

第2章の図2-7 (p.25) に示したように、「全部夫の収入で暮らしていくこと」は7割以上の母親が気がひけないと答えているし、「へそくり」もそれに近い。昔の主婦はしばしば「夫に養われている」感情をもっていたと聞かすが、いろいろな意味で、個人としての力と自立性を備えた現代の主婦は、収入の有無は家庭内地位を規定するものではなく、ただの役割分担にすぎないというわけであろう。そういえば、妻の家事労働を経済的に評価する試算もされている。

また、家庭内で伝統的な女性役割を代わってもらふことでは、「夫に居間の掃除をしてもらう」（気がひけると思わない者が51%）、「夫に夕食を作ってもらふ」（同じく48%）と、夫に対し「気がひける感情」は、ずいぶん少なくなっている。今も夫に感じるひけめは、夫に子どもを預けて外出する場合に多く生まれるものらしい。家事は夫に分担させて

も、育児となるとやはり母親たる自分の役割、という意識が強いのであろう。

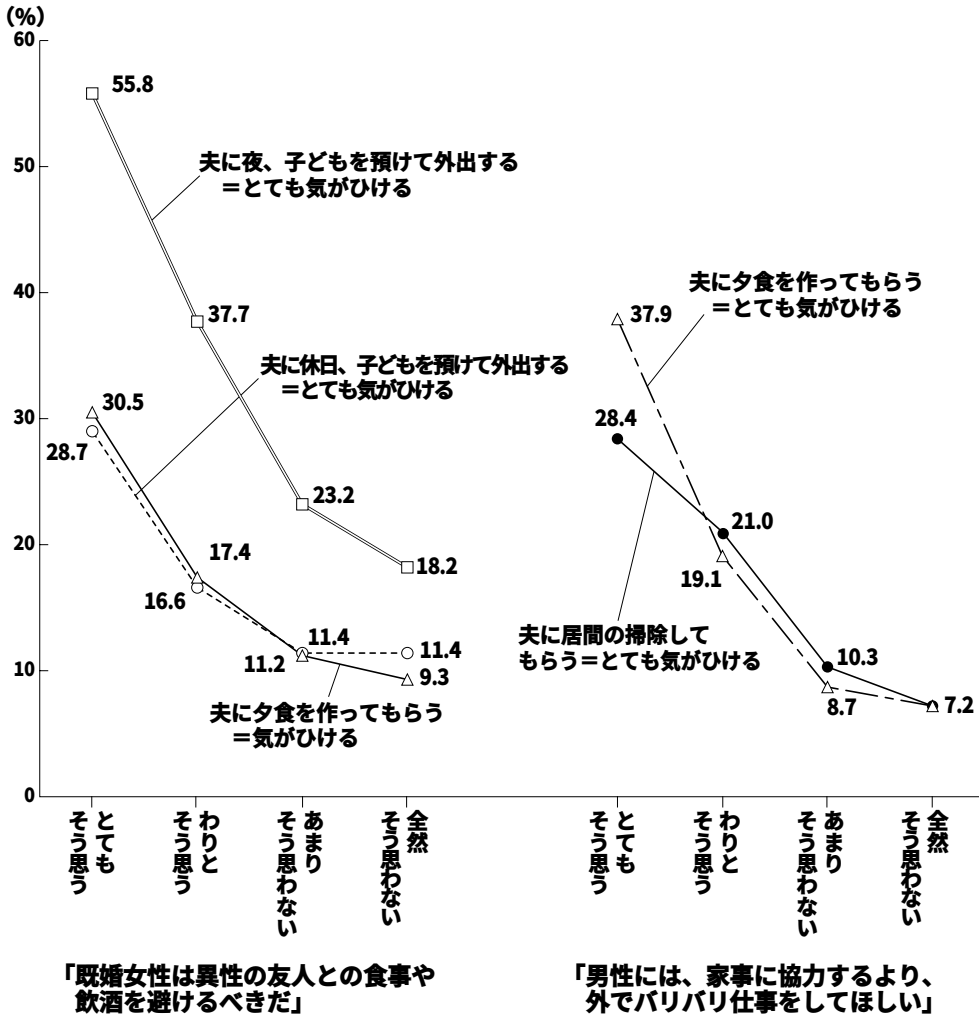
ところで、母親が自分の行動にひけめを感じるかどうかは、母親が抱いているジェンダー観と大きく関連していることがわかる（図5-5）。家事は女性がするものとする母親は、夫に夕食を作らせたり掃除をさせたりすることに、とても気がひけると答えている。

また、既婚女性は異性の友人との食事や飲酒を避けるべきだと考える母親は、夫に子どもを預けて、夜間にあるいは休日に出することに、とても気がひけるという。

言い換えれば、母親が「気がひける感情」を抱くことが、全体としては少なくなっているのは、背景にあるジェンダー観が伝統的な「縛り」から、かなり解放されてきているためかもしれない。

なお図には示さなかったが、「たいていの女性は大企業の課長の仕事がこなせる」と考えたり、「自分の服や化粧品はゆとりがなくとも買ってもよい」と思う母親は、家事をしないことや、外出して子どもや夫の世話をしないことへの罪悪感が軽い傾向もみられた。

図5-5 ジェンダー観 × 「気がひけること」



## ●母親は「一人の女」として行動できるか)))

さて、伝統的な妻の役割には、家庭内のことを背負う以外に、もう1つの側面、すなわち「異性としての夫への忠実」という側面がある。現代の若い母親のそうした側面での、意識と行動の一端をみてみよう。

図5-2 (p.57) をみると、「夫以上に心のきずな強い異性との友人関係は避けるべきだ」や「既婚女性は異性の友人との食事や飲酒を避けるべきだ」は肯定率がそれぞれ6割と4割で賛否が拮抗している。妻であり母親であっても男性とのかかわりを閉ざさないという、まさに性のあり方のレベルでジェンダー観は揺らぎ、変容しつつあるのかもしれない。

図5-6は、「既婚女性が、昔の異性の友人や職場の男性と食事や飲酒を共にするのは、できるだけ避けるべきである」という意見と生活態度とのかかわりをみたものである。図が示すように、この意見を支持する母親は、「子どもの世話が好き」「掃除が好き」「夫の世話が好き」である。すなわち伝統的なジェンダー観を保持して、夫への性的な忠実さを尊重する母親は、夫や子どもの世話をし、また掃除することを好み、友人と飲酒をしたり夜に出歩いたりすることが少ない。生活への満足度が高く、母親として妻としての役割に適合した生活をしている。

これに対して、異性との交流や心のきずなを結ぶことを肯定する母親は、家事や家族の世話をあまり好まず、夜間に出歩いたり飲酒をする機会が多い母親たちである。また、前節でみたように、子どもを夫に預けることや、夫に家事をまかせることへの罪悪感が薄い。

その属性は図5-4 (p.59) でみたように、共働きで、フルタイムの仕事に従事し、夫婦がほぼ均等に家計を支え、しかも生活にゆとりがないと感じている層に多い。総じて生活

への満足度が低い。

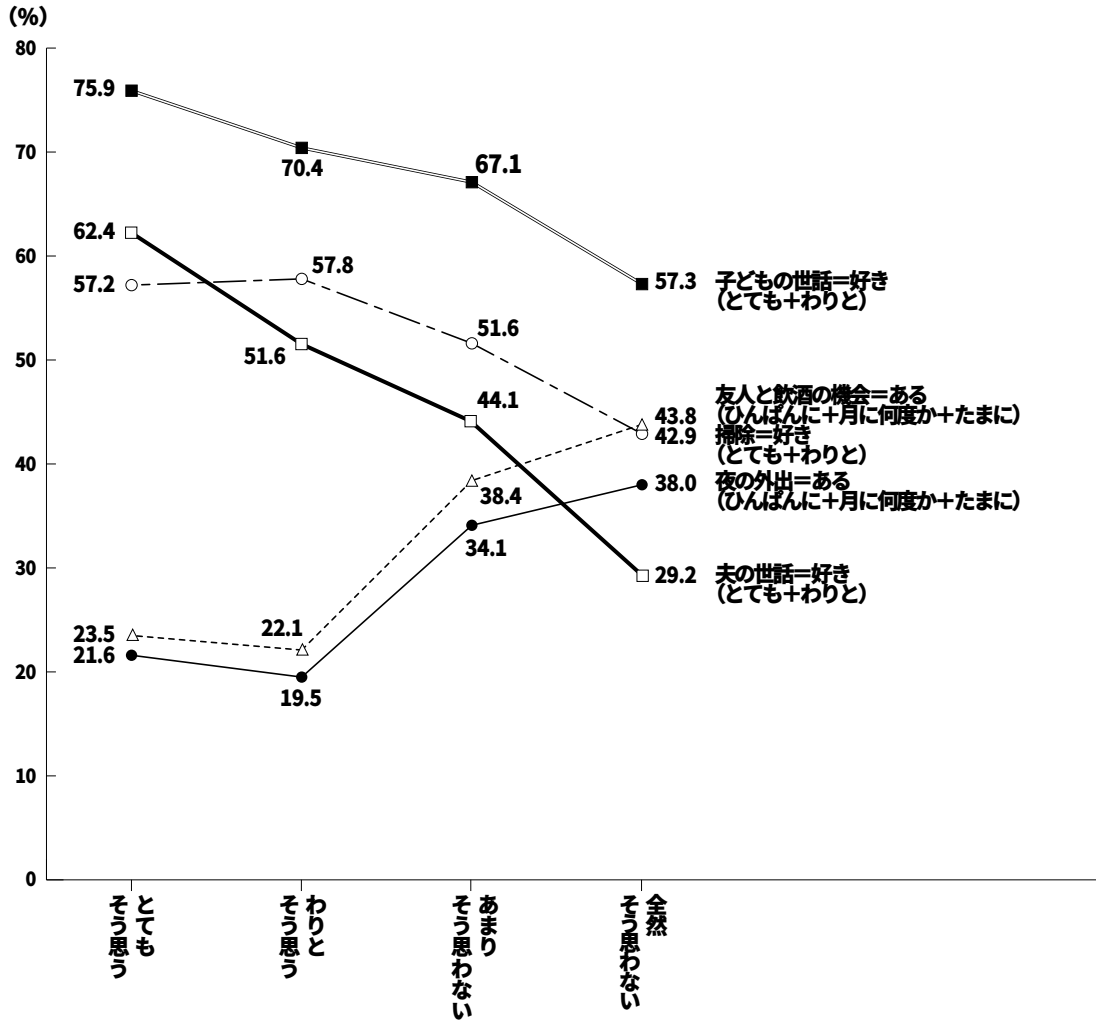
伝統的なジェンダー観から解放されることは、母親が一人の女性として精神的・経済的に自立してきたことのほかに、家庭生活に不満や矛盾を感じていることとも深くかかわっているのである。

ところで、飲酒については、図には示していないが、独身時代も現在も飲酒することが「よく」ある母親は、既婚女性が異性と飲酒することを認める傾向がある（<sup>\*</sup>相関係数 $r=-.16$ ）。昔からの飲酒の習慣が結婚後の家庭外での飲酒への抵抗感を弱めているのは当然だといえる。ただ、独身時代の飲酒行動の多さと、夫以外の異性と心のきずなをもつことを容認することとがかかわっている（ $r=-.14$ ）ので、飲酒行動をみるときに飲酒にともなう人間関係の結び結び方を無視することはできないようである。

ついでに、「ゆとりがなくても自分の服や化粧品を買ってよい」と考える母親は、独身時代からコンサートやショッピングに行き気持ちは発散させ（ $r=.21$ ）、流行の髪型や服装に気をつかい（ $r=.15$ ）、マニキュアをしていた（ $r=.13$ ）。母親となった現在も流行には気をつかい（ $r=.22$ ）、外出の予定がなくてもしっかりとマニキュア（ $r=.12$ ）などの化粧をしている（ $r=-.22$ ）。女性にとって化粧とは、複合的な意味を持つ行為で、独身時代から培った1つのライフスタイルなのであろう。

〔\*「相関係数 $r$ 」とは、2つの要因の変化の間に関連性があることを示す値である。 $r$ の絶対値が0.2前後であれば、ごく弱い関連が認められると考える。〕

図5 - 6 母親の妻役割の受容と生活意識、行動



「既婚女性は異性の友人との食事や飲酒を避けるべきだ」

## 6

## 自分の生活に満足している母親とは



ここまで、乳幼児から小学校低学年の子どもをもつ母親の生活実態を、外出などの行動の自由度、家事の遂行、家庭生活でのフラストレーション、ジェンダー観、育児不安などの観点から報告・検討してきた。最後に本章では、以上をまとめて、現在の自分の生活に満足しているのはどのような母親かを検討していく。

第1章で報告したように、生活に対する母親のトータルな満足度は、「とても満足（4%）」「かなり満足（9%）」「まあ満足（50%）」「やや不満足（28%）」「かなり不満足（9%）」のような5段階での自己評価をもとにしている。ここでは、これら5段階を3段階にまとめて検討する。すなわち、「とても満足・かなり満足」を合わせた13%を高満足群、「まあ満足」と答えた50%を中満足群、「やや不満足かなり不満足」を合わせた37%を低満足群とする。

## 1) 母親の属性と生活満足度

まず、図は省略したが、生活満足度と母親の職業との関連に有意な差はみられなかったものの、低満足群にはパートタイム従事者が多く（高満足群11%、低満足群19%）、専業主婦がやや少なかった。また図6-1が示すように、低満足群の夫は高満足群の夫に比べて、「仕事中心」のライフスタイルをもつ傾向がみられる。昔と比べ、仕事一筋で家庭を顧みない男性の生き方を、妻が受け入れなくなっている感じがする。教育歴との関係を見ると、教育歴の長い母親の方が満足度が高い傾向がみられた。

なお、母親自身の年齢や末子の年齢とは、あまり関連がみられなかった。

## 2) 生活のゆとりと生活満足度

図6-2に示したように、「生活にゆとりがある者」は生活の満足度が高い。同様に、小遣いの額、自分名義の預貯金、「へそくり」も

図6 - 1 生活満足度 × 夫の「仕事と家庭」の比重

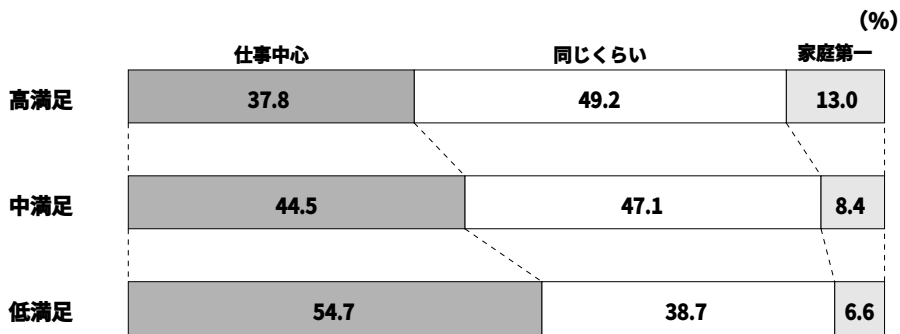
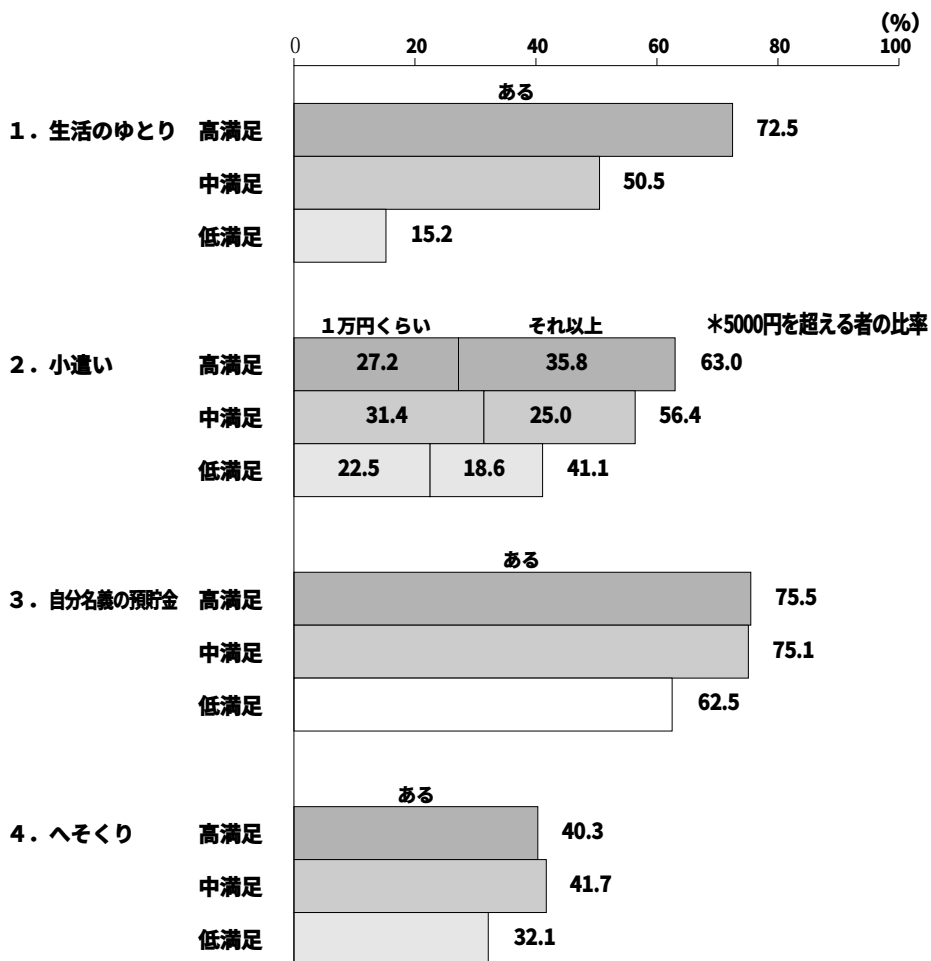


図6 - 2 生活満足度 × 生活のゆとり





満足度と関連をもっている。生活の満足度は経済力によって、大きく規定されるようである。

### 3) 家庭生活と満足度

次に、満足度の高低によって、生活のスタイルに差がみられるかを検討してみる。図は省略したが、まず、外出の機会についてみると、経済力が関係する「コンサートやショッピングに行って、パーッと気持ちを発散させることがある」者は高満足群に多かったが、夜の外出や飲酒の機会には、あまり差がみられなかった。「家にいるのと外出するのとどち

らが好きか」では、高満足群が「家にいるのが好き」と回答する傾向がみられた。実際の外出の頻度よりも、それを十分だと感じるかどうかは異なっているかもしれない。

家事については、第3章で述べたように、低満足群の方が負担感が強かった。

家事を行う頻度では、高満足群の方が掃除機を使う頻度が高いという傾向がみられた。掃除機を使う頻度には、家事が好きかどうかという側面と、掃除を何度もできる時間のゆとりがある生活かどうか（専業主婦）という側面とが考えられそうだ。ただ、実際の家事負担がどうなのかについては、本調査

図6-3 生活満足度 × ジェンダー観  
(男性にはバリバリ仕事をしてほしい)

|     | とても<br>そう思う | わりとそう思う | あまりそう<br>思わない | 全然そう<br>思わない |
|-----|-------------|---------|---------------|--------------|
| 高満足 | 10.6        | 41.0    | 43.6          | 4.8          |
| 中満足 | 6.4         | 35.6    | 53.0          | 5.0          |
| 低満足 | 7.3         | 28.3    | 53.0          | 11.4         |

図6-4 生活満足度 × ジェンダー観  
(男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てる)

|     | とても<br>そう思う | わりとそう思う | あまり<br>そう<br>思わない | 全然そう<br>思わない |
|-----|-------------|---------|-------------------|--------------|
| 高満足 | 22.9        | 48.3    | 22.9              | 5.9          |
| 中満足 | 15.1        | 43.5    | 35.9              | 5.5          |
| 低満足 | 15.5        | 43.9    | 35.4              | 5.2          |



だけではわからない。

なお、夫の家事参加・協力については、全般に低調であることもあり、満足度との関連はうすかった。

#### 4) 性役割観と満足度

生活満足度は、ジェンダー観や性役割観とも関連している。「男性には、家事に協力するより、外でバリバリ仕事をしてほしい」(図6-3)、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てた方がいい」(図6-4)等の項目について、高満足群の方が肯定率が高かった。

またセクシュアリティにかかわる2つの項目、つまり「結婚した女性が、昔の異性の友人や職場の男性と食事に行ったり、(軽くにせよ) 飲みに行ったりするのは、できるだけ避けるべきである」(図6-5)や「結婚したら、(男女の関係はなくても) 夫以上に心のきずなの強い異性との友人関係は避けるべきだ」(図6-6)という考え方についても同様に、高満足群の方に肯定する者が多かった。現在の生活に満足度の低い女性は、「母親」や「妻」というだけの存在には飽きたらず、女性として異性との交流を求めるのかもしれない。

図6-5 生活満足度 × ジェンダー観  
(異性の友人との食事や飲酒は避けるべき)

|     | とても<br>そう思う | わりとそう思う | あまりそう<br>思わない | 全然そう<br>思わない (%) |
|-----|-------------|---------|---------------|------------------|
| 高満足 | 16.5        | 37.3    | 35.6          | 10.6             |
| 中満足 | 10.4        | 30.6    | 50.6          | 8.4              |
| 低満足 | 7.9         | 28.2    | 49.7          | 14.2             |

図6-6 生活満足度 × ジェンダー観  
(夫以上に心のきずなの強い異性との友人関係は避けるべき)

|     | とても<br>そう思う | わりとそう思う | あまり<br>そう思わない | 全然そう<br>思わない (%) |
|-----|-------------|---------|---------------|------------------|
| 高満足 | 21.8        | 51.1    | 21.8          | 5.3              |
| 中満足 | 17.1        | 39.7    | 39.3          | 3.9              |
| 低満足 | 11.6        | 39.9    | 39.1          | 9.4              |

さらに、図6-7で夫の家事参加・協力に対する罪悪感についてみると、「夕食作り」などの項目について、高満足群の方が「気がひける」という回答が多く、家事を自分の「仕事」

ないしは役割として受け入れている。第3章でも触れたが、高満足群は育児不安も弱く(図6-8~12)、母親役割にも順応できているようである。

図6-7 生活満足度 × 罪悪感  
(夫の夕食作りに気がひける)

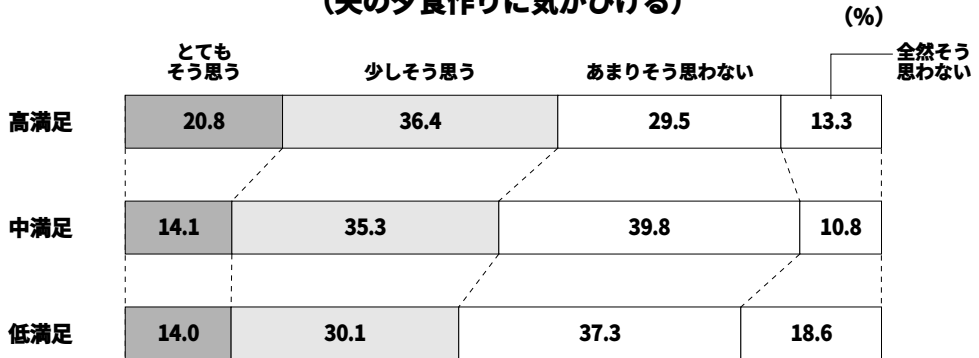


図6-8 生活満足度 × 育児不安  
(子どもをヒステリックに叱ってしまう)

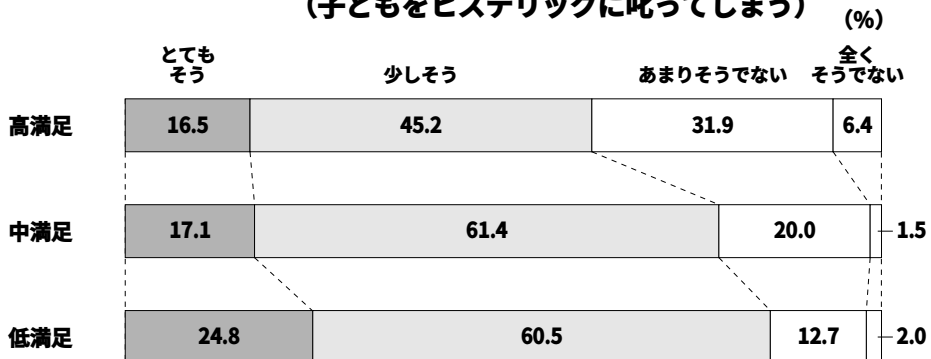
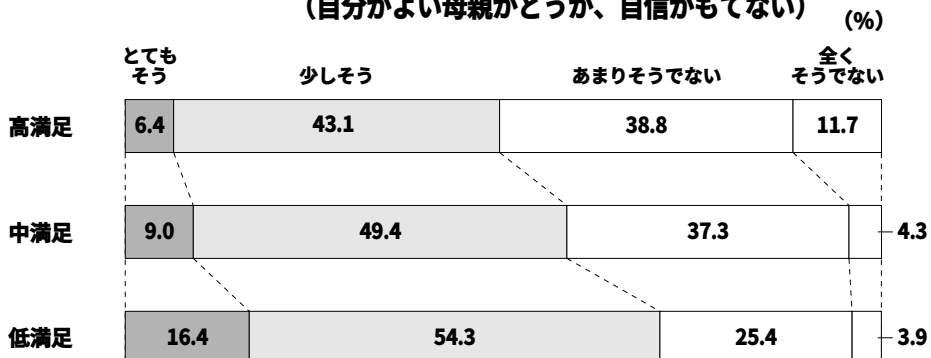


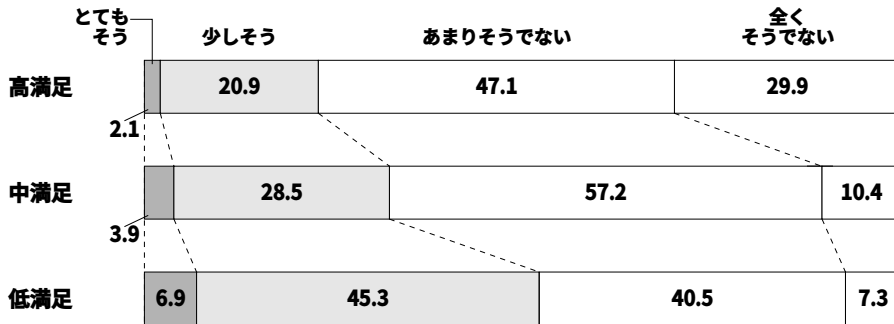
図6-9 生活満足度 × 育児不安  
(自分がよい母親かどうか、自信がもてない)



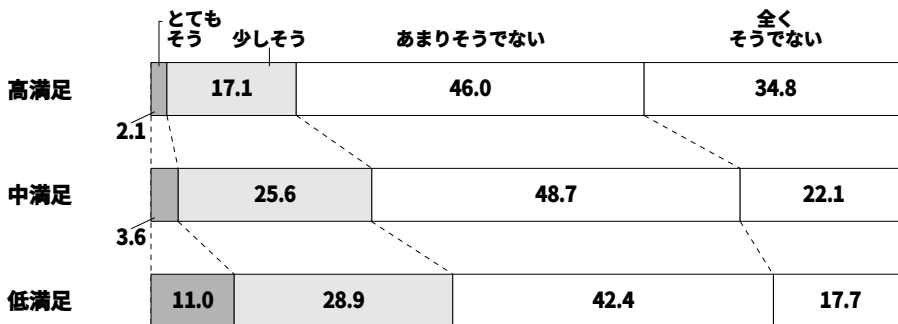
このように、伝統的な性役割を受容し適応している母親が、現在の家庭生活中心の生活に適応し、満足できる、という状況がみられる。生活満足度は経済力のほか、女性として

人間として、どのような人生を送りたいかという志向性やジェンダー観・性役割観によっても左右されるのであろう。

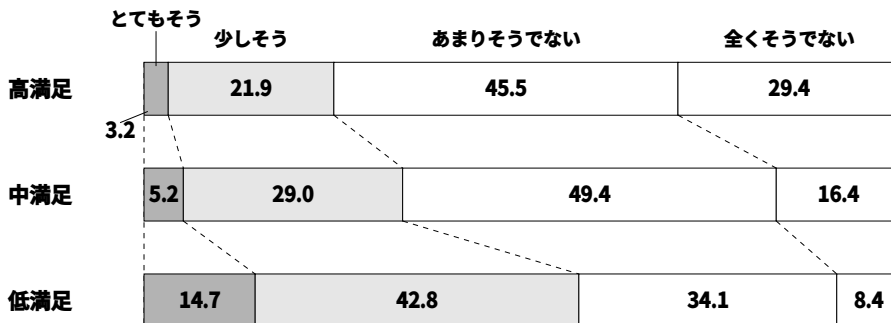
**図 6 - 10 生活満足度 × 育児不安**  
(子どもが思い通りに育っていないと感じる) (%)



**図 6 - 11 生活満足度 × 育児不安**  
(育児に明け暮れていて、社会から取り残される) (%)



**図 6 - 12 生活満足度 × 育児不安**  
(自分のやりたいことができなくて焦りを感じる) (%)



以上の結果をまとめたのが、下の表である。

| 高満足群                                                                                                                                                                          | 低満足群                                                                       |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・専業主婦</li> <li>・高学歴</li> </ul>                                                                                                         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・パートタイム</li> <li>・夫は仕事中心</li> </ul> |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・経済的にゆとり</li> <li>・小遣いが多い</li> <li>・自分名義の貯金がある</li> <li>・へそくりがある</li> </ul>                                                            |                                                                            |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・たまに外で発散する</li> <li>・外出より、家にいるのを好む</li> <li>・よく掃除する</li> </ul>                                                                         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・家事の負担感が強い</li> </ul>               |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てた方がいい</li> <li>・男性は外でバリバリ仕事をしてほしい</li> <li>・異性の友人と飲みに行くのは避けるべき</li> <li>・夫以上に心のきずなの強い異性との友人関係は避けるべき</li> </ul> |                                                                            |

以上、検討してきたように、生活の満足感  
は、本人の精神的安定だけでなく、育児の質  
をも高めると考えられる。育児不安をなくし、  
育児の質を確保するためにも、母親の生活満  
足感を高めることが必要であり、それに向け  
ての家族的、地域的、社会的支援が必要であ  
ろう。

〔対談〕

# 少子化と これからの子育て



## ●対談



# 少子化と

網野武博氏  
(東京経済大学教授)

深谷昌志氏  
(尚美学園短期大学教授)

## 〔はじめに〕

子どもの問題を語るときに、最も深刻なのは、少子化の動向であろう。そこでこの分野の専門家である網野教授から、少子化と母親のあり方の問題をお聞きすることにした。

(深谷)

## 50数年後に65歳以上の人が3分の1に

**深谷** 現代はいわゆる少子化に歯止めがかからないという状況ですが、先生は少子化についてどのような考えをお持ちでしょうか。

**網野** 最近、国立社会保障・人口問題研究所が「将来推計人口」というのを公表しました。それによると予想外に子どもが減っている。そしてこれからも、今までの推計値で出していた一番低い値よりもさらに低くなるだろうと予測しています。2050年には65歳以上の人が全体の3分の1になる。信じられない数値です。

**深谷** かなり深刻な状況ですね。

**網野** 当然平均寿命が延びているということも関係しているのですが、一方では子どもの絶対数が減るばかりなので、そのような状況になるということです。ほんの30年か20年前には、町中に子どもの声が広がっていましたが、最近は聞こえなくなったということの実態が、現実の問題としてはっきりと数字に出てきたということです。

**深谷** 何年か前に1.57ショックというのがありましたが、今になると合計特殊出生率が1.5というのはまだいい方で、なつかしい数字になってしまったということでしょうか。最近は1.4とか…。

**網野** 1.43ですね。

**深谷** その数字についても、見通しはかなり暗いのですか。

**網野** 最も低い予測では、1.2台くらいまで下がるだろうと言われています。その後は上昇することが予想されてはいますが…。

**深谷** 2.08だと人口が維持できると言われていますね。1.2というとかかなり減るわけですか。

**網野** そうですね。最も低い予測では、100年後に約6800万人、今の人口の約半分ですね。それが100年後の現実です。もちろん人口が減ることが一概に悪いこととは決めつけられません。しかし今は、あまりにもディメリットな面に焦点があてられていて、人口が著しく減少するということでショックを感じている人が非常に多いのです。もっともそれは、子どもが減ることの深刻さよりも、日本ははたして活力を維持できるのだろうかという不安だと思います。ともあれ私たちは、子どもがどうしてこんなに減るといえるのか、生まれなくなったのかということに関心を持つべきだと思います。

**深谷** 1.2台くらいまで下がるという最も低い場合の予測ですが、その理由としてどの

# これからの子育て

ようなことが考えられるのでしょうか。

**網野** 明らかに晩婚化だと思います。結婚しない人が増えていることも事実ですが、しかしいちばん大きな原因は、昔から言われている「結婚適齢期」、つまり子どもを産んで育てるのにいちばんふさわしい時期より、かなり遅れて結婚する人の割合が非常に増えてきたということだと思います。

**深谷** われわれの時代は結婚年齢は女性は24歳、男性が26歳くらいだったと記憶していますが、今は2歳くらい上がっているのですか。

**網野** そうですね。女性は26歳台、男性は28歳台です。

**深谷** 晩婚ですと、当然子どもはDINKSか、少ないかですね。

**網野** そういうことになりますね。以前は35歳以上は高齢出産と言われましたが、現在は40歳をすぎても医学的にも保健的にも安心して産める基盤ができ上がっています。でもやはり30代後半で結婚しますと、子どもを産むということを控える方が多いようです。

**深谷** 非婚化の比率が高くなっているということも原因のひとつにあげられるのではないのでしょうか。

**網野** 非婚率は現在は7～8%ですが、人口問題研究所の推計ですと、21世紀に入ると13～4%と推定されています。

**深谷** 以前はせいぜい2～3%でしたね。

**網野** 徐々に増えてきていますね。結婚というのはペアですから、仮に女性が結婚したく

なくなると男性も結婚相手がいなくなるということになります。よく女性の非婚率が高くなるなどといいますが、その意味では非婚というのは両方です。しかし現実には女性の意識の変化が大きく、結婚への魅力を感じないという女性が増えてきているのです。

**深谷** 仕事を持っていると、家庭内のいろいろな面倒なことに束縛されることに抵抗を感じるとか…。

**網野** 女性が高学歴になり就職率が高くなる

## 網野武博（あみの・たけひろ）氏 プロフィール

1965年、東京大学卒業。東京経済大学教授。他に、中央児童福祉審議会委員、人口問題審議会専門委員、東京都児童福祉審議会臨時委員、全国ベビーシッター協会副会長、日本総合愛育研究所客員研究員等。

主な著書＝『児童福祉』（編・共著）チャイルド本社、『少子時代の保育園：上』（共著）中央法規出版、『福祉心理臨床』（編・共著）星和書店、『乳幼児保育学』（共著）福村書店、『現代家族と社会保障』（共著）東京大学出版会、『家族－21世紀への展望 2 子どもと家族』（編・共著）中央法規出版、『ハイライト 子ども家庭白書』（編・共著）川島書店。

網野武博氏



と、いろんな異性と触れ合う機会も多くなりますし、考え方も変化してきます。そうしますと「まだ早い」、「もっとふさわしい人がいるのでは…」などと、結婚に対する抑制要因は当然高まると思います。特に最近は、お互いに魅力を感じ合えるような男女の人間関係が薄れてきているのではないかという感じがしますし、女性が魅力を感じるような男性が少なくなっているのではという気がします。

**深谷** なぜでしょう。

**網野** やはり女性が自分で判断して行動するようになってきたということが影響していると思います。

**深谷** 女性が世の中の変化にわりと早い段階で適応してきているのに、若い男性は対応が遅れているという感じはしますね。女性からすると、今の男性はちょっと心もとないということになる。それが非婚化のひとつの要因になっているということですね。もうひとつが晩婚化ということですね。結婚しても母親が高齢ということで子どもを持つということを躊躇するという…。

**網野** 重要なことは、子どもを産んでもいいと思われる時期に結婚した人たちは、出産数は大体2人前後です。これはここ四半世紀くらい変化がありません。ですから出産にふさわしい時期に結婚すれば、子どもを産むということに関してはそんなに大きな違いはないのではないかと思います。ただ、晩婚の場合は、あと1人産もうというときに身体的リスクや、経済的な負担とか精神的な負担と

いうことを考えてしまい、そのことが子どもを産むことへのためらいになっているようです。

## 画期的なスウェーデンの児童手当制度

**深谷** ヨーロッパの場合は、一度少子化が進んだけれども、その後、歯止めがかかったと言われていますが…。

**網野** スウェーデンの場合ですと、2.0を割ってどんどん下がっていった時期がありました。しかし「もっと子どもを産んでもよい環境を作ろう」という政策を掲げて、日本では例えば児童手当制度を画期的に高めました。日本は3人目、4人目になっても特に厚遇されるわけではないんですが、スウェーデンでは子どもが生まれれば生まれるほど手厚く、ときには小学校を終えるくらいまで育児休暇も取れるし、いろんなサービスも含めて手当ての額が十分配慮される政策なんです。

**深谷** それは第一子からですか。

**網野** そうです。しかも何人産んでもいい。

**深谷** スウェーデンでは多くの女性が働いていますが、収入のあるお母さんでも貰えるのですか。

**網野** そういうことです。特に育児休業が大きい。0歳の時点から、子どもをしっかり育てたいというニーズを十分受け入れようということで、お母さんだけではなくお父さんも半年とか1年の休業をとれるわけです。それで仕事を続けながら子育ても十分できるようになった。育児と仕事の両立という点でスウェーデンは画期的なことをやってきました。

**深谷** それは有給なんですか？

**網野** 休業中も有給です。ついこの間までは90%保証でした。

**深谷** 有給でなおかつ児童手当がついてくるんですか。

**網野** 児童手当というのは、お金はもちろんですが、いろいろなサービスも含めて「児童手当」という制度なんです。その後、不況になったり政府が変わったりして、現在は7割



になっているんですが、それでも給料保証7割というのは日本ではないですね。

**深谷** 男性の育児休暇はスウェーデンから始まったと聞いていますが、これはどちらかが選択してできるのでしょうか。

**網野** 選択できます。日本も制度上はそうなっているんですけど、日本では男性が取るとニュースになりますよね。その点スウェーデンは、日本と違ってコンセンサスを生む土壌というか、ずいぶんいい風土があります。

**深谷** お金があるというだけでなく、施設もいろいろ用意されているというわけですね。

**網野** プレスクールといって、幼稚園と保育園が一緒のような施設がほとんど公的な責任でやっている。そのために税収を上げなくてはいけませんから、大変な税負担が一方にはあるのです。高福祉・高負担ということをスウェーデンの国民は納得して、そういう社会を作っているのではないのでしょうか。

**深谷** ヨーロッパはみんなそういう感じでしょうか。

**網野** われわれが参考にできるのはスウェーデンとフランスです。フランスも第2次世界大戦でずっと人口が減って大変でしたし、今も完全に回復しているわけではないのですが、どちらかという子どもと家庭への政策が非常に進んでいる国のひとつだと思います。ただスウェーデンもフランスも、そして日本も財政問題の壁にぶつかっているところですよ。

## 子どもに合わせて器をつくる

**深谷** これは「中央児童福祉審議会」委員としての網野先生にお聞きするのですが、日本の児童手当を3万とか5万円とかにアップしようというような話は出ないのですか。

**網野** 中央児童福祉審議会が、児童福祉法を50年ぶりに改正しようということで先日、中間報告が出ました。その中で私もアップの件を主張した1人なのですが、他にも抜本的にはこの児童手当政策を充実するということが



深谷昌志氏

いちばんいいのではないかという意見が出ています。そして例えば、お金とかサービスとか、きちんとした枠組みを作って、親御さんが子どもの状況やニーズに合わせて、それをどのように使ってもいいということです。保育園に通わせる場合はそこから保育料を出す、ベビーシッターさんをお願いしたいときにはそこから…というようなことで、別枠で全部縦割りでやっていく方が親の選択意識も高まるでしょう。

**深谷** それはでも、かなり発想が違うんですね。つまり費用をいただいて、それをどう使うかは親が決めるということが大事なことになるのではないのでしょうか。日本の場合は、施設はできても親までは配慮がない。

**網野** そうです。ここに入るのはどういうお子さんですか、お子さんを見せてくださいとか、収入を見せてくださいとか言うてくる。発想が逆なんですね。つまり従来は施設という器に子どもをはめ込むやり方でした。これからはいろんな子どもに器を合わせる必要があります。

**深谷** どうも私たちは育児というものを、私的なものと公的なものとに極端に2つに分けてしまっていた。どうしても育児の問題に国が入ってくると、私的なものをもっと認めてほしいという言い方をしてしましますが、先生のおっしゃるようになると、両方がうまくバランスがとれるんですね。

**網野** 本当に大事なのは、子どもは親だけでは育てられない、あるいは育たないというこ

とを社会がどう受け止め、一緒に育てていくかということだと思います。現在は、こうした公的サービスは、何かことが起こってから対応しているというのが一般的です。例えば、お母さんが働きに出たいと思って、ふと気がついたら、日中子どもの世話をする人がいないということになってから動きだしている。そうではなくて、親だけでは育てられない、いろいろな背景がありますから、それを一緒に社会が育てよう、そのためにはお金も出し、設備も整える。あとはどれを利用したいかは親が私的に選択できるようにしようとなるべきだと思います。一方では保育園にものすごいお金をかけています。今の時代は保育園に入っている子どもの方が幸せだなと思うことが多くみられるんです。そういうところに入れない子どもとの環境の格差が開いています。保育園に入っているとかいけないとかに関係なく、すべての子どもに家庭支援をすすめていく方向が大事だと思います。

## 子どもは社会全体で育てる

**深谷** 研究者としての試算では、お子さん1人当たりどのくらいの額だとちょうどいいと思われますか。

**網野** これは理想論ですが、月に8万円。望めば10万円ですね。

**深谷** そうすれば少子化も完全に止まるでしょうね。

**網野** ええ、子どもを増やすという面でも大きいでしょうし、質的に子どもが育ちにくい今の環境を変えていく上でもいい面が出てくると思います。

**深谷** しかしその一方で、お金目当てで子どもを産む人がいるという声が出そうですが…。

**網野** そうですね。私はそれはそれで「いいんじゃないか」という1人なんですけど、それだけ子育てには、心理的にも経済的にも、社会的にも負担が大きいのだと思います。

**深谷** 特に今は親になることの負担が大き

すぎますね。

**網野** それがイコール子どもを産む数が減っていることとどの程度つながっているのかわかりませんが、やはり私は結婚することに魅力を感じる、もっと深く言えば、人とのコミュニケーションにもっと魅力を感じれば、子どもを産みたい、育てたいという気持ちが起こってくると思います。そうしたことをお金の力を借りるというのではないんですが、今の社会は特に母親に冷たすぎると思います。

**深谷** それはどういう意味でしょう？

**網野** 子どもを産んで育てるということはプライベートなことでしょう。好きで結婚して産んで育てているんだから、それでいいんじゃないかという意識の方がまだ高いと思います。その一方で何かことがあると、今の若い親はなどと責任を家庭に転嫁する。しかし子育ての長い歴史のなかで、実の親だけで子どもが育ってきた時代はほとんどなかったと思うんです。

もちろん実の親はいちばん大事ですが、昔の上流階級では、産みの親と育ての親というのはだいたい役割分担していました。乳母など子育て専門の保育者がいました。また平安時代は、今様に言えば子連れ出勤のようなものもありましたし、江戸時代の局のように、自分の子どもを他のところに預けて自分が働くということはずっと昔からあったのです。そういう点で、子どもはいろんな人に囲まれて育っていた。上流階級の限られた人たちだけではなくて、多くの一般の家庭ではもっと現実的に、育児に専業主婦的な形でかわかることは難しかったのです。極端に言えば、産み落としたその晩から作業にいそしまなければならなかったわけですから…。そういった状況、大きなシステムのなかで、名付け親とか、しつけ親とか、いろんな意味の親的なかかわりがありました。それが近代社会、現代社会になって、核家族化して、子どもを育てるのが親しかいなくなってしまったのは、せいぜい百数十年のことです。



## 専業主婦の誕生からまだ1世紀

**深谷** 僕は東京の下町っ子ですから下町のことを覚えています、確かに下町というのは近所みんなで子育てをしていましたね。親は結構仕事で忙しくて、今の「地域で育てる」なんてきれいごとじゃなくて自然にやっていました。たくさんの人たちがかかわっていた。現在のように核家族化してきて、お母さんが子育てに責任をもつようになったのは、つまり専業主婦が誕生したのはせいぜい大正中頃でしょうから、まだ1世紀経っていないんですね。

**網野** 日本の場合はそうだと思います。圧倒的に、固定観念的に男は仕事、女は家庭というのは、そういう状況が作り上げてきた価値観です。以前は「そんなことないでしょう」と声を張り上げるのは常識はずれだったのが女性が高学歴化し、どんどん社会進出するなかで、いろんな立場で見たときにこの固定観念のままだと、女性のハンディキャップが大きすぎます。「シャドウワーク」という言葉がありますが、働けば働くほど、家に帰ってからまたシャドウワークも負担しなければならない。そうしますと、特に共働きの主婦は

家に帰ってきて、疲れているのにまた家のことをやるので、子どもと穏やかに、にこやかになんかつきあっていられない。ときどきヒステリックに怒鳴ったりしてしまいます。

お父さんはお父さんで、どちらかというところ子どものかわいい部分だけをちょっといじくっている。そこで「お母さん大変ですね」という部分をきっかけにして、社会が子育ての支援をしていくべきではないでしょうか。

**深谷** 子育て支援というのは、考え方によると、この半世紀か1世紀か進んできた近代化の思想とは完全に向きを変えていかなければならないですね。どちらかといったら家族化して、子育ての問題は個人の問題というふうに進んできたんですけど、それではもう行き詰まってしまったわけですね。

**網野** それは歴史の必然的な進歩ではないかと思っています。

**深谷** 現実的に言えば、東京など都市の場合、どのようにやっていけば可能性が出てくるのでしょうか。

**網野** 東京の合計特殊出生率は1.12、この低さは尋常ではないと思います。東京という大都会は自由に生きていくには楽しくて最高のところですが、小さい頃から人とかかわるようなことがいちばん奪われている環境の典型

的な部分をもっていると思うんです。こちらから見ればすばらしいけれど、そちらから見れば人間って何なんだろうかと思ってしまう。こうしたディメリットの部分を抱えすぎている。すると「結婚なんてまだまだ」とか、このままの一人暮らしの気楽さ、自由さの方がいいんだというようになってしまうのでしょうか。

**深谷** 確かに近くにコンビニがあって、コインランドリーもある。1人で暮らしていけますね。

そうだと今後、どうしていけばいいのでしょうか。

**網野** 今からでも遅くないという部分と、これから大丈夫かなという部分と両方ありますが、子どもが生まれて育っていくなかで、様々な人々と接触する機会を特に重視した方がいいでしょう。いわゆる「親準備性」ということがかなり欠けていると思います。小さいときから他の子どもと触れ合ったりすることがほとんどないことがずいぶん影響していると思うんです。人間が生まれて育つというのはどういうことかという部分を含めて、温(ぬく)もりとか、呼吸していることがわかる、つまりお互いの姿が見える環境を通して、徐々におとなになっていくという関係、環境が大切なのではないのでしょうか。

**深谷** つまり少子化というのはかなり構造的

な背景があって、ひとつは児童手当のような制度的な保証が必要だということと、もうひとつは人間的な環境作り、この2つを連動しないと歯止めはかかりにくいだろうということです。そうするとむしろ理念とか、哲学みたいな、どう生きていったらいいとか、人とは何だろうかというような議論をやっていかなければならないのでしょうか。

**網野** そうですね。そして、あとは意識ですね。

**深谷** ただ単に数が減ったとか、そういう単純な話ではないということですね。

**網野** 私は人口が減ること自体はそんなに悲観的にみていなくてもいいのではないかなと思っているのです。それ以上に、子どもを産み育てることに魅力を感じなくなっている、つまり結婚も含めて、家庭生活に魅力を感じなくなっていく社会の方が怖いという感じがします。

////////////////////////////////////

## 〔対談を終えて〕

専門ごとに、その専門なりの見方がある。網野教授の話をお聞きしながら、福祉の視点からみた子どもや母親の問題を考えさせられた。これからの教育に、こうした視角は大事になると思った。



## 文献紹介

# 『子どもと家族——21世紀、日本社会に生きる子ども——』

濱野一郎・網野武博編者『子どもと家族——21世紀、日本社会に生きる子ども——』（中央法規出版）から「第3章 子どもが生まれ育つ環境 4—子どもを生み育てる環境を見直す」（p.56～60）を抜粋しました。

## 子どもを生み育てる環境を見直す

### （1）母子関係の密度の濃さ

次に、子どもが生まれ育つ基盤である家庭、そして親の今日の姿を通して、子どもが生まれ育っている状況についてふれることとする。

核家族的関係が主となり、都市化、工業化がすすみ、経済的な水準を示す各種の指標が高まると、必然的に、少なく生んで大切に育てるという親の意識が非常に強まり、乳幼児期から親とくに母親との関係の密度が濃くなっていく。きょうだいや身内、近隣の多くの友達との関係を通じて、自己の主体性が育てられ、社会性を身につけていった過去の子どもたちと異なり、きょうだい関係、近隣関係も限られ、多様な子どもや大人との関係が制限されてしまった。希薄化する近隣関係、縮小する家族関係、そして子ども時代から育まれにくい親準備性の不足からもたらされる育児の単相化は、とくに次の二つの特徴を増幅させていく。まず第一に、子どもを生み育てようとするどの家庭においても、親とりわけ母親の育児不安が生ずる。幅広い心理的親、社会的親が不足する中で、育児書や子どもに関する専門書は、母親の重要な指針となり、あまり気にかけずに済むような子どもの発達や性格行動の細かいところまで関心の対象となり、親子ともにその袋小路に追い込まれたりする危険性を持っている。第二に、幼児期から学童期にかけて、いわんや思春期にかけ

て、徐々に弱まっていくべき母子関係がなお強いまま、子どもの成長を引きずっていく可能性を持ち続ける。とくに他の大人たち、子どもたちとの多様なかわりを経験せずにいると、子どもの自発性、主体性が抑えられ、母子密着、親の過保護、過干渉の影響があらわれやすくなる。

そして今日の社会状況は、一層激しさを増す受験社会、高学歴社会の中で、親子ともども息を抜けない状況が広がりだした。そこには、先にふれたように子どもの受動的権利を保障する実態が、いまや子どもの管理化を促進し、子どもにとっては逃げ場のない状況をつくり出している。すでに早い時期から心身症や不登校等がみられたり、親からいわゆる良い子と思われていた子どもが、学童期以後の不適応や問題行動、また思春期以後の激しい親、学校、社会への拒否行動、さらには成人後の大人社会への不適応や結婚不適応などとなってあらわれてきたりする。しかしこれらのことについて、全く親にその非を求めることはできないことは当然である。これらの問題が生じやすい背景には、第1節でふれたように、今世紀ほど子育ての負担と責任が親とりわけ母親に重くのしかかり、私たち社会が意図するとせざるとにかかわらず、子育て中の親に社会的プレッシャーをかけてきたことがあげられる。この点で現代社会は、子どもを健やかに生み育てる環境に対する配慮が欠きがちであることを踏まえる必要がある。

## (2) 家庭と社会の共同子育て指向

今さらに時代は動き、子どもを生み育てる環境の変化には注目すべきものがある。その流れは、男女共同参画型社会への指向であり、「男は仕事、女は家庭」から「育児と仕事の両立」へのパラダイム変換である。母親の育児負担と責任を求め続けてきた社会の価値観、つまり女性、母親のみがシャドウワークを担うべきというパラダイムへの見直しは、徐々にしかし着実に進んでいる。シャドウワークを担う女性、母親の役割イコール子育てという状況は、女性の高学歴化、能力と適性に応じた多様な社会進出というライフワークへの浸透によって、そしていまや女性の出生率の著しい低下という動向を前に、大きな転換を迫られているといってよい。筆者らは、「男は仕事、女は家庭」のパラダイム確立の歴史的変遷と「育児と仕事の両立」へのパラダイムの転換の可能性を、図3-4のように考えている。

子どもを生み育てやすい環境、ひいては子どもが生まれ育ちやすい環境を見直すとき、19世紀末から20世紀のこれまでの子育ての歴史の特徴と考えられるこれらのパラダイムが、永い永い人類における子育ての歴史からみると、非常に特殊なものではなかったのかという思いがある。子育ては常に両親つまり生物学的親がその中心をなしていることは言うまでもないが、大人社会全体がさまざまななかかわりと支援を繰り返してきた。それがとくに現代において、むしろ社会の進歩と考えられてきた制度の充実化がすすむほどに、子どもを生み育てる環境が、家庭内に閉鎖され、プライバシーというオブラートに包まれ過ぎてしまったといえは過言であろうか。社会や公的な機能の節度ある家庭への介入の配慮こそ、今そして21世紀の重い課題であると思われる。

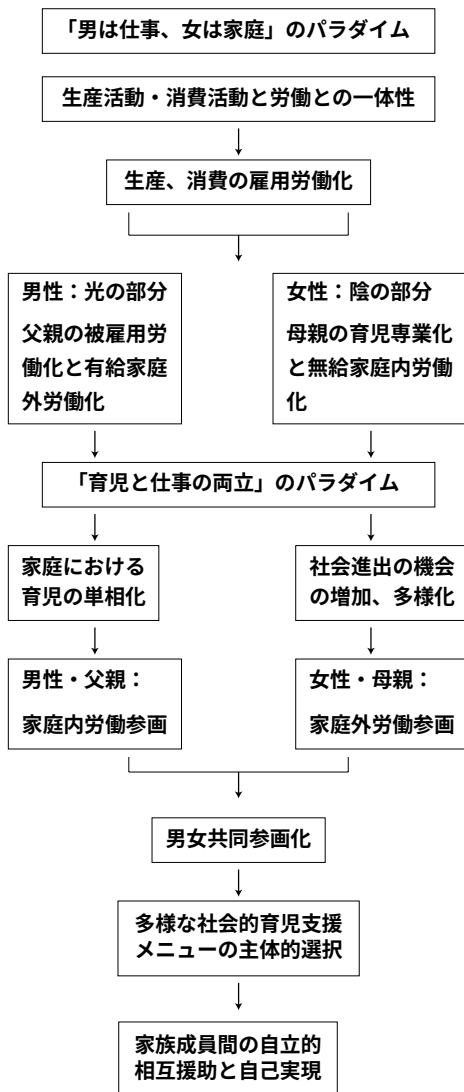
今、日本は本格的に高齢社会を迎えつつあり、これからの社会を支え老人を支える子どもの人口の減少が深刻に受けとめられ、子どものための今後の施策に関して非常に積極的

な対応がすすみ始めた。しかし、それらが単にこのような次善の、第二義的な対応という消極的なものであるならば、それは、かたちを変えた人口増加策にすぎないかもしれない。

若い男性、女性が子どもに魅力を持たなくなったのではなく、人間的温もりや心豊かな感性を意図せざるうちに背後に押しやり、親準備性や子育て準備性を家庭や社会も軽視してきたあまり、今そしてこれから子どもを生み育てる世代の負担感のみが浮き彫りにされてきたように思われる。子どもを生み育てる環境として、プライベートな閉鎖された家庭の扉を地域や社会に開きやすくするとともに、社会は適切な節度あるかわりやインターベンションの機会を広げていくことを求めたい。

今世紀の中葉に制定された児童福祉法の第1条及び第2条の深い理念こそ、約半世紀後の今日、ようやくその真価を発揮できる土壌がつくられたのではないだろうか。子どもを生み育てることに魅力や喜び、楽しみを感じ、子どもたちが親やささまざまな人々の中で育てられ、育つ快さ、幸福感そして自己充足感を覚える社会でありたいと願うものである。

図3-4 「男は仕事、女は家庭」のパラダイム  
確立の歴史の変遷と「育児と仕事の両立」へのパラダイムの転換の可能性



資料：網野武博・新保幸男・尾木まり「家庭養育機能と職業生活との両立に関する研究」日本総合愛育研究所紀要第29集P.87より引用。

## お母さま方をお願い

私どもは今、小さいお子さんをお持ちのお母さまをお願いして、今後の家庭教育に役立つ基礎資料を得るために、お母さまのライフスタイルや生活実感をうかがう調査を全国的な規模で企画しております。

お忙しいところをまことに申し訳ございませんが、なにとぞ協力のほど、お願い申し上げます。以下の用紙にご記入の上、封をして、1週間くらいのうちに、お子さまに学校や園までお持ちください。

なお、ご記入は全て無記名でお願いし、またご記入いただいた内容は大型コンピュータで処理しますので、結果についてご迷惑をおかけすることは決してありません。どうぞよろしくお願い申し上げます。

現代母親問題研究会代表  
東京学芸大学教授 深谷 和子  
0423-25-2111 (内線2900)

なお、この件に関するお問い合わせは、下記までお願い致します。

事務局担当／中澤 智恵  
0423-25-2111 (内線2901)

単位：パーセント

### 1 まず、お子さんのことをお聞かせください。

1) ① お子さんの数は…………… ( ) 人

| 1人   | 2人   | 3人   | 4人以上 |
|------|------|------|------|
| 14.8 | 57.6 | 23.6 | 4.0  |

② 一番下のお子さんは…………… ( ) 歳

| 0～2歳 | 3～5歳 | 6～7歳 |
|------|------|------|
| 28.4 | 48.8 | 22.8 |

→ 1. 入園前 35.2  
2. 保育園 10.7  
3. 幼稚園 43.6  
4. 小学校 ( 1 ) 年生 10.5



## ● 資料 調査票見本および集計結果

2) あなたには、近くにいて（同居も含む）、ときどき家事やお子さんの面倒を見てくださる方がおられますか。（あてはまる項目の全てに○印、または数字をご記入ください）

|                     |         |      |           |
|---------------------|---------|------|-----------|
| 35.9                | 64.1    |      |           |
| (1. いない             | 2. いる)  |      |           |
|                     | ↓       |      |           |
| 1. あなたの両親（一方でも）……   | (1. はい  | 33.4 | 66.6      |
|                     | 2. いいえ) | 25.9 | 74.1      |
| 2. ご主人の両親（一方でも）……   | (1. はい  |      |           |
|                     | 2. いいえ) |      |           |
| 3. 友人……（ ）人         | いる人     | 19.7 | いない人 80.3 |
| 4. 親戚（ご両親以外の）……（ ）軒 | いる人     | 11.2 | いない人 88.8 |
| 5. その他（具体的に         |         |      |           |
| 2.0                 |         |      |           |

**2** お母さまの外出について、お聞かせください。

1) あなたが平日、近くの店やスーパーに買い物に行かれるとき、「一番小さいお子さん」をどうなさいますか。（主なもの1つに、○をおつけください）

|                                 |      |
|---------------------------------|------|
| 1. 家族に預ける                       | 5.2  |
| 2. 友人や近所の人に預ける                  | 0.3  |
| 3. 子どものいないときに行く                 | 29.3 |
| 4. 子どもに留守番させて行く（きょうだいと一緒にの留守番も） | 6.1  |
| 5. 子どもと一緒に行く                    | 59.1 |

2) あなたが美容院など（2、3時間かかる用事）に行かれるとき、「一番小さいお子さん」をどうなさいますか。（主なもの1つに、○をおつけください）

|                                 |      |
|---------------------------------|------|
| 1. 家族に預ける                       | 55.1 |
| 2. 友人や近所の人に預ける                  | 1.4  |
| 3. 子どものいないときに行く                 | 30.7 |
| 4. 子どもに留守番させて行く（きょうだいと一緒にの留守番も） | 2.7  |
| 5. 子どもと一緒に行く                    | 10.1 |

3) あなたは（一番小さいお子さんを連れずに）お友だちと、買い物や遊びなどに出かけることがありますか。

|             |             |           |            |
|-------------|-------------|-----------|------------|
| ひんぱんに<br>ある | 月に何度か<br>ある | たまに<br>ある | ほとんど<br>ない |
| 2.3         | 7.6         | 32.5      | 57.6       |

## 4) あなたは、友人とのつきあい等で、夜に外出されることがありますか。

| ひんぱんに<br>ある | 月に何度か<br>ある | たまに<br>ある | ほとんど<br>ない |
|-------------|-------------|-----------|------------|
| 0.5         | 2.7         | 25.5      | 71.3       |

## 5) あなたは、友人とカラオケに行くことがありますか。

| ひんぱんに<br>ある | 月に何度か<br>ある | たまに<br>ある | ほとんど<br>ない |
|-------------|-------------|-----------|------------|
| 0.1         | 0.7         | 25.7      | 73.5       |

## 6) あなたは、友人とお酒を飲む機会がありますか。

(お酒の飲めない方も、お酒の出る席などについてお答えください)

| ひんぱんに<br>ある | 月に何度か<br>ある | たまに<br>ある | ほとんど<br>ない |
|-------------|-------------|-----------|------------|
| 0.1         | 2.3         | 30.0      | 67.6       |

## 7) あなたは友人と、泊まりがけの旅行に出かけることがありますか。

(・ある 12.0      ・ない 88.0)

年に(1.4)回くらい → 1回(1.5)泊くらい(\*1泊が68.5%)  
(\*1回が76.2%)

## 3 次にお宅の日常のことについて、お聞かせください。

## 1) あなたのご家庭では朝食に、主に何を召し上がりますか。

- ほとんど火を使わない朝食(トースト、コーンフレーク、牛乳、コーヒー、ジュース、インスタント食品の利用など) 19.7
- しっかり火を使う朝食(煮たり、焼いたり、ゆでたりなど、調理したもの、ご飯、目玉焼き、味噌汁、焼き魚その他) 43.2
- 日によって、または家族によって、バラバラ 37.1

## 2) あなたは、外出して帰宅が遅くなるときに、ご家族の夕食をどうされますか。

たいていは

- 作って出かける 49.8
- 家族に頼む 26.1
- 外食や出前を頼んでもらう 14.5
- その他(具体的に 9.6 )

## ● 資料 調査票見本および集計結果

## 3) 家族の夕食を、出前や「ほか弁」などのお弁当で間に合わせることがありますか。

(おかずを、買ってきた惣菜だけで間に合わせのような場合も含めます)

| 毎週1度以上<br>する | ときどき<br>する | ごくたまに<br>する | 全然したことが<br>ない |
|--------------|------------|-------------|---------------|
| 2.2          | 18.0       | 61.3        | 18.5          |

## 4) お宅では、洗濯機をどのくらい使われますか。

| 毎日2回か<br>それ以上 | 毎日ほぼ<br>1回 | 2日に<br>1回くらい | 週に<br>1、2回 |
|---------------|------------|--------------|------------|
| 47.6          | 49.1       | 2.6          | 0.7        |

## 5) 掃除機は、どのくらい使われますか。

| 毎日2回か<br>それ以上 | 毎日ほぼ<br>1回 | 2日に<br>1回くらい | 週に<br>1、2回 |
|---------------|------------|--------------|------------|
| 8.0           | 58.5       | 21.3         | 12.2       |

## 6) あなたは次のうち、どちらにあてはまりますか。

| 家にいるのが<br>好き | どちらかという<br>家にいるのが好き | どちらかという<br>外出するのが好き | 外出するのが<br>好き |
|--------------|---------------------|---------------------|--------------|
| 5.5          | 42.3                | 45.6                | 6.6          |

## 4) ご主人の家事参加について、お聞かせください。(ご主人が不在などの場合は、5) にお進みください)

ご主人は、家事や育児にどのくらい参加していただけますか。

|                          | いつも<br>する | 半分くらい<br>する | たまに<br>する | 全く<br>しない       |
|--------------------------|-----------|-------------|-----------|-----------------|
| 1. 朝食を作ること               | 2.1       | 2.6         | 23.0      | 72.3            |
| 2. 夕食を作ること               | 0.7       | 1.8         | 34.9      | 62.6            |
| 3. お風呂の掃除                | 4.5       | 6.3         | 42.3      | 46.9            |
| 4. 洗濯物をたたむ               | 0.7       | 2.1         | 15.8      | 81.4            |
| 5. 日常の食事の買い物             | 3.4       | 9.7         | 51.9      | 35.0            |
| 6. 幼稚園や保育所の送り(または<br>迎え) | 1.9       | 2.6         | 53.4      | 31.2            |
|                          |           |             |           | あてはまらない<br>10.9 |

**5 あなたは、次のようなことが、どのくらい好きですか、または負担ですか。**

|                              | とても<br>好き | わりと<br>好き | 少し<br>負担 | とても<br>負担 |           |
|------------------------------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1. 料理……………                   | 8.3       | 47.1      | 38.2     | 6.4       |           |
| 2. 洗濯……………                   | 20.4      | 60.8      | 16.9     | 1.9       |           |
| 3. 掃除……………                   | 9.1       | 44.0      | 40.9     | 6.0       |           |
| 4. 夫の世話……………                 | 4.3       | 41.3      | 44.7     | 7.3       | 不在<br>2.4 |
| 5. 子どもの世話……………               | 12.0      | 56.1      | 30.0     | 1.9       |           |
| 6. 親戚とのつきあい（夫の親を<br>含む）…………… | 1.8       | 30.3      | 53.8     | 14.1      |           |

**6 あなたは次のような時間を、現在より増やしたいとお思いですか、それとも、このままでいいですか。**

|                         | うんと<br>増やしたい | 少し<br>増やしたい | このままで<br>いい | むしろ<br>減らしたい | 不在  |
|-------------------------|--------------|-------------|-------------|--------------|-----|
| 1. 夫と話す時間……………          | 11.1         | 32.7        | 51.9        | 1.7          | 2.6 |
| 2. 子どもと過ごす時間……………       | 9.8          | 24.4        | 62.3        | 3.5          |     |
| 3. 睡眠時間……………            | 18.1         | 38.2        | 43.2        | 0.5          |     |
| 4. 自分自身で使える（自由な）時間…………… | 29.1         | 47.0        | 23.9        | 0.0          |     |
| 5. 友人とつきあう時間……………       | 17.3         | 49.8        | 32.4        | 0.5          |     |
| 6. 家事をていねいにする時間……………    | 11.0         | 44.2        | 42.7        | 2.1          |     |

## ● 資料 調査票見本および集計結果

**7** (この用紙を持ち帰られた) お子さんをお育てになっている気持ちについて、うかがいます。

|                                    | とても<br>そう | 少し<br>そう | あまり<br>そうでない | 全く<br>そうでない |
|------------------------------------|-----------|----------|--------------|-------------|
| 1. ときどき子どもをヒステリックに叱ってしまう……………      | 19.5      | 59.2     | 19.0         | 2.3         |
| 2. 自分がよい母親かどうか、自信が持てない……………        | 11.1      | 50.5     | 33.2         | 5.2         |
| 3. 子どもが思い通りに育っていないと感じる……………        | 4.7       | 33.7     | 49.9         | 11.7        |
| 4. 育児に明け暮れていて、社会から取り残されてしまうように思う…… | 6.1       | 25.9     | 46.0         | 22.0        |
| 5. 自分のやりたいことができなくて、焦りを感じる……………     | 8.5       | 33.0     | 43.4         | 15.1        |

**8** 次のA B 2つの意見のうち、あなたのお気持ちは、どちらに近いですか。近い方のお気持ちに、○をおつけください。

|                                |      |
|--------------------------------|------|
| 1) A. 結婚生活に、必ずしも子どもはいなくていい     | 20.6 |
| B. 結婚生活には、ぜひ子どもがほしい            | 79.4 |
| 2) A. 子育ては、自分に向いている            | 54.2 |
| B. 子育ては、自分に向いていない              | 45.8 |
| 3) A. 自分はあまり母性的な女性ではない         | 44.3 |
| B. 自分はわりと母性的な女性である             | 55.7 |
| 4) A. いい母親であろうとして、かなり無理をしている   | 11.5 |
| B. とりわけ、いい母親であろうとはしていない        | 88.5 |
| 5) A. 独身時代から、ずっと子ども好きだった       | 53.0 |
| B. あまり子ども好きな方ではない              | 47.0 |
| 6) A. 外出先では、できれば独身の女性のように見られたい | 16.5 |
| B. 外出先で、子どものいる女性と思われてもかまわない    | 83.5 |

- |                                           |      |
|-------------------------------------------|------|
| 7) A. (幼児の母親がフルタイムの仕事をするのは)子どもの成長にマイナスが多い | 84.3 |
| B. (幼児の母親がフルタイムの仕事をするのは)子どもの成長にプラスが多い     | 15.7 |
| 8) A. 赤ん坊の頃から保育所に預けるのは、子どもがかawaiiそう       | 85.3 |
| B. 赤ん坊の頃から保育所に預けるのは、全然かawaiiそうでない         | 14.7 |
| 9) A. 日頃、子どもを十分世話することができないでいる             | 44.2 |
| B. 日頃、子どもには十分手をかけて育てている                   | 55.8 |
| 10) A. もしかしたら、子どもを十分愛していないかもしれない          | 25.4 |
| B. 子どもを、十分愛している自信がある                      | 74.6 |

**9** 次に男性と女性の生き方などについて、お考えをお聞きます。

- |                                                                                    | とても<br>そう思う | わりと<br>そう思う | あまりそう<br>思わない | 全然そう<br>思わない |
|------------------------------------------------------------------------------------|-------------|-------------|---------------|--------------|
| 1. 男性には、家事に協力するより、外でバリ<br>バリ仕事をしてほしい……………                                          | 7.2         | 33.8        | 51.8          | 7.2          |
| 2. やはり男の子は男の子らしく、女の子は女の<br>子らしく育てた方がいい……………                                        | 16.1        | 44.0        | 34.4          | 5.5          |
| 3. たいていの女性は、任されれば、大企業の課<br>長の仕事でも十分こなせる……………                                       | 12.7        | 45.6        | 38.8          | 2.9          |
| 4. 結婚した女性が、昔の異性の友人や職場の異<br>性と食事に行ったり、(軽くにせよ)飲みに<br>行ったりするのは、できるだけ避けるべきで<br>ある…………… | 10.3        | 30.5        | 48.3          | 10.9         |
| 5. 結婚したら、(男女の関係はなくても)配偶<br>者以上に心のきずなの強い「異性の友人」と<br>の友人関係は避けるべきだ……………               | 15.4        | 41.3        | 37.1          | 6.2          |
| 6. 子育てに忙しくて経済的にゆとりがない時期<br>でも、母親は、少しくらい自分のおしゃれの<br>ための服や化粧品を買ってよい……………             | 27.7        | 51.9        | 16.9          | 3.5          |

## ● 資料 調査票見本および集計結果

**10** 次に、あなたの日常について、お聞かせください。**1) 外出の予定がなくとも、朝起きたとき、お化粧をされますか。**

|                        |      |
|------------------------|------|
| 1. 化粧水程度               | 52.7 |
| 2. ファンデーションや口紅を薄くつける程度 | 36.0 |
| 3. しっかり化粧する            | 11.3 |

**2) マニキュアをすることがありますか。**

|           |            |            |           |
|-----------|------------|------------|-----------|
|           | よくして<br>いた | ときどき<br>した | 1度も<br>ない |
| 1. 独身時代…… | 27.5       | 59.5       | 13.0      |
|           | よくして<br>いる | ときどき<br>する | 1度も<br>ない |
| 2. 現在……   | 5.1        | 44.9       | 50.0      |

**3) 外でお酒を飲みますか。(量でなく、主として回数でお答えください)**

|           |           |            |           |
|-----------|-----------|------------|-----------|
|           | よく<br>飲んだ | たまに<br>飲んだ | 1度も<br>ない |
| 1. 独身時代…… | 36.5      | 59.4       | 4.1       |
|           | よく<br>飲む  | たまに<br>飲む  | 1度も<br>ない |
| 2. 現在……   | 2.0       | 52.0       | 46.0      |

**4) できるだけ流行に遅れないように、服装や髪型に気をつけておられますか。**

|           |              |              |                |               |
|-----------|--------------|--------------|----------------|---------------|
|           | とても<br>そうだった | わりと<br>そうだった | あまり<br>そうでなかった | 全然<br>そうでなかった |
| 1. 独身時代…… | 18.8         | 46.8         | 29.7           | 4.7           |
|           | とても<br>そう    | わりと<br>そう    | あまり<br>そうでない   | 全然<br>そうでない   |
| 2. 現在……   | 2.4          | 27.7         | 51.9           | 18.0          |

**5) コンサートやショッピングに行って、パーツと気持ちを発散させることがありますか。**

|           |            |            |           |
|-----------|------------|------------|-----------|
|           | よくして<br>いた | ときどき<br>した | 1度も<br>ない |
| 1. 独身時代…… | 42.1       | 53.0       | 4.9       |
|           | よくして<br>いる | ときどき<br>する | 1度も<br>ない |
| 2. 現在……   | 4.3        | 67.3       | 28.4      |

**11** 次のようにお感じになることがありますか。(ここで「子ども」とは、この用紙を持ち帰られたお子さんを指しています)

- |                                                      | とても<br>そう思う | 少し<br>そう思う | あまりそう<br>思わない | 全然そう<br>思わない |                |
|------------------------------------------------------|-------------|------------|---------------|--------------|----------------|
| 1. 休日、友人とのつきあいなどで、夫に<br>子どもを預けて外出するのは、気がひ<br>ける…………… | 14.0        | 43.8       | 27.5          | 8.6          | あてはまらない<br>6.1 |
| 2. 夜、夫に子どもを預けて外出するのは、<br>気がひける……………                  | 28.2        | 39.1       | 18.1          | 6.8          | 7.8            |
| 3. 夫に夕食を作ってもらうのは、気がひ<br>ける……………                      | 13.8        | 30.5       | 35.0          | 12.7         | 8.0            |
| 4. 夫に居間を掃除してもらうのは、気が<br>ひける……………                     | 13.2        | 28.8       | 37.8          | 13.4         | 6.8            |
| 5. 夫の働いたお金から「へそくり」をす<br>るのは、気がひける……………               | 6.8         | 17.1       | 44.8          | 22.6         | 8.7            |
| 6. 全部夫の働くお金で生活していくのは、<br>気がひける……………                  | 3.5         | 16.2       | 38.2          | 36.1         | 6.0            |
| 7. 外出していても、夕方になると帰る時<br>間が気になって、ゆっくりできない……………        | 40.2        | 43.6       | 13.0          | 3.2          |                |
| 8. 家事に手を抜くくらいなら、おけいこ<br>やPTAの役員など、辞めた方がいい……………       | 9.9         | 26.6       | 52.9          | 10.6         |                |
| 9. 母親が、カラオケ好きの友人たちとカ<br>ラオケルームへ通うのは感心しない……………        | 9.3         | 24.6       | 48.1          | 18.0         |                |
| 10. 母親になれば、独身の若い人のような<br>お化粧や服装をするべきでない……………         | 3.1         | 13.7       | 53.5          | 29.7         |                |



## ● 資料 調査票見本および集計結果

**12** 経済のことについても、少しお聞かせください。

- 1) 化粧品やご自分の洋服、趣味などに、あなたは1か月に、どのくらいお金を使われますか。

| 5千円<br>以内 | 1万円<br>くらい | 1万5千円<br>くらい | 2万円<br>くらい | 3～4万円<br>くらい | 5万円<br>以上 |
|-----------|------------|--------------|------------|--------------|-----------|
| 48.4      | 27.8       | 9.1          | 8.8        | 4.7          | 1.2       |

- 2) あなたには、定期預金や定額預金など、ご自分名義の預貯金がありますか。

| (1. はい | 2. いいえ) |
|--------|---------|
| 70.8   | 29.2    |

- 3) あなたには、「へそくり」がありますか。

| (1. はい | 2. いいえ) |
|--------|---------|
| 37.9   | 62.1    |

**13** 最後に、あなたやご家族のことをお聞かせください。

- 1) あなた（お母さまご自身）の年齢は

( ) 歳

- 2) ご主人と同居しておられますか。

|                    |      |
|--------------------|------|
| 1. 同居している          | 94.8 |
| 2. 同居していない（単身赴任など） | 2.9  |
| 3. 夫はいない           | 2.3  |

- 3) あなたのご両親や、養父母はどこにお住まいですか。

## ① あなたのご両親（一方でも）

|                   |                   |       |
|-------------------|-------------------|-------|
| 1. 同居             | 2. 歩いていけるくらいの所にいる |       |
| 8.0               | 14.7              |       |
| 3. 電車で1、2時間の距離にいる | 4. それより遠くにいる      | 5. 死亡 |
| 41.0              | 33.4              | 2.9   |

## ② ご主人のご両親（一方でも）

|                   |                   |       |
|-------------------|-------------------|-------|
| 1. 同居             | 2. 歩いていけるくらいの所にいる |       |
| 17.5              | 14.0              |       |
| 3. 電車で1、2時間の距離にいる | 4. それより遠くにいる      | 5. 死亡 |
| 28.1              | 34.7              | 5.7   |

## 4) 同居のお年寄りがおられる方にうかがいます。その方はお元気ですか。

(お二人またはそれ以上の場合は、手のかかるほうの方について教えてください。)

また、核家族の場合は、「5. 同居していない」に○をおつけください)

|                                 |      |
|---------------------------------|------|
| 1. 現役（または家族の世話をしてくれている）         | 19.7 |
| 2. 現役ではないが、自分の身の回りのことは十分自分でしている | 11.1 |
| 3. 少しからだが弱っている、または、からだが少し不自由    | 2.0  |
| 4. 介護が必要                        | 1.9  |
| 5. 同居していない                      | 65.3 |

## 5) お宅は、どういう形のご家庭ですか。

|                                   |      |
|-----------------------------------|------|
| 1. 夫の収入による家庭（妻は専業主婦）              | 69.7 |
| 2. 夫の収入が中心の共働き家庭（妻の収入が夫よりかなり低い）   | 20.4 |
| 3. 収入の面でほとんど平等な共働き家庭（夫婦の収入の差が少ない） | 6.6  |
| 4. その他（単親家庭など）                    | 3.3  |

## 6) ① あなたのご職業は

|           |      |
|-----------|------|
| 1. 専業主婦   | 67.0 |
| 2. フルタイム  | 7.2  |
| 3. パートタイム | 14.7 |
| 4. 自営業    | 7.6  |
| 5. その他（ ） | 3.5  |

## ② ご主人のご職業は（ご不在の場合は④へ）

|                 |      |
|-----------------|------|
| 1. 会社員・公務員      | 79.0 |
| 2. 自営業（商業・農業など） | 16.1 |
| 3. その他（ ）       | 4.9  |

## ③ ご主人は、どんな方ですか。（ご不在の場合は④へ）

|                    |      |
|--------------------|------|
| 1. 仕事中心（モーレツな仕事人間） | 7.7  |
| 2. どちらかといえば仕事中心    | 39.7 |
| 3. 仕事も家庭も同じくらい     | 44.2 |
| 4. どちらかといえば家庭中心    | 6.6  |
| 5. 家庭第一            | 1.8  |

## ④ あなたは、いかがですか。

|                 |      |
|-----------------|------|
| 1. 仕事中心         | 1.0  |
| 2. どちらかといえば仕事中心 | 3.2  |
| 3. 仕事も家庭も同じくらい  | 16.1 |
| 4. どちらかといえば家庭中心 | 41.9 |
| 5. 家庭第一         | 37.8 |

## ● 資料 調査票見本および集計結果

7) 以下は、もしお差し支えなければ、お書きください。

① あなたが最後に学校を卒業されたのは、何歳の時でしたか。 ( ) 歳

② ご主人が最後に卒業されたのは、何歳の時でしたか。 ( ) 歳

|    | 高卒   | 短大等卒 | 四大卒以上 |
|----|------|------|-------|
| 本人 | 50.1 | 35.7 | 14.2  |
| 夫  | 44.2 | 11.5 | 44.3  |

8) お差し支えなければ、あなたのご家庭の暮らし向きをお聞かせください。

|               |              |               |            |
|---------------|--------------|---------------|------------|
| かなり<br>ゆとりがある | 少し<br>ゆとりがある | あまり<br>ゆとりがない | ゆとりが<br>ない |
| 2.3           | 37.9         | 44.2          | 15.6       |

9) お差し支えなければ、お書きください。あなたの年収は、ボーナスを含めてどのくらいですか。

年収はほぼ ( ) 万円くらい

10) トータルに考えて、あなたは現在のご自分の生活に満足しておいでですか。

|           |           |          |           |            |
|-----------|-----------|----------|-----------|------------|
| とても<br>満足 | かなり<br>満足 | まあ<br>満足 | やや<br>不満足 | かなり<br>不満足 |
| 3.8       | 9.2       | 50.0     | 28.1      | 8.9        |

11) もし生まれかわることがあったら、あなたは、男性と女性のどちらに生まれたいですか。

|          |                |                |          |
|----------|----------------|----------------|----------|
| 絶対<br>男性 | どちらかと<br>いえば男性 | どちらかと<br>いえば女性 | 絶対<br>女性 |
| 4.1      | 17.2           | 57.3           | 21.4     |

14) 日頃お感じになっていることがありましたら、何でもご自由にお書きください。

～ご協力、どうもありがとうございました。～